

2016年3月

株式会社さえきホールディングス
山 岩 市 教 育 委 員 会
公益財団法人山梨文化財研究所

日下部遺跡(第6次調査)

— 店舗建設に伴う発掘調査報告書 —

2016年3月

株式会社さえきホールディングス
山梨市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

例　　言

1. 本書は、山梨県山梨市七日市場に所在する、日下部遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、商業店舗建設に伴い、株式会社さえきホールディングスの委託を受けた公益財團法人山梨文化財研究所が発掘調査および整理作業にあたった。
3. 発掘調査は、平成24年4月25日～6月25日まで実施した。
4. 本書の執筆・編集は、宮澤公雄が行った。
5. 本書に掲載の遺構写真は宮澤が、遺物写真は中川美治、宮澤が撮影した。
6. 発掘調査および整理作業のうち一部の調査・業務について、以下の機関や方々に委託ならびに協力を得た。

石材鑑定　河西学（公益財團法人山梨文化財研究所）	基準点・航空測量　株式会社テクノプラニング
--------------------------	-----------------------
7. 本書ならびに発掘調査に関わる記録図面・写真・出土遺物等は、山梨市教育委員会が保管している。
8. 本遺跡の発掘調査および整理作業にあたっては、以下の諸機関・各位から多大なるご指導・ご協力を賜った。ここに記して深く感謝の意を表する次第である。

山梨市教育委員会、山梨県学術文化財課	雨宮聰、稻垣自由、河西学、中山誠二、平野修、保坂和博、三澤達也
--------------------	---------------------------------
9. 参考文献は、執筆者順に第4章末にまとめて掲載した。

凡　例

1. 遺跡全体におけるX・Y座標は、世界測地系平面直角座標第VII系のX = -33,190.000、Y = 17,760.000（北緯35度42分02秒、東経138度41分46秒）を基点（X = 0、Y = 0）とした座標値である。なお、各遺構平面図中に示す方位は、すべて座標北を示している。

なお、真北方向角は-0度6分52秒となる。

2. 遺構・遺物実測図の縮尺は、以下の通りである。

遺構

竪穴住居	—	1/60
カマド	—	1/30
竪穴状遺構	—	1/60
掘立柱建物跡	—	1/60
溝跡	—	1/40、1/50、1/80、1/100
土坑・ピット	—	1/30
焼土遺構	—	1/30
集石土坑	—	1/30
集石遺構	—	1/60
風倒木痕	—	1/60
弥生土器集中区	—	1/40

遺物

土師器・須恵器・繩文土器・陶器	—	1/3、1/4
土製品	—	1/2
金属製品	—	1/2
古銭	—	1/1
石製品	—	1/1、1/2、1/3

4. 遺構図版中の遺物分布図のマークは以下の通りである。ただし、マークの向きは平面図については北向き、垂直分布図は垂直方向を基準としている。

● 土師器	□ 須恵器	▲ 弥生土器	■ 繩文土器	△ 陶器・磁器
★ 金属製品	○ 土製品	◆ 石器・石製品		

5. 遺物図版中で使用したスクリーントーンの凡例は、以下の通りである。

■■■ 内面黒色	■■■ 転用窓	■■■ 使用範囲	■■■ 土製品 削れ口
----------	---------	----------	-------------

6. 遺構同一図版中の標高は、原則として統一しているが、一部異なるものもあり明記してある。

7. 出土遺物分布図中の出土遺物実測図は、任意の縮尺であり統一していない。また、接合関係を表現した線のうち、実線は接合関係にあるもの、破線は同一個体と判断されるが直接接合しないものを表す。

8. 遺構図版中および遺物観察表中の色調名は、農林水産省技術会議事務所監修 1990『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄）によっている。

9. 本書で用いた地図は、山梨市役所発行の「山梨市全国」(1:10,000)、「山梨市都市計画基本図」(1:2,500)である。

10. 本遺跡の発掘調査成果については、以下の文献において概要を報告しているが、本書をもって正式な報告とする。

目 次

例 言

凡 例

第1章 序 説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第3節 調査方法	2
第4節 遺跡概要	2
第5節 基本層序	3
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 遺跡の地理的位置	4
第2節 遺跡の歴史的環境	4
第3章 遺構と遺物	13
第1節 堅穴住居跡	13
第2節 堅穴状遺構	16
第3節 掘立柱建物跡	16
第4節 土坑・ピット	18
第5節 集石土坑	19
第6節 焼土遺構	19
第7節 溝 跡	20
第8節 集石遺構	24
第9節 風倒木痕	25
第10節 弥生土器集中区	25
第4章 総 括	33
第1節 集落のあり方について	33
第2節 出土遺物について	34
参考文献	35
おわりに	35

表 目 次

第1表 土坑・ピット一覧表	26	第4表 出土遺物観察表（石器）	32
第2表 出土遺物観察表（土器）	28	第5表 出土遺物観察表（金属製品）	32
第3表 出土遺物観察表（土製品）	30		

図版目次

第1図 遺跡基本層序	3	第12図 3号住居（1）	40
第2図 日下部遺跡調査区位置図	5	第13図 3号住居（2）	41
第3図 試掘・調査区配置図	6	第14図 4号住居・1号堅穴状遺構（1）	42
第4図 遺跡全体図	7・8	第15図 4号住居・1号堅穴状遺構（2）	43
第5図 日下部遺跡全体図	9	第16図 5号住居（1）	44
第6図 遺跡の位置と周辺の遺跡	11	第17図 5号住居（2）	45
第7図 日下部遺跡堅穴住居主軸方位	34	第18図 6号住居（1）	46
第8図 1号住居（1）	36	第19図 6号住居（2）	47
第9図 1号住居（2）	37	第20図 1号掘立柱建物	48
第10図 2号住居（1）	38	第21図 2号掘立柱建物	49
第11図 2号住居（2）	39	第22図 3号掘立柱建物	50

第23図	土坑・ピット(1)	51	第40図	溝(5)	68
第24図	土坑・ピット(2)	52	第41図	1号集石遺構、1号風倒木痕	69
第25図	土坑・ピット(3)	53	第42図	弥生土器集中区	70
第26図	土坑・ピット(4)	54	第43図	出土遺物(1)	71
第27図	土坑・ピット(5)	55	第44図	出土遺物(2)	72
第28図	土坑・ピット(6)	56	第45図	出土遺物(3)	73
第29図	土坑・ピット(7)	57	第46図	出土遺物(4)	74
第30図	土坑・ピット(8)	58	第47図	出土遺物(5)	75
第31図	土坑・ピット(9)	59	第48図	出土遺物(6)	76
第32図	土坑・ピット(10)	60	第49図	出土遺物(7)	77
第33図	土坑・ピット(11)	61	第50図	出土遺物(8)	78
第34図	土坑・ピット(12)、1号集石土坑	62	第51図	出土遺物(9)	79
第35図	2・3号集石土坑、1号焼土遺構	63	第52図	出土遺物(10)	80
第36図	溝(1)	64	第53図	出土遺物(11)	81
第37図	溝(2)	65	第54図	出土遺物(12)	82
第38図	溝(3)	66	第55図	出土遺物(13)	83
第39図	溝(4)	67	第56図	出土遺物(14)	84

写真図版目次

国版 1	1 日下部遺跡航空写真(1)	2	5号住居遺物出土状況(1)	国版11	1 Pit15 完掘
	2 日下部遺跡航空写真(2)	3	5号住居遺物出土状況(2)		2 Pit38 完掘
国版 2	1 調査前	4	5号住居遺物出土状況(3)		3 Pit39 完掘
	2 西区掘削作業	5	5号住居遺物出土状況(4)		4 1号集石土坑完掘
	3 東区掘削作業	6	5号住居カマド完掘		5 1号集石土坑発出状況
	4 遺構確認作業	7	5号住居カマド遺物出土状況		6 2号集石土坑完掘
	5 西区調査完了状況				7 2号集石土坑発出状況
	6 1号住居完掘	8	6号住居完掘		8 3号集石土坑発出状況
	7 1号住居遺物出土状況(1)	国版 7	6号住居遺物出土状況(1)	国版12	1 1号焼土遺構完掘
	8 1号住居遺物出土状況(2)	2	6号住居遺物出土状況(2)		2 1号溝完掘
国版 3	1 1号住居遺物出土状況(3)	3	6号住居遺物出土状況(3)		3 5号溝完掘
	2 1号住居カマド完掘	4	6号住居カマド完掘		4 6・7号溝完掘
	3 1号住居カマド遺物出土状況	5	6号住居カマド遺物出土状況		5 8号溝完掘
	4 2号住居完掘	6	1号掘立柱建物完掘		6 9・10号溝完掘
	5 2号住居遺物出土状況(1)	7	2号掘立柱建物完掘		7 11号溝完掘
	6 2号住居遺物出土状況(2)	8	1号土坑完掘	国版13	1 14号溝完掘
	7 2号住居遺物出土状況(3)	国版 8	1 3号土坑完掘		2 15号溝完掘
	8 2号住居遺物出土状況(4)	2	8号土坑完掘		3 16号溝完掘
国版 4	1 2号住居カマド完掘	3	9号土坑完掘		4 17号溝完掘
	2 2号住居カマド遺物出土状況	4	9号土坑遺物出土状況		5 1号集石遺構完掘
	3 3号住居完掘	5	13号土坑完掘		6 1号風倒木痕完掘
	4 3号住居遺物出土状況(1)	6	14・16号土坑、Pit11完掘		7 日下部遺跡石柱
	5 3号住居遺物出土状況(2)	7	15号土坑完掘		8 日下部遺跡石碑
	6 3号住居遺物出土状況(3)	国版 9	17号土坑完掘	国版14	1 調査風景(1)
	7 3号住居遺物出土状況(4)	2	27号土坑・Pit21完掘		2 調査風景(2)
	8 3号住居カマド完掘	3	28・29・30号土坑完掘		3 調査風景(3)
国版 5	1 3号住居カマド遺物出土状況	4	33号土坑完掘		4 調査風景(4)
	2 4号住居・1号堅穴状遺構完掘	5	36号土坑完掘		5 見学会風景(1)
	3 4号住居遺物出土状況(1)	6	40号土坑完掘		6 見学会風景(2)
	4 4号住居遺物出土状況(2)	国版10	7 43号土坑完掘		7 見学会風景(3)
	5 4号住居遺物出土状況(3)	1	43号土坑遺物出土状況(2)	国版15	1 出土遺物(1)
	6 4号住居・1号堅穴状遺構遺物出土状況	2	44号土坑完掘	国版16	1 出土遺物(2)
	7 4号住居カマド完掘	3	48号土坑・Pit28完掘	国版17	1 出土遺物(3)
	8 4号住居カマド遺物出土状況	4	53号土坑完掘	国版18	1 出土遺物(4)
	9 4号住居カマド完掘	5	59号土坑完掘	国版19	1 出土遺物(5)
	10 4号住居カマド遺物出土状況	6	Pit 4・5・6完掘	国版20	1 出土遺物(6)
	11 4号住居カマド完掘	7	Pit13完掘	国版21	1 出土遺物(7)
国版 6	1 5号住居完掘	8	Pit14完掘	国版22	1 出土遺物(8)

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

山梨県山梨市七日市場地内において、商業施設の建設が計画された。この計画を受け山梨市教育委員会では、開発予定地区は日下部遺跡の隣接地でもあり、施設建設に先立って平成20年11月から翌21年3月にかけて試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定地内全体に幅2mのトレンチを28本設定し、遺構、遺物の確認を行った（第3図）。試掘調査の結果、平安時代の堅穴住居、土坑、ピット、道路状遺構と思われる硬化面などが確認され、平安時代を主体とする遺物も出土したため、開発に先立ち発掘調査が必要と判断した。

事業主体である株式会社さえきホールディングスより公益財團法人山梨文化財研究所に対して発掘調査の依頼があり、受託することとなった。

発掘調査にあたり、原団者である株式会社さえきホールディングス、指導機関である山梨市教育委員会、受託者である公益財團法人山梨文化財研究所の三者によって、「スーパーマーケット他店舗建築用地内の埋蔵文化財に関する協定書」を結び、株式会社さえきホールディングスと公益財團法人山梨文化財研究所の間で発掘調査に関する委託契約を締結し、発掘調査にあたることとした。

調査体制

調査主体 公益財團法人山梨文化財研究所

調査担当者 宮澤公雄（公益財團法人山梨文化財研究所）

発掘調査参加者 飯野金雄、小澤美幸、河西町男、北野礼子、斎藤里美、中川美治、長澤春雄、樋川芳久、平賀早苗、保坂悌司

整理作業参加者 岩崎満佐子、川口美和、櫛原ゆかり、斎藤ひろみ、佐野真雪、菅原由美子、竜沢みち子、田中真紀美、中川美千子、中川美治、中山千恵、平賀早苗、藤原五月

事務局 林紀子、柳本千恵子（公益財團法人山梨文化財研究所）

第2節 調査経過

発掘調査は、平成24年4月25日～6月25日まで発掘調査を実施した。調査終了後、造成範囲の拡張が行われることになり、拡張区の調査は山梨市教育委員会によって同年7月5・6日に実施された。

詳細な調査経過は以下の通りである。

4月19日 基準点設置作業

25日 機材搬入、調査開始

西区表土剥ぎ・遺構確認作業、東区北側より表土剥ぎ

26日 東区北端において掘立柱建物跡確認

西区遺構調査

28日 西区全景写真撮影、遺構測量作業

30日 重機による排土処理、西区埋戻し作業

5月2日 東区表土剥ぎ終了、遺構確認作業

7日 東区遺構調査開始

9日 1号住居遺物出土状況写真撮影

11日 2号住居プランを確認し、調査区拡張

14日 2・3号住居調査開始

17日 2号住居遺物出土状況写真撮影

- 23日 3号住居遺物出土状況写真撮影
24日 1・2号集石土坑発掘出状況写真撮影
28日 3号住居カマド内遺物出土状況写真撮影
29日 3号住居完掘写真撮影
6月6日 5号住居遺物出土状況写真撮影
7日 4号住居・1号竪穴完掘写真撮影
11日 6号住居遺物出土状況写真撮影
13日 5・6号住居完掘写真撮影
14日 43号土坑遺物出土状況写真撮影
15日 航空写真測量、1号掘立柱建物跡完掘写真撮影
17日 遺跡見学会
18日 1号集石造構完掘写真撮影、住居掘り方調査開始
20日 風倒木痕完掘写真撮影
25日 1号掘立柱建物跡測量、現地作業終了、機材撤収
27日 埋蔵文化財発見届・埋蔵文化財保管証提出
7月5日 山梨市教育委員会拡張区調査開始
6日 拡張区追加測量実施

第3節 調査方法

山梨市教育委員会では、開発事業者の計画を基に事業予定地内全域の試掘調査を実施し、遺跡範囲の確定を行った。そのうち、削平を伴う造成予定区域を調査対象地として設定し、調査対象範囲とした。

本調査においては、調査対象範囲設定後、重機による表土剥ぎを行い、人力による遺構確認作業を実施した。調査区全体を被うように国土座標にあわせて南北方向をX軸、東西方向をY軸とするグリッドを設定し、南西隅を基点とした、世界測地系平面直角座標第Ⅷ区系のX = -33190.000、Y = 17760.000（北緯35度42分02秒、東経138度41分46秒）を基点（X = 0、Y = 0）とした。

出土した遺物のうち、原位置が明確で大形の遺物は、簡易写真測量、小形の遺物については、光波測量機器を用いて個別に取り上げを行った。また、遺構平面図の作成は、光波測量器を用いて実施したが、一部は写真測量の成果によって補完した。また、断面図などの作成においては、手作業による実測を行った。

第4節 遺跡概要

笛吹川左岸の山梨市七日市場に所在する日下部遺跡は、東西450m、南北400mほどの範囲に広く分布する、市域でも有数の規模を誇る遺跡である。

昭和24年、旧日下部中学校（現山梨北中学校）建設に伴う校庭整地工事の際に発見され、故上野晴朗氏や国學院大学の学生を中心として、昭和32年まで4次にわたる発掘調査が実施された。4次にわたる発掘調査の結果、竪穴住居2軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条などが発見され、竪穴住居内からは、土師器、須恵器をはじめとして、金属製品など豊富な遺物が出土した。

調査によって明らかとなった遺構や遺物の重要性から、昭和25年に山梨県指定史跡として標柱が日下部公民館の敷地に建てられ、現在に伝えられている。

その後、保存されていた第1次調査の1号住居跡が取り壊されることになり、昭和48年に再調査が実施されている。

日下部遺跡は、山梨県内において考古学史に残る遺跡として著名であるばかりだけでなく、戦後間もない

時期の発掘調査であるにもかかわらず、その貴重な調査成果から、調査を指揮した大場磐雄博士をもってして「縄文時代の尖石、弥生時代の登呂、古墳時代の平出などと並び、奈良時代の日下部として、日本の四大遺跡と言える」と言わしめたほどであった。

5次にわたる発掘調査によって発掘された遺物には、土師器・須恵器などの日常雑器とともに銅帶金具（丸鞘、巡方、鉗具）が出土しており、有力者が居住したことが考えられる。また、特殊遺物としてクルリ鉤が出土している。クルリ鉤は、倉庫などの扉に付けられた施錠装置をあける鍵であり、集落内に倉などが存在したことになり、遺跡が有力な集落であったことがうかがえる（山梨市教育委員会 1987）。

今回の第6次発掘調査地点は、第3・4次調査区の北端から北へ100mほどの位置にあたり、日下部遺跡の北端に位置するものと思われる。

発掘調査によって、平安時代の堅穴住居6軒、同期の掘立柱建物跡3棟、堅穴状遺構1棟、土坑・ピット88基、溝19条、集石土坑3基、焼土遺構1基、集石遺構1基、風倒木痕1基、土器集中区1ヶ所などが発見された。

堅穴住居内からは、土師器、須恵器、灰釉陶器をはじめとして、土錘、刀子などが出土した。土師器には、墨書きされたものが多くみられた。また、遺構の確認には至らなかったが、調査区に南側からは土製円盤を含む弥生時代前期の土器がまとめて出土したことでも特筆される。

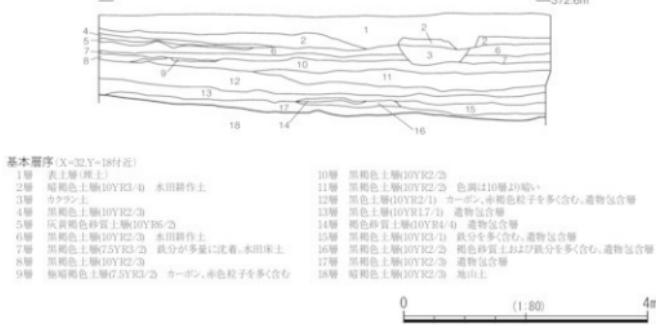
本調査では遺構・遺物の出土はなかったが、試掘調査において西区北側に位置するT1より北宋錢が2点出土しており、中世においても土地利用が行われていたことが明らかである。

第5節 基本層序

調査区は、笛吹川によって形成された沖積地に立地しており、南西方向に緩やかに傾斜している。

第1図に示したのは、西区の標準層序であるが、西区は笛吹川に向かい大きく傾斜する地点にあり、西側では土層堆積も2mほどにおよぶ。果樹栽培以前には、水田耕作が行われており、床土も確認できる。

一方、東区は覆土も浅く、北側においては表土である耕作土直下が遺構確認面となっていた。中央より南側ではやや深い堆積も認められ、水田の床土も確認された。その直下に暗褐色砂質土が堆積しており、遺物包含層となる。遺構確認面は、褐色砂質土層を基本としていて、北側では花崗岩の自然石の露出が顕著である。



第1図 遺跡基本層序

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的位置

本遺跡の所在する山梨市は、山梨県の北部、甲府盆地の北東に位置する。現在の山梨市は、平成17年、東山梨郡牧丘町・三富村と合併し、新しい山梨市が発足した。この合併により、市域北側は国師ヶ岳、甲武信ヶ岳、古礼山、笠取山などの急峻な山々に囲まれ、埼玉県秩父市、長野県川上村と接し、西側は甲府市、東側は甲州市、南側では笛吹市と接する。

日下部遺跡の所在する旧山梨市域は、北西部から南西部にかけては山地で、南部は平地となる。旧市内南部を笛吹川や重川、日川などの支流が南北に縱貫し、氾濫原や複合扇状地を形成している。昭和32年市の農業構造改善計画によって、水田や桑園から果樹栽培に転換が図られ、周辺は一大果樹地帯として知られるようになり、モモやブドウ畑が主体を占め、現在に至っている。

本遺跡の立地する七日市場は、笛吹川左岸の緩やかな南西傾斜の沖積地にあたり、以前には桑園であったようであるが、現在はモモ・ブドウ畑が広がっている。しかし、南東1kmほどのところにJR中央線東山梨市駅が、東には国道140号線、西には国道411号線が通り、交通の便にも恵まれていることから、急速に宅地化が進行している地域もある。

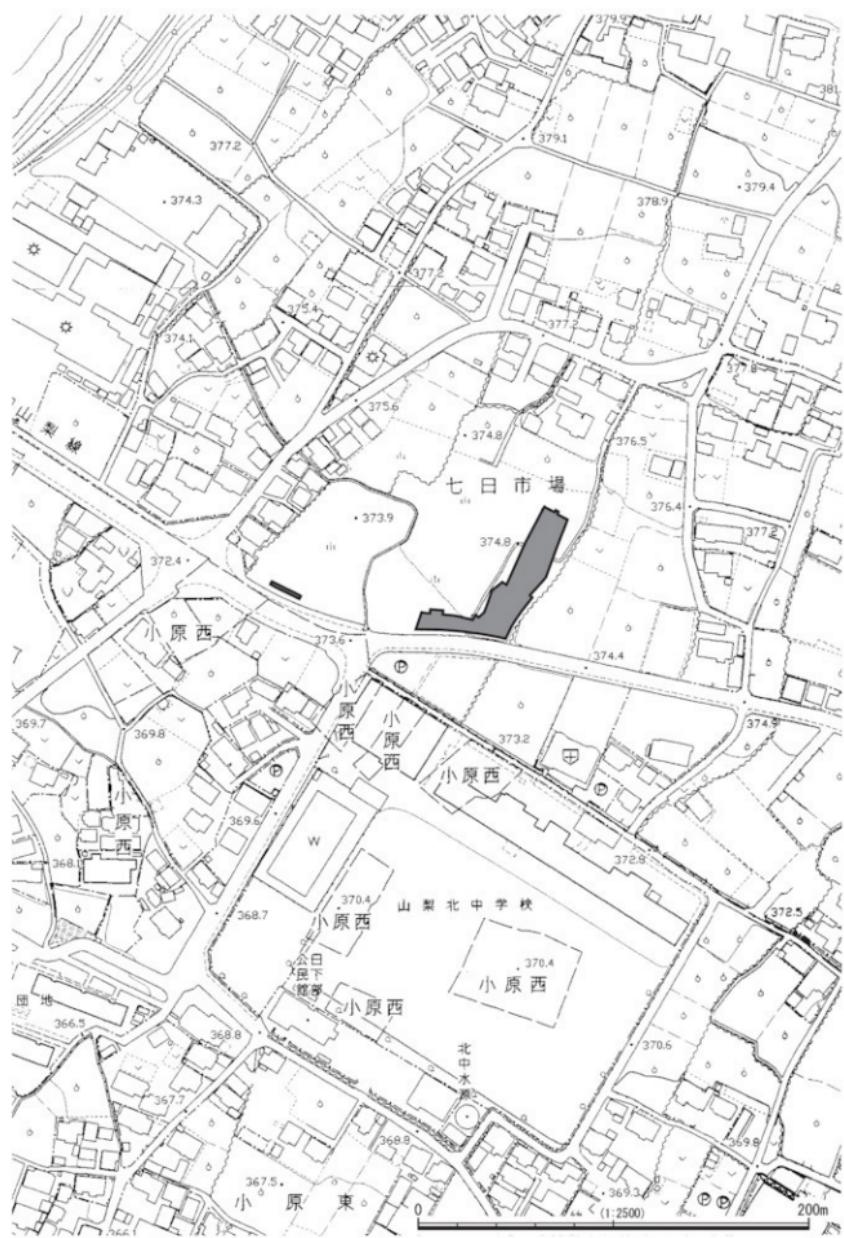
第2節 遺跡の歴史的環境

本遺跡の所在する山梨市七日市場地域周辺は、遺跡が濃密に分布している地域としても知られている。本遺跡の西側に隣接する立石遺跡（第6図65）は笛吹川によって形成された崖線の肩部平坦面に立地し、縄文時代中期後半の竪穴住居1軒と配石遺構が確認されている。宮の前（旧七日子）遺跡（同46）は本遺跡から北へ1kmのところにある。縄文時代中期から平安時代にかけての複合遺跡であるが、昭和22年から24年にかけて数度の調査が実施されており、平安時代の竪穴住居跡は4軒が発見され、土師器壺、甕、土鍤、金属製品では鎌・刀子などが出土している。その中で、カマド構築材に用いられたと思われる筒形土製品が出土し、注目される（山梨市教育委員会 1987b）。また、平成5年の調査では、遺構は確認されなかったが、多数の縄文土器、土偶3点が出土した（山梨市教育委員会 1995）。土器のはほとんどは五領ヶ台I式段階のものであり、発見された土偶も同時期の資料である。

宮の前遺跡内に所在する七日市廐寺は、昭和23年以前には布目瓦が採集でき、礎石と思われる数個の平石が確認できたというが、現在は不明となっている。平成4年には、山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されたが、寺院の痕跡を確認することは出来なかった（山梨県教育委員会 1995）。これまでに採集された瓦も僅かなことから、村落内寺院のような小規模な宗教施設であったものと考えられる。

本遺跡の南東1kmにある、三ヶ所遺跡（同78）は、3次にわたる発掘調査が実施され、第1次調査においては、清白寺参道入り口付近より、9世紀後半代の掘立柱建物跡5棟、10世紀前半の竪穴住居4軒が発見された。1号竪穴住居からは、「東大」の墨書き土器、仏鉢形土器片が出土しており、1号掘立柱建物跡は、柱穴配置から仏堂関連遺構ではないかと考えられていることから、仏教関連施設を伴った遺跡であることが想定された。また、第3次調査では、第2次調査東側の調査区において、平安時代の竪穴住居3軒、同時期の掘立柱建物跡3棟が発見された。そのうち3号竪穴からは、「塩毛」と書かれた刻書土器が出土し、1・3号掘立柱建物跡は、柱穴配置から神社建築の初期の形態の一例とも考えられており、遺跡の性格が注目される（山梨市ほか 2010・2012）。

本遺跡と笛吹川を挟んだ対岸の山地先端部に荒神山窯跡（同37）がある。平安時代末の3基の窯跡が発見された。全体を調査することができた1号窯は平窯構造を呈していた。また、3号窯からは、ロストル状の遺物が出土し、円筒型の窯が使用された可能性がある（山梨市教育委員会 1987a）。



第2図 日下部遺跡調査区位置図

第3図 試掘・調査区配置図



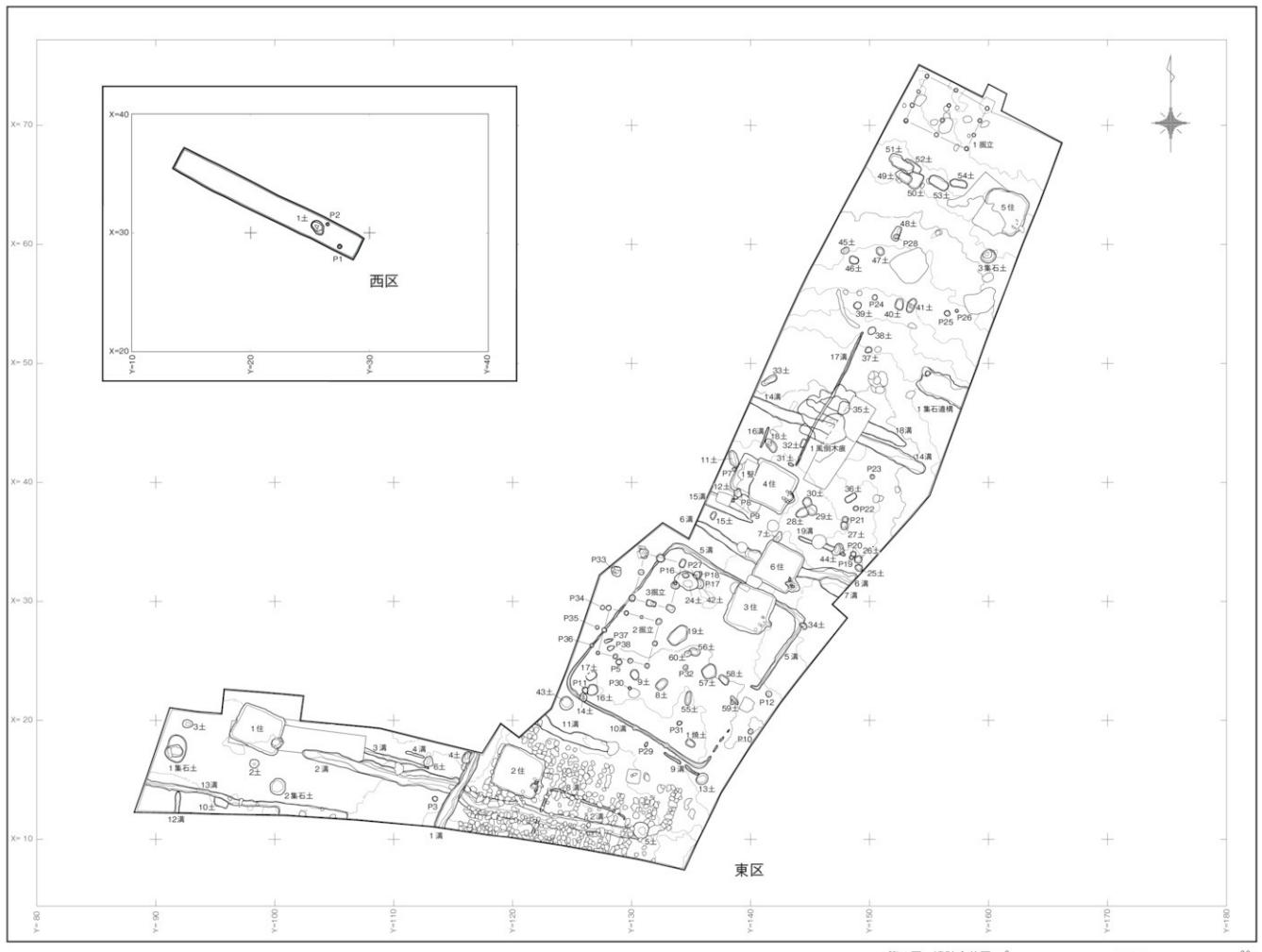
日下部遺跡やこれらの遺跡を中心として、古代における加美郷が形成されていたものと考えられ、遺跡の規模からみれば、本遺跡がその中核を担っていたことは明らかである。

古代における遺跡周辺の土地利用の在り方については、地割にその一端を見ることが出来る。

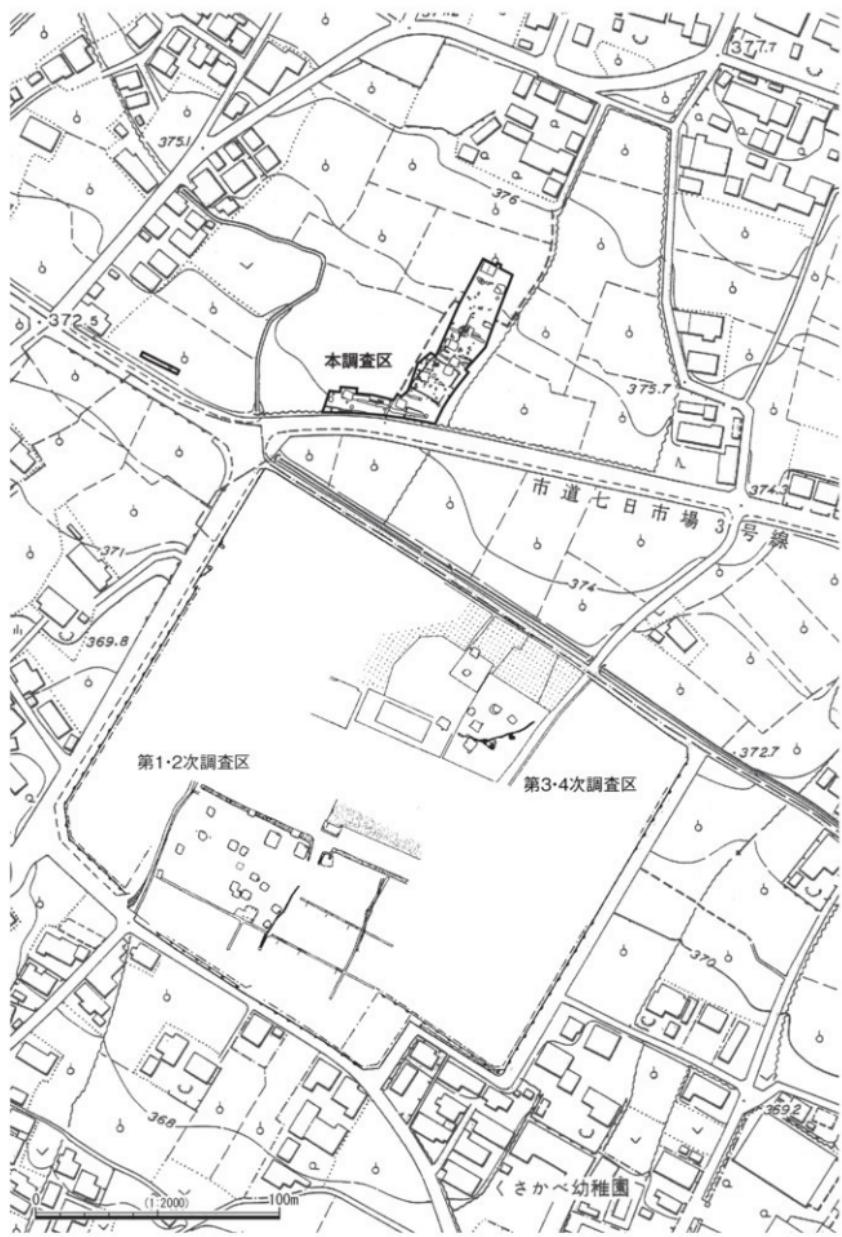
市域には軸線の異なる二つの条理地割が確認されるという（中山2005）。市域南部にみられる峠東条里と八幡地区に起源をもつ八幡条里と呼ばれるものである。

峠東条里は、地割の南北軸を東に約 12° 振るもので、甲府盆地東部地域に広くみられる条里プランで、市域では一町田中、歌田、下栗原、上栗原など南東部地域に広くみられる。

一方、八幡条里は、地割の南北軸を東に 24° 振るプランで、下神内川、下石森、上石森、鴨居寺、三ヶ所、



第4図 遺跡全体図 0 (1:300) 20m



第5図 日下部遺跡全体図

小原東、小原西、下井尻、七日市場、甲州市域の三日市場、上井尻、藤木などを含む地域で確認されている。本遺跡周辺は後者にあたり、本調査区南側を東西に走る道路もこの軸線上に乗っており、本調査で発見された堅穴住居もほぼ同じ主軸を探っている。

笛吹川を挟んで対岸には、式内社の大井保窪八幡神社がある。社伝によれば、貞觀元年清和天皇の勅命により、和氣葬範が豊前国宇佐八幡宮を勧請し、笛吹川の中島の大井保に仮宮を造営して安置したことによるという。その後、水害により社地が塗の地に移り、窪八幡と称するようになったというが、これについては諸説がある。武田氏代々の崇敬が篤く、社領寄進が相次いだ。享禄4年には武田信虎によって社殿が寄進されたという。

本遺跡の南側にある連方屋敷（同79）は、四方に高さ2～3mの土壘と堀を巡らす不整形居館で、東西117～130m、南北120mの規模をもつ。北東隅の土壘が欠けており、鬼門除けの折郭だとする説もある。

この居館については、『甲斐国志』に「是モ古屋氏也今同族ノ者三人居之四隅ニ土手堀ヲ廻ラシ三四町歩ニ擣セリ里人今ニ蓮方屋敷ト呼 軍鑑藏前衆ノ頭四人ノ内古屋道忠・同兵部アリ同内匠・同文六郎モ同衆ナリ 起請文所載諸手同心古屋氏ノ者甚多シ 此辺ニ散在シテ同氏居址又少カラザレバ其党タル人モ多カルベキナレドモ凡明拠ナキトコトハ闇テ記セズ」とあり、国志編纂時に屋敷内に古屋氏が居住し、「甲陽軍鑑」にみえる「藏前衆ノ頭四人」のうち二氏が古屋姓であることなどから、上記のような記述となっている。

上野晴朗氏は、国志の記述に加え、八日市場の存在などから、「蔵前の庁所」と推定している。また、連方屋敷の由来については、八日市場名主文書の中に安田義定の九世安田孫左衛門尉光泰が蓮峯入道と名乗り、足利尊氏に仕え、この屋敷に居住したため蓮峯屋敷と呼ばれたという記録があることを指摘している（上野1983）。

連方屋敷は、平成6年に敷地内の住宅建設に伴い南東隅の発掘調査を実施した。調査の結果、集石造構に伴って常滑窯、内耳土器などが出土している。

また、屋敷内の北側の寄贈を受けた山梨市教育委員会では、平成16年から継続的には整備を目的とした発掘調査を実施している。屋敷のはば中央において、掘立柱建物1棟、礎石建物2棟などの一部が発見された。建物跡と同じ確認面から13世紀中頃の高麗青磁梅瓶、中国竜泉窯青磁蓮弁文碗などが出土しており、かわらけ類は14世紀中頃から15世紀前半に比定されるものである。また、屋敷南側からは近世の陶磁器類が出土している（三澤2007）。

このように、古代から中世にかけて当地は、盆地東部地域の中心地として繁栄を遂げてきた地域であるといえる。



第6図 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡名一覧（番号は第6図に対応）

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	下部遺跡	調文・弥生・奈良・平安・中世	62	相模南遺跡	中世
2	切通北遺跡	中世・近世	63	飛沢遺跡	中世・近世
3	切通西遺跡	平安	64	上坂後境遺跡	
4	切通東遺跡	平安	65	立石遺跡	調文・奈良・平安
5	堤下遺跡	平安	66	下ノ原遺跡	調文
6	切通南遺跡	調文・平安	67	八王子遺跡	調文
7	藤の木道下遺跡	調文・平安	68	安田義定館跡	中世
8	久保遺跡	平安	69	大堀遺跡	奈良・平安
9	上野氏屋敷	近世	70	西久保遺跡	調文・平安
10	西片山遺跡	中世・近世	71	安田義定館跡	中世
11	久保田遺跡	調文	72	寺の下遺跡	調文
12	屋敷池A遺跡	調文(中)・平安	73	上之割八王子遺跡	平安
13	二日市場廻間塚		74	唐土遺跡	古墳・中世
14	武士原前下遺跡	調文・平安	75	三ヶ所梨木遺跡	平安
15	乙川原遺跡	調文・平安	76	彫切塚	中世・近世
16	諏訪神社遺跡		77	横口遺跡	古墳・平安・中世
17	北原遺跡		78	三ヶ所遺跡	平安・中世
18	番匠星遺跡		79	漁方星敷	中世
19	上三鷹神遺跡		80	梨木遺跡	平安
20	古屋氏星敷		81	切付平塚	
21	下三鷹神遺跡	平安	82	雁行堤	近世
22	市川西遺跡	調文	83	下部病院遺跡	古墳
23	橋田遺跡	調文	84	平塚遺跡	平安
24	市川東遺跡	調文	85	屎越遺跡	古墳・中世
25	神明前遺跡	平安	86	平塚古墳	古墳
26	於北南遺跡	平安	87	福荷塚古墳	古墳
27	於北北遺跡	中世・近世	88	松原遺跡	中世
28	大塚遺跡	平安	89	宮ノ上遺跡	平安
29	樋詰裏遺跡	平安・中世	90	城伊庵星敷跡	中世
31	久保久遺跡	調文・平安	91	上手原遺跡	調文
32	丸山遺跡	調文	92	浅間遺跡	平安・中世
33	村西遺跡	調文	93	吉原遺跡	平安
34	久保西遺跡	平安	94	大橋遺跡	平安・中世
35	東田遺跡	中世・近世	95	河野氏屋敷	中世・近世
36	中下西遺跡	平安	96	新町東遺跡	調文
37	荒神山稟跡	平安・中世	97	原遺跡	古墳
38	中島遺跡	調文・平安	98	ふじ塚古墳	古墳
39	下河原遺跡	中世・近世	99	武田金吾星敷跡	中世
40	児川河床遺跡	旧石器	100	東後屋敷跡	調文・奈良・平安
41	上コブケ遺跡	調文・平安	101	鎌治屋久弥遺跡	古墳
42	佐八幡神社社家坊中群	中世	102	桙木遺跡	古墳
43	清水陣星跡	近世	103	桙木田遺跡	平安
44	佐八幡神社	中世	104	市道遺跡	平安
45	下弥勒遺跡	調文・平安	105	杉ノ木遺跡	古墳
46	宮ノ前(七日子)遺跡	調文・古墳・奈良・平安	106	宗高北遺跡	平安
47	天神原北遺跡	調文・平安	107	前田遺跡	平安
48	天神原南遺跡	平安	108	屋敷赤遺跡	調文・平安・中世
49	西ノ森遺跡	調文・平安	109	宮ノ前遺跡	平安
50	中沢遺跡	平安	110	上石森塚越遺跡	平安・中世
51	十王堂遺跡	奈良・平安	111	上黒木遺跡	奈良・平安・中世
52	阿弥陀堂遺跡	調文・古墳・奈良・平安	112	塚ノ内遺跡	平安
53	宮ノ西遺跡	古墳・近世	113	金山林遺跡	古墳・平安
54	秀森前遺跡		114	高畠遺跡	調文・古墳・平安
55	樺原塚跡	中世・近世	115	天神前北遺跡	平安
56	神明遺跡	奈良・平安	116	天神前遺跡	調文・平安
57	御屋敷北遺跡	平安	117	宗高西遺跡	古墳
58	御屋敷南遺跡	調文・平安	118	宗高南遺跡	弥生・古墳
59	狐塚遺跡	平安	119	宗高東遺跡	調文
60	天神原遺跡	平安	120	雲林遺跡	古墳・平安
61	相模北遺跡	古墳	121	上沼遺跡	古墳・平安

第3章 遺構と遺物

第1節 壘穴住居跡

1号住居（第8・9図）

位 置 X = 10、Y = 90グリット

主 軸 N - 65° - W

遺構概要 東区西端に位置し、東に2・3号溝、南に2号集石土坑、2号土坑、西に1号集石土坑、3号土坑が隣接する。規模は東西4.0m、南北3.6mを測り、長方形のプランを呈する。深さは、北側0.5m、南側0.5m、東側0.4m、西側0.45mを測る。カマドは、住居東壁の中央よりやや南側に設置されていた。石組カマドで、川原石の袖石が2石ずつ残存していた。規模は、1.05m、幅0.8m、深さは床面から0.06mほどである。その他、柱穴などの付属施設は確認されていない。

遺物出土状況（第9図）

住居覆土には、多くの人頭大の川原石が含まれており、遺物の多くは川原石の下層より出土している。

遺物は、住居内全面から出土しているが、カマド付近に集中している。カマド左袖付近からは、甕、鉢が集中して出土している。東側の袖脇では、土器器皿が5個体ほどまとまり、棒状鉄製品も出土した。土器器皿は、カマドと反対側の西側壁に近い付近から2点出土している。北西コーナー付近からは、土錘が1点ではあるが出土した。

出土遺物（第43図）

第43図1～5は土器器皿で、いずれも口唇部が玉縁となり、体部下半が手持ちヘラ削りされている。2は墨書きされるが、文字は判読不能。同6～8は土器器皿で、いずれも外面口唇部および内面に煤痕跡を残すことから、灯明具として使用された可能性が高い。同9・10は鉢で、胴部下半から口縁部へ大きく開く形態となる。同11は羽釜の鋸の破片資料。同12～14は甕で、大形のもの（12）と小形のもの（13・14）に分かれる。同15は灰釉陶器皿である。

その他に、土錘（第55図22）、棒状鉄製品（第56図11）がある。

時 期 10世紀前半

2号住居（第10・11図）

位 置 X = 10、Y = 120グリット

主 軸 N - 67° - W

遺構概要 東区南端に位置し、南に2号溝、東に8号溝、西に1号溝が隣接する。地山までの堆積土が深いことから、長年山芋の栽培を行ってきたということで、確認面には無数の擾乱坑が掘られていた。規模は、東西4.0m、南北3.7mを測り、やや東西に長い長方形のプランを呈する。深さは、北側0.6m、南側0.5m、東側0.5m、西側0.5mほどであった。カマドは、東壁の中央よりやや南側に設置されていた。石組カマドで、川原石の袖石が3石ずつ残存していた。規模は、1.25m、幅0.95m、床面からの深さは0.04mほどである。カマド左袖付近の底面には、浅い掘り込みが確認されたが、性格は不明。その他、柱穴などの付属施設は確認されていない。

遺物出土状況（第11図）

覆土は擾乱を受けているものの、出土遺物は豊富である。カマド付近を中心に甕、筒形土製品などが集中して分布している。壺・皿類はその周辺および住居西側に多くみられる。灰釉陶器壺が3点出土しており、カマド付近や床面直上から出土していることから、本遺構に伴うものとみられる。

出土遺物（第44・45図）

第44図1～12は土器器皿である。1は外面に明瞭なカキ目痕を残す。外面下半は手持ちヘラ削りされ、内

面を黒色処理し、暗文をもつもの（同4・8・9）ともたないものがみられる。2・10～12は墨書き器で、10・11はともに底部に「王」の墨書きをもつ。同13・14は土師器皿で、14は内面に煤の痕跡を残すことから、灯明具として使用された可能性がある。同15～22の土師器甕は、いずれも大形のもので小形のものは供伴していない。第45図1～3は、カマド構築材として使用された筒形土製品で、いずれも内外面ともハケ調整で仕上げている。2はやや口縁が開く形態を呈する。同4～6は灰釉陶器壺で、4・5は直接接合関係はないが、同一個体であると思われる。同7は、灰釉陶器壺の破片を転用した転用硯で、内面のほぼ全面が研磨されている。第56図12は、棒状の鉄製品であるが、用途不明である。

時期 10世紀前半代

3号住居（第12・13図）

位置 X = 20, Y = 130 グリット

主軸 N - 68° - W

遺構概要 東区のほぼ中央に位置し、5号溝に北壁の一部を切られる。北に6号住居が接する。規模は、東西3.6m、南北3.8mの方形を呈する。深さは、北側で0.55m、南側で0.63m、東側で0.65m、西側で0.6mであった。カマドは、住居東壁の中央よりやや南側に設置されていた。石組カマドで、右袖に3石、左袖に1石が残存していた。規模は、1.2m、幅0.8m、深さは床面から0.08mほどである。住居北隅に大きな礫が露出しているが、住居構築の際に露呈したもの、大形であったために撤去できず、そのまま放置していたものと思われる。その他、柱穴などの付属施設は確認されていない。

遺物出土状況（第13図）

住居覆土には、多くの人頭大の川原石が床面よりやや浮いた状態で確認された。遺物の多くは川原石の下層より出土しており、住居南側に集中する傾向にある。土師器坏類は、カマド右袖脇および南壁際から多く発見された。また、皿は、カマドとは対する壁寄りから出土している。土錘が10点出土しているが、東隅付近、南壁際から刀子の破片が出土している。

カマド内からは、破片となっていたが、甕が多数発見された。

出土遺物（第45・46図）

第45図8～23は土師器坏である。8・14～16は内面を黒色処理し、8・15のみ内面に暗文を施す。9・11・15・21は墨書き器で、9は「真」、11・15・21は判読不能。また、14・16・22・23は内面ないし口唇部に煤の痕跡を残している。同24～26は土師器皿で、25・26は底部に墨書きをもつ。いずれも文字不明。第46図1～8は甕であるが、大形品（1～4）と小形品（5・6）がある。同9は灰釉陶器壺であるが、2号住居出土品より球胴形を呈している。第55図23～32は土錘で、外側を丁寧に磨いている。重量も17.56gを最大として、およそ13g前後である。第56図9は、片側に刃をもっていることから、刀子であると思われる。茎側の幅が広くなっているが、刃部の砥ぎ減りによる結果だと思われる。

時期 10世紀前半代

4号住居（第14・15図）

位置 X = 30, Y = 140 グリット

主軸 N - 63° - W

遺構概要 東区の中央よりやや北側に位置し、1号竪穴状遺構を切る。東に28・30号土坑、南に7号土坑、北に31号土坑、17号溝などが隣接する。規模は、東西3.6m、南北3.5mを測り、正方形のプランを呈する。深さは、北側で0.43m、南側で0.4m、東側で0.5m、西側で0.53mである。カマドは、東壁のほぼ中央に位置する。石組カマドで、両袖にはそれぞれ2石ずつ袖石を残しており、自然石を用いた支脚も残存していた。また、カマド掘り込み底面壁際には、方形の自然石を横位に立てており、燃焼効率を上げるために設置された可能性がある。規模は、1.2m、幅1.0m、床面からの深さ0.06mである。

遺物出土状況（第15図）

床面直上および住居覆土内より、多量の礫が出土した。とくに、カマド前面付近に集中しており、礫の下層より、遺物が出土している。遺物は、住居内全体より出土しているが、住居北側の遺物は流れ込んだ弥生時代前期の土器がほとんどを占めており、本住居に伴う遺物は、カマド周辺および南側に分布している。カマド付近からは、土師器壺が5個体出土しており、壺類は住居南側から出土している。

出土遺物（第47・48図）

第47図1～4は土師器壺で、外面下半を手持ちヘラ削りし、内面に暗文をもつもの（1～3）と、もたないものがある。壺は、図示できるものが6個体あり、大形のもの（同5～7、第48図1）と小形のもの（第47図8・9）がある。底部が残存する個体については、すべて木葉痕をもつ。

時期 9世紀後半代

5号住居（第16・17図）

位置 X=60, Y=160グリッド

主軸 N-68°-W

遺構概要 東区の北端付近に位置する。南西隅部が耕作によって大きく攪乱を受けていた。南に3号集石土坑、西に54号土坑が隣接する。規模は、東西3.6m、南北3.6mの正方形プランを呈する。東区北側の覆土は浅く、表土直下が遺構確認面となっていたため、遺構の残存状況は良くなかった。深さは、北側で0.37m、東側で0.32m、西側で0.3mと浅い。カマドは、東壁の中央よりやや南側に設けられていた。住居覆土が浅いこともあり、遺構確認段階において袖石が確認された。石組カマドで、左袖に1石、右袖に3石の立石を確認した。住居掘削およびカマド構築にあたり、大形の礫が露出したが、撤去せずにカマドを構築している。規模は、0.9m、幅0.73m、深さは床面から0.04mほどであった。掘り込み中央よりやや北側に、自然石を用いた支脚が立てられていた。

遺物出土状況（第17図）

遺構の残存状況が悪かったにもかかわらず、出土遺物は豊富であった。住居西側が大きく攪乱を受けていることもあり、遺物は東側のカマド周辺に集中している。カマド内および周辺からは、土師器壺が5個体ほど出土しており、そのうちの一点は右袖脇に立てられたような状態で発見された。また、いずれも破片ではあるが、置カマドおよび筒形土製品も出土している。土師器壺・皿類は、カマド右袖脇と北東隅付近に分かれて出土している。住居北壁中央付近において、棒状鉄製品が出土している。

出土遺物（第48・49図）

第48図2～10は土師器壺で、いずれも内面の暗文は消失している。このうち、2・7・9・10が墨書き土器である。2は「王」と判読できるが、その他は判読不明。同11～13は土師器皿で、11は内外面に煤の痕跡を残す。13は底部に墨書きを残すが、判読不明。同14～17は土師器壺の底部資料であるが、底部から直線的に外反するもの（14・16）と、湾曲して外反するもの（15・17）がある。第49図1～4も土師器壺であり、大形のもの（1・2・4）と、小形のものがある。同5は筒形土製品の口縁部資料である。同6は灰釉陶器長頸瓶の口縁部資料。同7・8は置カマドの破片資料である。第56図13は棒状鉄製品であるが、用途不明。

時期 10世紀前半代

6号住居（第18・19図）

位置 X=30, Y=140グリッド

主軸 N-63°-W

遺構概要 東区のはば中央に位置する。7号土坑に北隅付近を、6号溝に住居中央部を東西に切られている。東に7号溝、南に3号住居、北に19号溝が隣接する。規模は、東西3.5m、南北3.6mの方形プランを呈する。深さは、北側で0.55m、南側0.45m、東側0.48m、西側0.44mと、隣接する3号住居同様に残存状況は良

好であった。カマドは、東壁の中央より南隅に近いところに設置されていた。石組のカマドで、両袖に1石ずつ礫が残存していた。規模は、1.05 m、幅1.05 m、深さは床面から0.12 mである。袖石は、住居内よりやや外側のカマド掘り込み内に設置されており、カマドの掘り込みとともに東壁立ち上がりラインより外側に位置している。カマド底面には、0.42 m × 0.21 mの長楕円形の浅い掘り込みがみられた。

遺物出土状況（第19図）

カマド前面には扁平な自然礫が散乱しており、カマド構築材であった可能性がある。遺物は、住居全体に分布しているが、弥生土器が多く、本遺構に伴うであろう遺物はそれほど多くはない。土師器壺・皿類は南壁中央立ち上がり際からまとまって出土している。甕はカマド内より出土しており、羽釜の鍔部分が住居北側より出土している。また、東壁際より、石製紡錘車が出土した。

出土遺物（第49・50図）

第49図9～12は土師器壺で、9～11は内面に暗文を施す。9・10は墨書き土器で、それぞれ「升」「大」である。同13・第50図1は土師器皿で、13は内外面とも煤の痕跡を残している。第50図2～4は土師器甕でいずれも大形のものである。同5は、羽釜の口縁から鍔の資料であるが、他の土器と時期差があり、後世の遺物と思われる。第55図33は、滑石片岩製の紡錘車で、擦痕を明瞭に残す。

時期 9世紀後半

第2節 壇穴状遺構

1号竪穴（第14・15図）

位置 X = 40、Y = 130グリット

主軸 不明

遺構概要 東区の中央よりやや北側に位置する。東側のほとんどを4号住居に切られる。また、南側も12号土坑に切られる。南に8・9号ピット、15号溝、北に18号土坑、16号溝、西に11号土坑、7号ピットなどが隣接する。規模は、東西現存値1.7 m、南北6.3 mを測り、方形のプランを呈すると思われるが、東半を4号住居によって切られているために、正確なプランは不明。深さは、北側で0.5 m、南側で0.2 m、東側で0.45 m、西側で0.3 mほどである。遺構内には掘削のために露出した大形の礫が多数剥き出しになっていて、底面の平坦面はほとんどない状態であった。壁の立ち上がりは、他の竪穴住居に比べながらかである。遺構に伴う施設は何も確認されなかった。遺構の性格は不明。

遺物出土状況（第15図）

遺物は散在的で、出土点数もそれほど多くはない。出土遺物は縄文時代中期の深鉢片、弥生時代前期の甕の小破片が出土している。

出土遺物（第50図）

第50図6は縄文土器中期の深鉢口縁部資料である。その他、縄文時代中期の深鉢、弥生時代前期の甕が出土しているが、いずれも小破片であり、図示できるようなものはない。

時期 弥生時代前期以降

第3節 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物（第20図）

位置 X = 70、Y = 150グリット

主軸 N-25°-E

遺構概要 東区の北端に位置する。南に49～54号土坑が隣接する。桁行2間、梁行3間の総柱建物である。柱間は、桁行約2.8 m、梁行約1.4 mである。調査区北側に位置することもあり、柱穴の残存状況はそれほ

ど良好なものではない。柱穴内に柱の痕跡を確認することはできなかった。pit12のみ柱穴列よりややずれるが、周辺部にはpitの痕跡が確認されないこと、他の柱穴と同様な覆土であることなどから、同一の遺構と判断した。

柱穴のそれぞれの計測値は以下の通りである。

pit 1 = 0.4 m × 0.37 m、深さ 0.16 m、pit 2 = 0.37 m × 0.34 m、深さ 0.16 m、pit 3 = 径 0.35 m、深さ 0.2 m、pit 4 = 0.41 m × 0.34 m、深さ 0.2 m、pit 5 = 0.4 m × 0.38 m、深さ 0.26 m、pit 6 = 径 0.31 m、深さ 0.12 m、pit 7 = 0.31 m × 0.29 m、深さ 0.16 m、pit 8 = 径 0.32 m、深さ 0.19 m、pit 9 = 0.36 m × 0.33 m、深さ 0.14 m、pit10 = 径 0.32 m、深さ 0.19 m、pit11 = 径 0.33 m、深さ 0.19 m、pit12 = 0.36 m × 0.34 m、深さ 0.1 m。いずれも底面は尖底とはならず、概して平坦である。

遺物出土状況（第20図）

柱穴列確認作業において遺物は発見されず、柱穴のうち、pit 1・12から弥生土器甕が、pit 8・9から土師器壺がそれぞれ1点ずつ出土しているが、いずれも小破片であり図示できるような資料はない。

時期 柱穴内からの出土遺物、覆土、発見された住居群と同様の主軸を探すことなどから、住居群の時期と同じ9世紀後半から10世紀前半と推定されるが、断定は出来ない。

2号掘立柱建物（第21図）

位置 X = 20、Y = 130 グリット

主軸 N - 15° - E

遺構概要 東区の中央よりやや南側の西寄りに位置する。遺構の北西隅で5号溝、南西隅で36・37号ピットと重複し、5号溝に切られる。東に8・19号土坑、南に9号土坑、5号ピット10号溝、南西に14・16・17号土坑、北東に20・21・23・24・27・42号土坑が隣接する。桁行3間、梁行2間の建物である。柱間は、桁行約1.5m、内側桁行1.25～1.3m、梁行約1.9～2.0mほどである。本建物跡のうち、東側は本調査によって確認されていたものであるが、西側は、山梨市教育委員会による追加調査によって検出されたものであり、整理作業段階において掘立柱建物跡と認定されたものである。いずれの柱穴にも柱の痕跡は認められなかった。

柱穴のそれぞれの計測値は以下の通りである。

pit 1 = 径 0.31 m、深さ 0.35 m、pit 2 = 0.46 m × 0.39 m、深さ 0.33 m、pit 3 = 0.45 m × 0.42 m、深さ 0.26 m、pit 4 = 径 0.4 m、深さ 0.35 m、pit 5 = 0.42 m × 0.35 m、深さ 0.21 m、pit 6 = 0.44 m × 0.41 m、深さ 0.44 m、pit 7 = 径 0.44 m、深さ 0.42 m、pit 8 = 0.4 m × 0.38 m、深さ 0.25 m、pit 9 = 径 0.26 m、深さ 0.13 m、pit10 = 0.56 m × 0.48 m、深さ 0.35 m。

本建物跡西側に南北方向に列をなす34～36号ピットが隣接するが、本建物とは列を異にすることから、別に建物が位置する可能性が高い。

遺物出土状況（第21図）

pit 2・3・6から弥生土器、土師器が出土している。

出土遺物（第50図）

第50図7は、弥生土器甕の破片資料。同8は、土師器カマド型土器の口縁部破片である。

時期 カマド型土器が柱穴覆土から出土しており、10世紀後半以降の所産だと思われるが、他の竪穴住居跡と主軸を同一にすることから、10世紀後半に建てられた可能性が高い。

3号掘立柱建物（第22図）

位置 X = 30、Y = 130 グリット

主軸 N - 15° - E

遺構概要 東区の中央よりやや南西に位置する。5号溝に切られ、24号土坑を切る。南側に2号掘立柱建物が隣接する。桁行2間、梁間2間の建物である。柱間は、桁行1.6～1.7 m、梁行南側2.0 m、北側1.8 mほ

どである。当初、調査区境に位置しており、東側の柱穴列のみを調査した。2号掘立柱建物同様、西側は山梨市教育委員会の調査によって検出されたものであり、やや不整な柱穴列群ではあるが、2号掘立柱建物とも主軸が一致することから、掘立柱建物跡と認定した。いずれの柱穴にも柱の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況（第22図）

東側の桁行列から遺物が出土している。pit 3からは弥生土器が、pit 5からは土師器が出土している。

出土遺物（第50図）

第50図9・10は、弥生土器壺の破片資料で、いずれも条痕文が施される。同11・12は土師器壺の口縁部、胴部資料である。

時 期 平安時代の土師器が柱穴内より出土しており、平安時代以降の所産と考えられるが、隣接する2号掘立柱建物との前後関係は明らかにできない

第4節 土坑・ピット

本調査によって、57基の土坑と31基のピットが発見された。土坑とピットの区分は、プラン確認の段階で径50cmほどを境界として大きいものを土坑、小さいものをピットとした。ただし、プラン確認の段階で遺構名称を付したため、調査の進捗によって当初予想したプランと異なる遺構もあった。よって、調査結果をもって両者を区分したものではないため、名称と区分基準に齟齬が生じている場合がある。また、山梨市教育委員会調査分については、規模の大小にかかわらずこれらの遺構すべてをピットとして調査していることを付記しておく。個々の遺構データについては、第1表にまとめた。

ここでは、いくつかの特徴的な遺構について概観する。

土坑

西区からは1基の土坑が発見され、他は東区から発見されている。東区における分布は、調査区全体から発見されているが、南西では稀薄であり、調査区中央より北側に分布の中心がある。

5号土坑は、東区の南東端、X=10、Y=130グリッドに位置する。比較的大形の土坑で、土坑内からは10点ほどの弥生土器が出土している（第23図）。第53図13は、条痕文系土器壺の胴部資料。

9号土坑は、東区の中央よりやや南側のX=20、Y=130グリッド付近に位置する。楕円形を呈し、平坦な底部から垂直に立ち上がる壁をもつ土坑である（第24図）。土坑内からは、170点以上の弥生土器片、土製円盤、黒曜石・チャート片などが出土している。第50図14～16は弥生時代前期の条痕文系土器である。14は波状口縁をもち、15は口唇部に指頭圧痕による刻みを巡らせている。第53図16～19は、条痕文系土器片で作成した土製円盤である。条痕文系土器のみが出土していることから、弥生時代前期の遺構とすることができよう。

13号土坑は、東区の南東に位置する。不整円形の掘り方をもち、底部は平坦となる（第25図）。覆土上層より、弥生土器20点、土製円盤1点、黒曜石片6点ほどが出土している。第50図17は条痕文系土器の大形の壺である。第53図20は条痕文系土器片で作成した土製円盤である。

43号土坑は、東区の南側、X=20、Y=120グリッドに位置する。円形の掘り込みをもち、深さ70cmほどを測る。覆土中から、条痕文系土器220点以上、土製円盤2点、黒曜石片6点、磨石1点など、多量の遺物が出土した（第30図）。第51図1は弥生土器の壺の肩部破片。同2～6、第52図1～8は弥生土器壺である。第51図3・4は口唇部に指頭圧痕による刻みを巡らせる大形の壺である。同5・6、第52図1はともに口縁部に縄文を巡らす。5・6は波状口縁をもち口縁部を肥厚させ縄文を施しているが、第52図1は単純口縁に縄文を巡らせている。同3は、波状口縁をもち、胴部上半に縄文を施す小形の壺で、外面には赤彩が施されている。同4も小形の壺で、波状口縁下は無紋体とし、胴中ほどを横方向の条痕文、下半を縦方向の条痕文を施している。同6～8は、壺底部資料である。第53図21・22は条痕文系土器片で作成した土製円盤である。第56図7は磨石で、半分ほどを欠損する。

ピット

ピットは調査区内全域において散在的に検出されているがX = 30、Y = 140グリッド、X = 20、Y = 130グリッド付近に分布の中心がある。いずれのピットも縄文土器、弥生土器、土師器の小破片が数点出土したにすぎず、図化可能で時期を特定できるような遺物はほとんど出土していないが、17号ピットからは、内面に暗文をもつ内面黒色土器が出土しており、10世紀後半代に掘られた可能性がある（第52図12）。

2号掘立柱建物の西側に隣接する34～36号ピットは、列をなすことから掘立柱建物の柱穴列である可能性が高いが、西側は調査区外となっており、断定は出来ない（第21図）。

第5節 集石土坑

1号集石土坑（第34図）

位 置 X = 10、Y = 90グリッド

主 軸 N -14° - E

遺構概要 東区の南西隅に位置する。北東に1号住居、南に13号溝、北に3号土坑が隣接する。東西1.66m、南北2.31m、深さ0.15mほどの不整形の浅い掘り込みの中央部に、東西1.24m、南北1.0m、深さ0.5mほどの東西に長い不整形の掘り込みをもつ。中央部の掘り込みの西側は擾乱を受けている。掘り込み内には、5～10cmほどの礫が多量に検出された。出土遺物はなく、用途、性格ともに不明。

時 期 不明

2号集石土坑（第35図）

位 置 X = 10、Y = 100グリッド

主 軸 N -16° - E

遺構概要 東区の南西に位置する。北に1号住居、南に13号溝、北西に2号土坑が隣接する。長径1.4m、短径1.3m、深さ0.37mの不整円形の掘り込み内に、多量の礫が検出された。礫は、上層と下層に分かれた状況であったが、覆土は自然堆積を示すような痕跡は認められなかった。出土遺物はなく、用途、性格ともに不明。

時 期 不明

3号集石土坑（第35図）

位 置 X = 50、Y = 150グリッド

主 軸 N -46° - E

遺構概要 東区の北側に位置する。北側に5号住居が隣接する。長径1.2m、短径1.1m、深さ0.56mの不整円形を呈した掘り込み内に、5～40cmほどの礫が確認された。礫は、土坑の上層にみられ、下層からは確認されていない。

遺物出土状況（第35図）

覆土上層より弥生土器の小破片がわずかに2点出土したのみであり、図示できるようなものはない。

時 期 不明

第6節 焼土遺構

1号焼土遺構（第35図）

位 置 X = 10、Y = 130グリッド

主 軸 N -57° - W

遺構概要 東区の南側に位置する。南に10号溝、北に31号ピットが隣接する。長径0.83m、短径0.6m、深

さ0.15mの浅い掘り込みをもつ梢円形のプランを呈する。覆土中には褐色砂質土を混入した焼土がみられた。掘り込み内から遺物の出土はない。周辺からは、条痕文系土器が多数出土しているが、関連性があるかどうかは不明。

時 期 不明

第7節 溝 跡

1号溝（第36図）

位 置 X = 10、Y = 110グリット

主 軸 N - 27° - E

遺構概要 東区の南に位置する。中央部を直交する2号溝に切られ、北側で4号土坑を切る。南北ともに調査区外に延びる。現存長7.0m、幅0.8~1.0m。深さ北側0.4m、南側0.34mほどである。溝断面は、北側ではV字状を呈するが、南側では船底形を呈する。

遺物出土状況（第36図）

出土遺物は散在的で、縄文土器、弥生土器、土師器などが30点ほど出土している。

出土遺物（第52図）

第52図13は土師器壺の底部資料で、底部に墨書きされるが、判読不明。同14は、羽釜の口縁から鈎にかけての資料である。

時 期 10世紀後半以降

2号溝（第37図）

位 置 X = 10、Y = 100~X = 10、Y = 120グリット

主 軸 N - 76° - W

遺構概要 東区の南西端に位置し、中央付近で1号溝と直交し、東側で5号土坑、8号溝と重複し、いずれの遺構をも切る。北に2号住居、3・4号土坑が隣接する。東側は、耕作による擾乱によって上端が残存しない部分も多い。現存長29.2m、幅0.8~1.3m。深さは西側で0.12m、中央部で0.13~0.18m、東側で0.19mである。

遺物出土状況（第37図）

遺構が長いこともあり、90点ほどの遺物が出土している。遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器、石器、黒曜石片などがある。いずれも溝掘削前の流れ込みの遺物であろう。

出土遺物（第52図）

第52図15・16は条痕文系土器で、16は口縁部に断面が丸みを帯びた並行沈線文を施している。同17~19は土師器壺で、19は内面に暗文を施した内面黑色土器である。同20は灰釉陶器の皿である。

時 期 摶乱が激しく、擾乱による後世の混入の可能性もあるが、近世以降の磁器類もみられることから、近世以降。

3号溝（第37図）

位 置 X = 10、Y = 100~X = 10、Y = 110グリット

主 軸 N - 74° - W

遺構概要 東区の南西端に位置し、南に2号溝、北に4号溝が並行する。東側で6号土坑と隣接する。遺構西側は、試掘調査によって削平されており、現存長5.6m、幅0.25~0.4m、深さは西側で0.07m、東側で0.05mを測る。出土遺物はなし。

時 期 不明

4号溝（第37図）

位 置 X = 10、Y = 110グリット

主 軸 N - 75° - W

遺構概要 東区の南西端に位置し、南に2・3号溝が並行する。東に6号土坑が隣接する。全長1.6m、幅0.23m。深さ0.04mの小規模な溝である。出土遺物はない。

時 期 不明

5・10号溝（第38図）

位 置 X = 20、Y = 120～X = 30、Y = 140グリット

主 軸 N - 36° - E

遺構概要 東区の中央よりやや南側に位置する。3号住居、2・3号掘立柱建物、4・34号土坑と重複し、いずれの遺構をも切る。北側に6号住居、6号溝、内側に1号焼土遺構、20・21・23・24・42号土坑、17・18・27号ピット、南側に9号溝、13号土坑、29号ピットが隣接する。

本遺構の西側は、本調査終了後の山梨市教育委員会の調査によって検出されたもので、本調査では接続関係に無かったため、北側を5号溝、南側を10号溝として、調査を行った。その後の山梨市教育委員会の発掘調査により、連続した方形を呈した溝であることが明らかとなった。ここでは、5・10号溝を同一の遺構として報告する。規模は、東西13.2m、南北15.4mを測る方形の溝跡である。西隅は84°となることから、方形とはならず、東西隅がやや潰れた不整形のプランを呈する。溝の幅は東隅部が広く0.9mほどあるが、他は0.09～0.45mほどである。深さも総じて浅く、0.1～0.2mほどである。南東側の溝は残存しない部分もあり、接続していない。ただし、南東側で北から延びる溝は、内側へ直角に曲がり0.7mほどで終息している。南側から延びる溝も同様な形態であった可能性もあるが、残存せず不明。本遺構は、建物など何らかの施設を開発していた区画溝の可能性が高く、南東側で溝が切れる部分が入口的な施設であったことも考えられる。ただし、区画内および本遺構周辺からは、柱穴などの遺構は確認されておらず、内部空間の性格については不明である。

遺物出土状況（第38図）

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器など合わせて20点ほどがあるが、いずれも小破片であり、図示できるような遺物は出土していない。

時 期 土師器が出土していることから、平安時代以降であるが、時期の特定はできない。ただし、遺構の切り合い関係からは、本遺構より新しい遺構は確認されていない。

6号溝（第36図）

位 置 X = 30、Y = 130～X = 30、Y = 140グリット

主 軸 N - 70° - W

遺構概要 東区のはば中央に位置する。中央付近で6号住居、東側で7号溝切る。南側に3号住居、5号溝、北側に19号溝、北西に4号住居、15号溝が隣接する。東、西ともに調査区外に延び、現存長14.3m、幅0.56～0.90m。深さは西側0.11m、中央部0.27m、東側0.19mほどのやや弧状となる遺構である。

遺物出土状況（第36図）

出土遺物は少なく、縄文土器、弥生土器、土師器の小破片が散在的に13点ほど出土しているに過ぎない。

出土遺物（第52図）

第52図21・22は、いずれも土師器壺の底部資料である。回転糸切痕を明瞭に残す。

時 期 出土遺物のうち、土師器は10世紀前後のものと思われるが、中央付近で重複する6号住居の遺物が混入している可能性もあり、平安時代以降としか断定できない。

7号溝（第36図）

位 置 X = 30、Y = 140グリット

主 軸 不明

遺構概要 東区のはば中央の東端に位置する。はば並行する6号溝に切られる。東側は調査区外に延びており、現存長2.2m、幅1.35m、深さは0.07mほどである。

遺物出土状況（第36図）

西端で弥生土器、土師器の小破片がそれぞれ1点、出土したに過ぎず、図示できるようなものはない。

時 期 不明

8号溝（第36図）

位 置 X = 10、Y = 120グリット

主 軸 N - 22° - E

遺構概要 東区の南端に位置する。西側で2号溝と重複し、切られる。北西に2号住居が隣接する。周辺は、耕作による搅乱が激しく、削平を受けている部分も多くある。東端では、溝がはば直角に折れるが、0.1mほどで終息している。当初からこのような在り方だったのか、削平により残存していないのかは明らかではない。遺構の南側は調査区外へ延びているものと思われ、東西長6.88m、南北現存長4.32m、幅0.14～0.26m、深さは西側で0.1m、北側で0.09m、北東側で0.13mほどである。調査区外に遺構が延びているために断定は出来ないが、5・10号溝のように、方形の区画溝であった可能性もある。

遺物出土状況（第36図）

遺構の周辺から、弥生土器、土師器が出土しているが、溝の覆土中から遺物の出土はない。

時 期 不明であるが、5・10号溝と同時期の可能性もある。

9号溝（第36図）

位 置 X = 10、Y = 130グリット

主 軸 N - 57° - W

遺構概要 東区の南側に位置する。北に10号溝、東に13号土坑が隣接する。遺構の残存状況が悪く、2本に分かれているが、本来は繋がった溝であったものと考えられる。欠損部も含めた全長3.46m、幅0.09～0.14m、深さは西側で0.05m、東側で0.07mである。

遺物出土状況（第36図）

覆土内からの出土遺物は少なく、縄文土器、弥生土器、土師器の小破片がそれぞれ1点出土したのみである。いざれも図示できるような資料はない。

時 期 不明

11号溝（第39図）

位 置 X = 20、Y = 120～X = 10、Y = 120グリット

主 軸 N - 67° - W

遺構概要 東区の南端付近に位置する。南に2号住居、北に43号土坑が隣接する。遺構の西側は調査区外へ延び、東端は搅乱を受けている。現存長6.5m、幅0.62～1.03m、深さは西側で0.07m、東側で0.04mほどの浅い溝である。

遺物出土状況（第39図）

覆土内から、縄文土器1点、弥生土器2点、土師器5点が出土したが、いざれも小破片である。

出土遺物（第52図）

第52図23は、条痕文系土器の甕。同24は、羽釜の口縁部資料である。

時 期 不明

12号溝（第39図）

位 置 X = 10、Y = 90グリット

主 軸 N - 3° - E

遺構概要 東区の南西端に位置する。北に13号溝が隣接する。南は調査区外へ延びており、現存長1.7m、幅0.47m、深さは0.1mほどである。出土遺物はみられない。

時 期 不明

13号溝（第39図）

位 置 X = 10、Y = 80～X = 10、Y = 100グリット

主 軸 N - 80° - W

遺構概要 東区の南西端に位置する。中ほどで10号土坑に切られる。南に12号溝、北側に2号集石遺構が隣接する。南、西側ともに調査区外へ延びている。現存長17.3m、幅0.35mほどであるが、東側では直角に広がりを見せ、現状で1.0mほどが確認された。深さは西側で0.18m、中央部で0.07～0.09m、東側で0.08mほどである。覆土にも変化がみられず、深さにもそれほど違いがみられないことから、広がりをみせる東側のプランも同一遺構と思われるが、形状から溝状を呈さない可能性が高い。

遺物出土状況（第39図）

縄文土器、土師器の小破片がわずかに出土したにすぎない。

出土遺物（第52図）

第52図25は、土師器壺の口縁部資料である。

時 期 不明

14号溝（第40図）

位 置 X = 40、Y = 140～X = 40、Y = 150グリット

主 軸 N - 67° - W

遺構概要 東区の中央よりやや北側に位置する。中央で、直交する17号溝に切られ、風倒木痕を切る。南に4号住居、1号竪穴、北に18号溝が隣接する。中央部は試掘トレンチによる掘り下げをされており、残存していない。西側は調査区外へと延びている。現存長15.7m、幅0.73～1.1m、深さは西側で0.09m、東側0.12mほどである。

遺物出土状況（第40図）

縄文土器、弥生土器、土師器の小破片が十数点、磨石も1点ではあるが出土している。

出土遺物（第52図）

第52図26は、縄文土器で称名寺式の深鉢胴部資料である。第56図8は磨石で、両面とも使用している。

時 期 不明

15号溝（第40図）

位 置 X = 30、Y = 130～X = 30、Y = 140 グリット

主 軸 N - 63° - W

遺構概要 東区の中央の西端に位置する。南に6号溝、北東に4号住居、1号竪穴が隣接する。西側は調査区外へと延びている。北側の一部を耕作による搅乱によって削平されている。現存長4.3m、幅0.59～1.21m、深さは東側で0.07m、西側で0.12mを測り、西側に向かって幅を広げている。

遺物出土状況（第40図）

西側の調査区境付近において 土師器壺の小破片が出土したに過ぎない。

時 期 不明

16号溝（第40図）

位 置 X = 40、Y = 140グリット

主 軸 N - 21° - E

遺構概要 東区の中央の西側に位置する。東に18号土坑、南に4号住居、1号竪穴、北に14号溝が隣接する。東側に走る17号溝とはほぼ並行する。全長1.8 m、幅0.15 ~ 0.2 m、深さは0.1 mほどである。遺物は出土していない。

時 期 不明

17号溝（第40図）

位 置 X = 50、Y = 140 ~ X = 40、Y = 140グリット

主 軸 N - 27° - E

遺構概要 東区の中央よりやや北側に位置する。中ほどで、14・18号溝、風倒木痕と重複。14号溝には切れ、18号溝、風倒木痕を切っている。西には32号土坑、南には4号住居が隣接する。全長12.6 m、幅0.13 ~ 0.24 m、深さは南側で0.08 m、中央部で0.13 m、北側で0.18 mほどである。

遺物出土状況（第40図）

弥生土器の小破片がわずかに3点出土したのみで、図示できる資料はない。

時 期 不明

18号溝（第40図）

位 置 X = 40、Y = 140 ~ X = 40、Y = 150グリット

主 軸 N - 66° - W

遺構概要 東区の中央よりやや北側に位置する。17号溝とは直交、風倒木痕ともに切っている。南に14号溝が並行する。中ほどは試掘トレンチにより、西側端は攪乱によって残存していない。現存長8.2 m、幅0.68 ~ 1.0 m、深さは東側で0.06 m、西側で0.04 mほどである。

遺物出土状況（第40図）

出土遺物は少なく、弥生土器8点、土師器1点、黒曜石片1点が出土したのみである。

出土遺物（第52図）

第52図27・28は条痕文系土器壺の胴部資料。第53図23は条痕文系土器壺の破片を用いた土製円盤である。

時 期 不明

19号溝（第40図）

位 置 X = 30、Y = 140グリット

主 軸 N - 68° - W

遺構概要 東区の中央の南東に位置する。中ほどで大きく攪乱を受けており、東側で44号土坑を切る。南側に6号住居、6号溝が隣接する。全長4.2 m、幅0.32 ~ 0.45 m、深さは東側で0.08 m、西側で0.05 mである。遺物は出土していない。

時 期 不明

第8節 集石遺構

1号集石遺構（第41図）

位 置 X = 40、Y = 150グリット

主 軸 N - 64° - W

遺構概要 東区の中央よりやや北側に位置する。東側は調査区外に延びている。南に18号溝、北に25・26号ピットが隣接する。現存長42m、幅22m、深さ0.3mの不整長方形状の掘り込み内から、5~40cmほどの縁が多量に検出された。

遺物出土状況（第41図）

縁の間から縄文土器と土師器の小破片が1点ずつ出土したが、図示できるようなものではない。

時 期 不明

第9節 風倒木痕

1号風倒木痕（第41図）

位 置 X = 40、Y = 140グリット

遺構概要 東区の中央より北側に位置する。35号土坑、14・17・18号溝と重複し、すべてに切られる。長径5.1m、短径4.5m、深さ0.95mを測る不整形を呈する。東側は、試掘トレンチによって削平され、残存していない。当初、土坑と想定して調査を開始したが、プランや底部が不整形であり、地山土に近い土層が覆土上層に、下層には暗褐色土層が堆積するなどしていることから、風倒木の痕跡であると判断した。

遺物出土状況（第41図）

覆土中より縄文時代中期の土器が8点ほど出土しているが、いずれも小破片であり、図示していない。

時 期 出土遺物に土師器がみられないことから、平安時代以前だと推定される。

第10節 弥生土器集中区

土器集中区（第42図）

位 置 X = 20、Y = 130グリット

概 要 弥生土器および土製円盤は、東区調査区全体から出土しているが、東区南側に位置する1号焼土遺構があるX = 20、Y = 130グリット付近を中心に集中する傾向にあった。遺構外より出土した弥生土器で、復元実測可能な遺物は、本地区に集中している。遺物を取り上げながら、遺構確認作業を数度にわたって実施したが、遺構の痕跡を確認することは出来なかった。遺構を確認するには至らなかったが、同時期の遺物が集中して出土したことから、遺物分布図を示しておく。

遺物出土状況（第42図）

わずか0.1mほどの包含層から、多数の条痕文系土器が出土している。土器は、分布の広がりをみせるが、X = 18、Y = 133グリット付近を中心に、図示できるようなやや大形の遺物が出土している。土器とともに条痕文系土器を整形して作製した土製円盤も多数出土している。そのうちX = 20、Y = 134グリットからは十数点がまとまって出土している。

この土器集中地點には1号焼土遺構があるが、集中して出土する条痕文系土器との関係は明らかにすることができなかった。他に土器集中区において関連すると考えられる遺構は確認されていない。

出土遺物（第53~55図）

第53図4~10は条痕文系土器である。4・5は波状口縁をもち、口縁部から脣部へ向かい、縦方向に条痕文を施している。同6は、口唇部に指頭圧痕による刻みをもち、口縁部に4条の並行沈線文を巡らせる。

第54図1~24・第55図1~14は条痕文系土器を加工して製作した土製円盤である。

第1表 土坑・ピット一覧表

遺構名	位置(X-Y)	形態	上端		下端		深さ	主軸	出土遺物(点数)	備考
			長径×短径		長径×短径					
1号土坑	30-20	楕円形	1.30×0.87	0.84×0.54	0.37	N-33°-E				
2号土坑	10-90	円形	0.75×0.74	0.21×0.17	0.12	N-17°-E				
3号土坑	10-90	楕円形	0.86×0.66	0.43×0.26	0.22	N-84°-W				
4号土坑	10-110	不整楕円形	0.98×[0.58]	0.47×[0.24]	0.18	N-15°-E	土師器2		1号溝に切られる	
5号土坑	10-130	不整円形	1.40×1.32	0.62×0.54	0.70	N-80°-W	弥生10			
6号土坑	10-110	不整形	0.96×0.80	0.56×0.18	0.20	N-10°-E				
7号土坑	30-140	不整楕円形	1.33×0.52	0.52×0.13	0.45	N-30°-E	水晶1			
8号土坑	20-130	楕円形	1.08×0.73	0.85×0.53	0.17	N-47°-E	黒曜石1			
9号土坑	20-130	楕円形	0.89×0.74	0.70×0.57	0.43	N-17°-W	品4、粘土塊2、黒曜石2			
10号土坑	10-90	-	1.27×[0.70]	1.20×[0.63]	0.05	N-60°-W			13号溝を切る	
11号土坑	40-130	楕円形	1.43×0.67	1.22×0.21	0.24	N-17°-W	縄文1			
12号土坑	30-130	不整形	[0.80]×0.57	0.20×[0.16]	0.59	N-17°-E	縄文1		Pit8に切られる	
13号土坑	10-130	楕円形	1.05×0.89	0.74×0.56	0.51	N-47°-E	弥生21、土製品1、石鐵1			
14号土坑	20-120	不整楕円形	0.74×0.60	0.32×0.28	0.34	N-7°-E	弥生3			
15号土坑	30-130	不整楕円形	0.67×0.44	0.44×0.26	0.23	N-35°-E	弥生1			
16号土坑	20-120	円形	1.00×0.90	0.87×0.73	0.09	N-39°-E			Pit11を切る	
17号土坑	20-120	楕円形	0.94×[0.50]	0.84×[0.46]	0.07	N-56°-E	弥生1			
18号土坑	40-140	楕円形	1.00×0.68	1.00×0.52	0.23	N-35°-W	縄文2、弥生1			
19号土坑	20-130	楕円形	1.95×1.15	1.77×0.91	0.13	N-45°-E	弥生3、土師器1			
20号土坑	3号掘立～変更									
21号土坑	3号掘立～変更									
22号土坑	-	-	-	-	0.31	-			24号土坑を切る	
23号土坑	3号掘立～変更									
24号土坑	30-130	不整形	1.91×1.32	0.76×0.50	0.89	N-76°-W			22号土坑に切られ、42号土坑、Pit16・27と重複	
25号土坑	30-140	円形	0.65×0.54	0.45×0.36	0.08	N-64°-W				
26号土坑	30-140	円形	0.68×0.60	0.48×0.41	0.05	N-89°-W				
27号土坑	30-140	円形	0.64×0.60	0.46×0.41	0.19	N-9°-W	弥生1		Pit21を切る	
28号土坑	30-140	楕円形	[1.03]×0.78	[0.94]×0.54	0.15	N-65°-E	弥生1		29号土坑と重複	
29号土坑	30-140	不整円形	[0.83]×[0.80]	0.53×0.34	0.39	N-29°-W	縄文3		30号土坑を切り、28号土坑と重複	
30号土坑	30-140	円形	直径0.76	直径0.60	0.43	N-29°-W			29号土坑に切られる	
31号土坑	40-140	楕円形	0.48×0.22	0.38×0.14	0.09	N-64°-W				
32号土坑	40-140	不整楕円形	0.75×[0.32]	0.67×[0.29]	0.07	N-40°-E	弥生1		17号溝に切られる	
33号土坑	40-140	楕円形	1.42×0.57	1.10×0.33	0.47	N-59°-E	弥生8			
34号土坑	20-140	楕円形	0.61×0.46	0.38×0.16	0.24	N-65°-W	弥生1			
35号土坑	40-140	不整形	1.12×0.79	0.60×0.50	0.26	N-27°-E	弥生1		18号溝に切られ、風呂木痕と重複	
36号土坑	30-140	隅丸長方形	1.05×0.53	0.97×0.42	0.08	N-56°-E	弥生3			
37号土坑	50-140	円形	0.60×0.46	0.47×0.38	0.05	N-59°-E				
38号土坑	50-150	楕円形	0.74×0.56	0.67×0.50	0.04	N-50°-E				
39号土坑	50-140	円形	直径0.60	直径0.52	0.06	N-30°-E				
40号土坑	50-150	楕円形	0.94×0.66	0.80×0.46	0.16	N-9°-E				
41号土坑	50-150	楕円形	1.26×0.65	1.05×0.48	0.30	N-26°-E				
42号土坑	30-130	円形	0.83×[0.46]	0.47×[0.36]	0.40	N-26°-W			24号土坑、Pit27と重複	
43号土坑	20-120	円形	直径1.12	0.82×0.74	0.71	N-26°-E	弥生221、土製品2、石製品1、黒曜石6			
44号土坑	30-140	不整楕円形	1.12×0.84	0.50×0.21	0.48	N-36°-E	縄文3			
45号土坑	50-150	楕円形	0.72×0.50	0.36×0.18	0.25	N59°-E				
46号土坑	50-150	円形	0.82×0.65	0.73×0.52	0.22	N-75°-W				
47号土坑	50-150	円形	0.76×0.63	0.48×0.41	0.34	N-36°-W				
48号土坑	60-150	楕円形	1.25×0.63	[0.52]×0.21	0.32	N-23°-E	縄文1、弥生3		Pit28に切られる	
49号土坑	60-150	楕円形	1.46×0.75	1.10×0.53	0.22	N-59°-W	縄文1		50号土坑を切る	
50号土坑	60-150	-	1.39×1.23	1.20×0.96	0.18	N-28°-E	縄文4、弥生1		49号土坑に切られ、52号土坑を切る	
51号土坑	60-150	隅丸長方形	2.21×1.06	0.98×0.82	0.42	N-58°-W	縄文2、弥生1、土師器		62号土坑を切る	
52号土坑	60-150	隅丸長方形	1.69×0.73	1.48×0.54	0.29	N-54°-W	縄文2		50・51号土坑に切られる	
53号土坑	60-150	隅丸長方形	1.77×0.92	1.63×0.76	0.31	N-61°-W	土師器4			
54号土坑	60-150	楕円形	1.48×0.63	1.33×0.50	0.10	N-77°-W	弥生1			

遺構名	位置(X-Y)	形態	上端	下端	深さ	主軸	出土遺物(点数)	備考
			長径×短径	長径×短径				
55号土坑	20-130	精円形	1.18×0.50	0.93×0.23	0.26	N=7° -W		
56号土坑	20-130	精円形	0.93×0.61	0.69×0.50	0.20	N=89° -W	60号土坑を切る	
57号土坑	20-130	不整円形	1.33×1.26	1.15×1.02	0.10	N=40° -W	弥生5	
58号土坑	20-130	精円形	0.99×0.58	0.77×0.43	0.09	N=47° -W	弥生3	
59号土坑	20-130	不整形	0.90×0.60	0.44×0.12	0.39	N=41° -W	土師器3	
60号土坑	20-130	精円形	0.63×0.46	0.23×0.11	0.30	N=60° -E		56号土坑に切られる
Pit1	20-20	円形	0.26×0.25	0.12×0.11	0.13			
Pit2	30-20	円形	0.35×0.34	0.19×[0.14]	0.05			
Pit3	10-110	円形	0.45×0.41	0.34×0.32	0.06			
Pit4	2号掘立～変更							
Pit5	20-120	円形	直径0.50	0.42×0.36	0.10			
Pit6	2号掘立～変更							
Pit7	40-130	不整円形	0.36×0.31	直径0.20	0.08			
Pit8	30-130	-	0.36×[0.28]	0.28×[0.23]	0.12		12号土坑を切る	
Pit9	30-130	精円形	0.30×0.21	0.15×0.13	0.10			
Pit10	10-130	精円形	0.44×0.40	0.26×0.25	0.38		弥生1	
Pit11	20-120	精円形	0.56×0.46	0.43×0.34	0.04		16号土坑に切られる	
Pit12	20-140	円形	直径0.50	0.24×0.18	0.45		弥生2	
Pit13	2号掘立～変更							
Pit14	2号掘立～変更							
Pit15	2号掘立～変更							
Pit16	30-130	精円形	0.56×0.42	0.30×0.25	0.26			
Pit17	30-130	不整精円形	[0.60]×0.49	直径0.09	0.23		土師器1	Pit18・27と重複
Pit18	30-130	-	0.51×[0.20]	0.23×[0.12]	-			Pit17と重複
Pit19	30-140	円形	0.37×0.25	0.26×0.23	0.04			Pit26に切られる
Pit20	30-140	円形	0.47×[0.46]	0.37×0.33	0.04			Pit19を切る
Pit21	30-140	円形	0.53×[0.48]	0.35×0.30	0.27		縄文1	27号土坑に切られる
Pit22	30-140	円形	0.44×[0.42]	0.36×0.29	0.39			
Pit23	40-150	円形	0.39×0.36	直径0.17	0.20			
Pit24	50-150	円形	0.45×0.42	0.37×0.33	0.06			
Pit25	50-150	円形	0.48×0.46	0.35×0.30	0.12			
Pit26	50-150	円形	直径0.26	0.18×0.17	0.10			
Pit27	30-130	-	[0.48]×	0.27×-	-		土師器2	24・42号土坑、Pit17と重複
Pit28	60-150	不整精円形	0.49×0.38	0.30×0.23	0.53			48号土坑を切る
Pit29	10-130	精円形	0.44×0.23	0.41×0.16	0.06			
Pit30	10-120	円形	0.28×0.26	0.17×0.16	0.19		弥生1、土師器1	
Pit31	10-130	精円形	0.46×0.33	0.33×0.20	0.09		弥生1	
Pit32	20-130	精円形	0.47×0.40	0.22×0.15	0.24			
Pit33	30-120	不整精円形	0.82×0.81	0.45×[0.30]	0.33			
Pit34	20-120	不整円形	0.38×0.37	0.31×0.30	0.20			
Pit35	20-120	円形	0.33×0.32	0.26×0.23	0.32			
Pit37	20-120	不整精円形	0.73×0.38	0.45×0.17	0.26			
Pit38	20-120	不整精円形	0.62×0.49	0.57×0.31	0.21			
Pit36	20-120	円形	0.32×0.30	0.19×0.17	0.25			5号溝と重複

第4表 出土遺物觀察表(石器)

法量()は復元実測値、〔 〕は現存値である。

遺構名	図版番号	種別	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
6号住居	55-33	幼獣車	滑石片岩	3.20	3.15	1.30	22.82	孔径0.6cm
遺構外	55-34	幼獣車	蛇文岩類か	3.50	3.50	2.10	39.54	
13号土坑	56-1	石鍬	黒曜石	1.85	1.70	0.40	0.77	
2号溝	56-2	石鍬	チャート	2.30	1.45	0.40	0.80	
遺構外	56-3	石鍬	黒曜石	2.70	1.70	0.60	1.64	
遺構外	56-4	石鍬	チャート	2.35	1.45	0.35	1.05	
遺構外	56-5	石鍬	黒曜石	1.90	1.10	0.35	0.63	
2号住居	56-6	石鍬	黒曜石	3.30	1.10	0.40	1.35	
43号土坑	56-7	磨石	安山岩	10.6	8.30	2.60	267.00	
14号溝	56-8	磨石	安山岩質燧灰岩	12.0	8.05	5.00	741.00	

第5表 出土遺物觀察表(金属製品)

法量()は復元実測値、〔 〕は現存値である。

遺構名		種別	法量			重量(g)	備考
			長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
3号住居	56-9	刀子	[10.2]	1.01	0.30	9.56	
遺構外	56-10	煙管(吸口部)	5.6	径:0.8～0.6	0.05	6.62	銅製
1号住居	56-11	棒状鉄製品	[6.8]	0.65	0.40	6.65	
2号住居	56-12	棒状鉄製品	[11.6]	0.40	0.45	6.53	
5号住居	56-13	棒状鉄製品	[10.3]	0.55	0.35	4.93	
試掘 T1	56-22	古錢	2.2	2.2	0.1	2.73	「洪武通宝」明1368年
試掘 T1	56-23	古錢	2.2	[2.15]	0.09	[1.79]	「開元通宝」南唐960年

第4章 総括

第1節 集落のあり方について

昭和24年から開始された5次にわたる発掘調査によって、堅穴住居29軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条などが発見された。発掘調査地点は、日下部中学校（現山梨北中学校）建設に伴うもので、第1・2次調査は、現在の日下部公民館北側、第3・4次調査は現校舎南側を調査している。

過去の調査における堅穴住居は、9世紀後半から10世紀代を主体としており、第6次調査で検出された6軒の堅穴住居とはほぼ同時期である。

ここで、本調査（第6次調査）も含め、日下部遺跡の堅穴住居配置についてみてみたい。第1・2次調査および第3・4次調査においてもかなりの密度で住居が点在する。また、第6次調査においても調査区南側ではそれなりの密度をもっており、5号住居跡がやや離れて位置する。各調査区間の遺構分布状況は不明であるが、点在する3地点の状況からすると、同様な状況である可能性が高いといえる。

堅穴住居に敷設されるカマドは、壁中央のもの、壁中央よりややコーナーに寄った位置のもの、コーナーに設置されたものが存在するが、いずれも住居中央よりみて北東から南東側の壁に設置されている。これまで調査された堅穴住居の主軸方向はどうであろうか。カマドが設置された壁とその対辺を主軸として計測しものが第7図である。まず、第1・2次調査における堅穴住居は、N-30°-WからN-61°-WのグループとN32°-EからN-43°-Eの2グループに分かれる。この2グループの違いは、設置されたカマドが住居中央から見て東側の壁に設置されているものの、北東側の壁に位置するのか南東側の壁に位置するのかの違いであり、カマド位置を考慮しない主軸方向を見てみれば、すべての住居がN-30°-WからN-61°-Wの範囲に入ることになる。

第3・4次調査における堅穴住居は、N-33°-WからN-54°-Wの範囲に入る8軒のグループとN-33°-Eの1軒の2グループに分かれる。この両者の違いも第1・2次調査におけるグループの違いと同様である。

第6次調査における6軒の堅穴住居は、N-63°-WからN-68°-Wの範囲に入り、他地区よりすべて西寄りに偏しているが、より齊一性が高いともいえる。また、9世紀後半代に比定される4・6号住居は、とともにN-63°-Wを取り、10世紀前半代に比定される他の4軒の堅穴住居はN-65°-WからN-68°-Wの範囲に収まっており、時期による規則性も認められる。

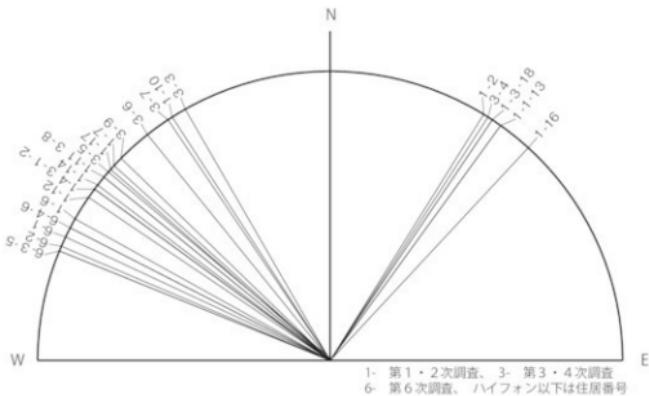
先にも触れたように、主軸が異なる2グループが存在するものの、カマド設置位置の違いに起因するものであり、カマド位置を考慮しない主軸をみると、N-30°-WからN-68°-Wの範囲にすべての堅穴住居が収まることになる。また、第6次調査で発見された3棟の掘立柱建物跡も第6次調査の堅穴住居と類似した主軸を採っている。

以上、遺構の在り方は、3地点に類似性が認められるものと考える。

では、第1次から5次調査における出土遺物と第6次調査出土遺物に関連性はみられるだろうか。過去の調査においては、墨書土器が多いことが特筆され、「王」の墨書をもつ土器が多く出土している。第6次調査においても2・5号住居、試掘6号トレンチより出土しており、類似性は認められる。その他、土錘、筒形土製品なども共通要素として挙げることができることから、過去の調査区検出の遺構群と第6次調査によって発見された遺構群は同一の集落であったものと考えられる。

ただし、第1次調査1号住居からは、倉庫の鍵として使用されたクルリ鉤、銅製鉢帶金具の丸鞘、同2号住居からは鉄製鉗具、銅製鉢帶金具の巡方が出土しており、有力者の居住区域であったことが想定される。第6次調査区の南側では堅穴住居が密集しているが、調査区北側では散漫であり、第6次調査区西側の試掘調査の結果を見ても、堅穴住居の存在は確認されていない。また、平成10年に実施された山梨市教育委員会の遺跡分布調査では、第6次調査区は日下部遺跡の範囲から外れており、遺物も表面採集されなかつたも

のと思われることから、当該期の日下部の集落は、第1～5次にわたり調査が行われた山梨北中学校の敷地を中心として展開しており、第6次調査区は、集落の北端に位置しているといえよう。



第7図 日下部遺跡竪穴住居主軸方位

第2節 出土遺物について

6次にわたる本遺跡の発掘調査によって、土師器、須恵器をはじめとするさまざまな遺物が出土している。その中にあって、墨書・刻書土器の多さ、筒形土製品など、本遺跡を特徴づける遺物がみられる。

過去の調査における墨書・刻書土器については、上野晴朗氏が『甲斐史学』誌上において報告を行っており（上野1960）、調査報告書にも再録されている。

これによると、墨書土器は60点以上出土しているが、7軒の竪穴住居を調査した第3・4次調査においては、10点ほどとやや少ない出土傾向にあり、同一遺跡内においても墨書・刻書土器の保有率に住居ブロックごとに保有率に差異があったことがみてとれる。

50点ほどが出土した第1・2次調査においても、1～3号住居から30点ほどが出土し、全体の出土量の三分の二を占めている。1～3号住居は、第1・2次調査で発見された竪穴住居中、規模が大きいものであり、墨書・刻書土器が集中するブロックにありながらも、住居の規模によって所有率が異なる可能性が高いことが考えられる。

また、60点ほどの墨書・刻書土器中「王」と記されたものが21点を占めている。とくに、第1次調査3号住居からは10点の墨書土器が出土しており、そのうち「王」の墨書が6点みられることも本遺跡の特徴として挙げることができる。

一方、今回の6次調査では、4号住居以外から墨書土器が出土しているが、3号住居が最も多く6点を数えることから、特定の住居への集中傾向はみられず、ほぼ等質的といえよう。これは、本調査区の竪穴住居の規模にそれほど差異が認められないことによるものと考えることが出来るかもしれない。また、過去の調査によって多くみられた「王」と記された墨書土器は、2号住居から2点、5号住居から1点、およびその可能性が高いものが1点（第48図13）出土している。数量的には少ないが、本調査区の住居群も日下部の集落の一角を担っていた証左となるものであろう。

もう一つの特徴的な遺物として筒形土製品を挙げることが出来る。筒形土製品は、カマド構築材の一部ないしカマドや土器焼成坑の煙突などとして使用されたものであり、古墳時代後期から平安時代にかけて用いられたものである。

山梨県内における筒形土製品の発見は、上野晴朗氏による七日子遺跡の発掘調査によるものである（上野1948）。その後、日下部遺跡の発掘調査によって、6号住居のカマド内より筒形土製品が出土したこと、カマドに伴う遺物であることを示唆した（上野1958）。

山梨県内の筒形土製品の在り方については、以前概観したことがあるが（宮澤2009）、古墳時代後期においては、笛吹市二之宮・姥塚遺跡や大原遺跡、鞍掛遺跡など甲府盆地東部地域に集中している。

一方、奈良・平安時代における出土例は、盆地東部から北東部地域、韮崎地域、南アルプス地域に分布が集中している。その中で、盆地東部から北東部にかけては、日下部遺跡、七日子遺跡、天神原西、勝沼バイパス杭No.282地点などからの出土例があり、日下部遺跡の所在する盆地北東部地域が分布の中心となっている。

日下部遺跡からは、第1次6号住居から2点、第3・4次1・3号住居から各1点、第6次2号住居から3点、5号住居から1点が出土している。他の当該期の集落遺跡と比較して、使用比率は高いものといえる。しかし、遺跡内に散在的に分布しており、野牛島・西ノ久保遺跡や宮の前遺跡でみられたような、集落内における分布の片寄りはみられない。

日下部遺跡、七日子神社遺跡、また、両遺跡の中間地点に位置する天神原（現在の遺跡名では天神原南遺跡、天神原北遺跡付近）では、底部を有する例がほとんどを占め、整形技法もほとんど類似している。これらの地域を中心とした甲府盆地北東部地域は、平安時代において筒形土製品の使用が盛行する地域として特徴づけられるといえる。

参考文献

- 上野晴朗 1948「七日子神社と土師遺跡」『郷土研究』第8号 山梨郷土研究会
上野晴朗 1968「日下部上代聚落遺跡について」『甲斐史学』第3号 甲斐史学会
上野晴朗 1960「甲斐國発見の墨書土器と陰刻文字」『甲斐史学』第11号 甲斐史学会
数野雅彦 2005「連方屋敷」『山梨市史』 資料編 考古・古代・中世 山梨市
数野雅彦 2007「連方屋敷と上野氏屋敷」『山梨市史』 通史編 上巻 山梨市
中山誠二 2005「条理」『山梨市史』 資料編 考古・古代・中世 山梨市
三澤達也 2007「連方屋敷」『山梨考古』第106号 山梨県考古学協会
宮澤公雄 2009「筒形土製品について」『山梨考古学論集』VI 山梨県考古学協会
山下孝司 2007「奈良・平安時代」『山梨市史』 通史編 上巻 山梨市
山梨県教育委員会 1995『山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第106集
山梨市ほか 2010『三ヶ所遺跡 一市道小原東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書』 山梨市文化財調査報告書 第12集
山梨市ほか 2012『三ヶ所遺跡（第3次調査地点） 一市道小原東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書』 山梨市文化財調査報告書 第15集
山梨市教育委員会 1987a「荒神山 発掘調査報告書」
山梨市教育委員会 1987b「日下部 日下部遺跡調査報告書 付 七日子遺跡 江曾原遺跡」
山梨市教育委員会 1995『宮ノ前遺跡』山梨市文化財調査報告書 第3集
山梨市役所 2005『山梨市史』 資料編 考古・古代・中世 山梨市

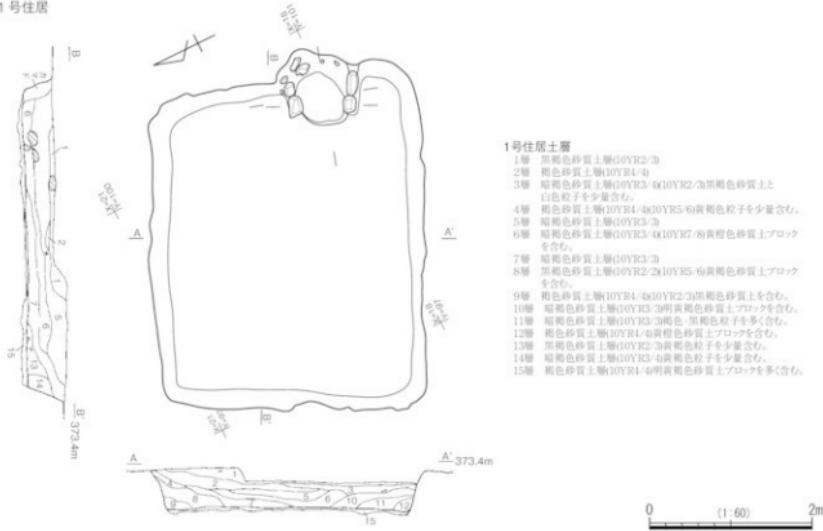
おわりに

日下部遺跡は、山梨県の考古学史に残る著名な遺跡であり、昭和24年に故上野晴朗氏によって調査が開始され、その後の数度の調査によって大きな成果をあげた。今回の調査は、調査開始から63年を経ての再調査となった。上野氏による調査は、戦後間もない頃にあって、さまざまな困難を抱えながら実施されたことは想像に難くなく、そのような遺跡の再調査を担当することができたことには感慨深いものがある。

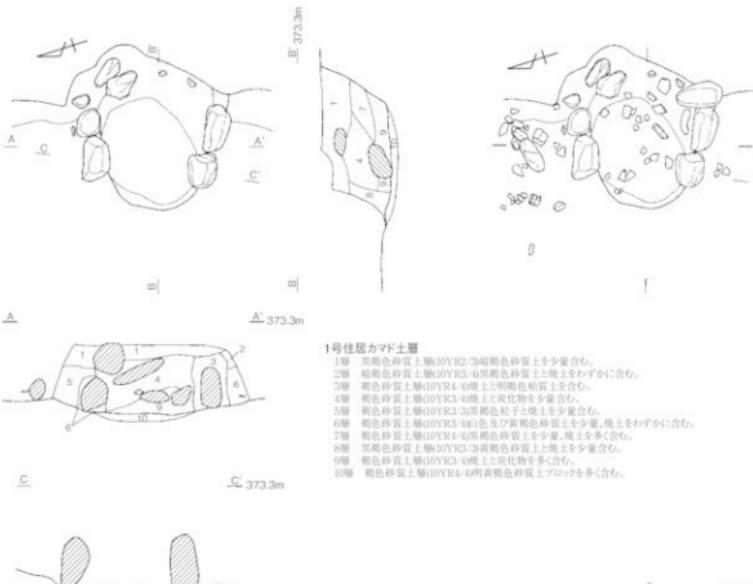
今回の調査では、日下部遺跡がさらに大規模なものであったことを明らかにし、多くの建物跡を検出できることは大きな成果となった。

最後になりましたが、発掘調査、整理作業に御参加、御協力いただきました方々に御礼申し上げます。

1号住居

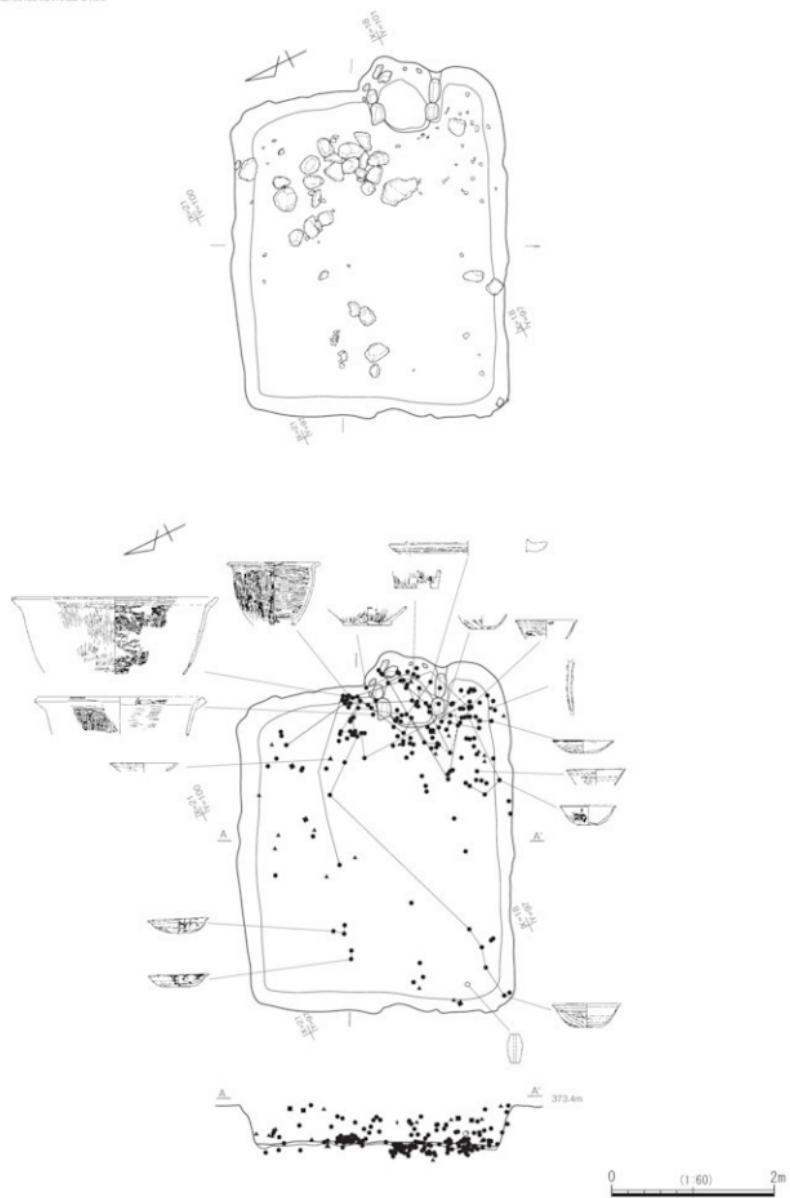


1号住居カマド



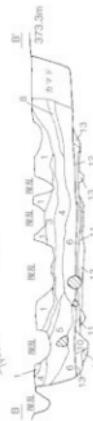
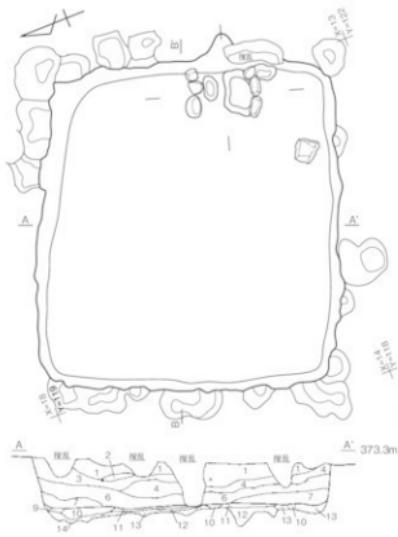
第8図 1号住居(1)

1号住居遺物出土状況



第9図 1号住居(2)

2号住居

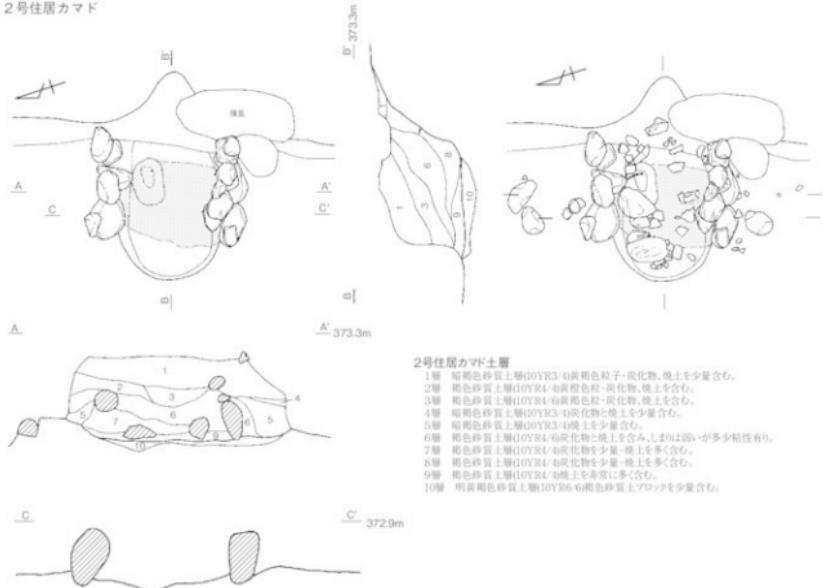


2号住居土層

- 1層 布褐褐色砂質土層(YOYEC3-4)
明黃褐色砂質土層(YOYEC3-3)を含む。
- 2層 黄褐色砂質土層(YOYEC3-3)
- 3層 明黃褐色砂質土層(YOYEC3-2)
に加え黄褐色砂質土層(YOYEC3-1)を含む。
- 4層 明黃褐色砂質土層(YOYEC3-1)
- 5層 明黃褐色砂質土層(YOYEC3-0)
- 6層 黄褐色砂質土層(YOYRA4-4)
明黃褐色砂質土層(YOYRA4-3)を多量含む。
- 7層 黑褐色砂質土層(YOYRA4-3)
- 8層 黄褐色砂質土層(YOYRA4-2)
- 9層 黑褐色砂質土層(YOYRA4-1)
- 10層 黄褐色砂質土層(YOYRA4-0)
- 11層 明黃褐色砂質土層(YOYRC3-4)
地土付近で黒・暗・褐・黄褐色砂質土層ブロックを含む。
- 12層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-3)
- 13層 明黃褐色砂質土層(YOYRC3-2)
- 14層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-1)
- 15層 明黃褐色砂質土層(YOYRC3-0)

0 (1:60) 2m

2号住居カマド



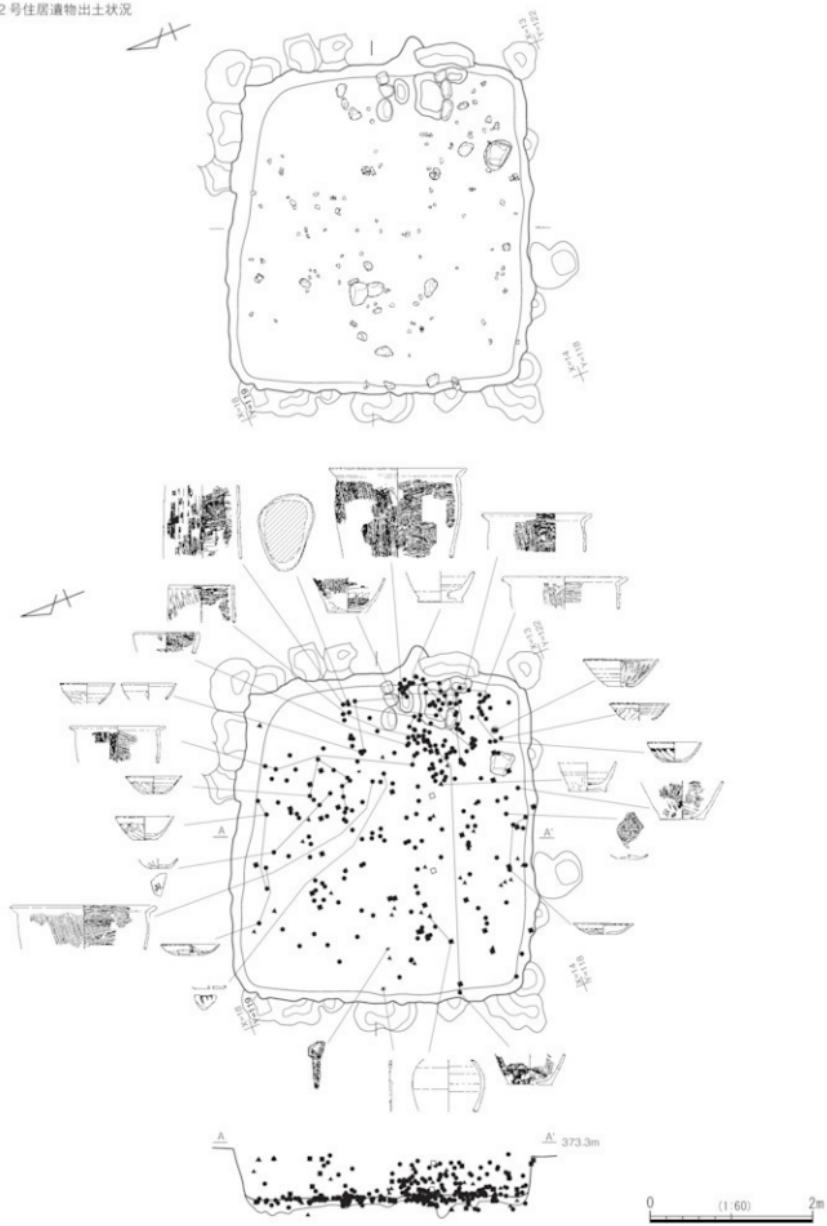
2号住居カマド土層

- 1層 布褐褐色砂質土層(YOYRC3-4)黄褐色粒子・炭化物・焼土を少量含む。
- 2層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-3)布褐褐色粒子・炭化物・焼土を含む。
- 3層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-2)黄褐色粒子・炭化物・焼土を含む。
- 4層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-1)炭化物・焼土を少量含む。
- 5層 布褐褐色砂質土層(YOYRC3-4)焼土を少量含む。
- 6層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-3)炭化物と焼土を含み、しま状は圓いが多少粘性有り。
- 7層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-2)炭化物を少量・焼土を多量含む。
- 8層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-1)炭化物を少量・焼土を含む。
- 9層 黄褐色砂質土層(YOYRC3-0)炭化物を多量・焼土を含む。
- 10層 明黃褐色砂質土層(YOYRC3-0)黄褐色砂質土層ブロックを少量含む。

0 (1:30) 1m

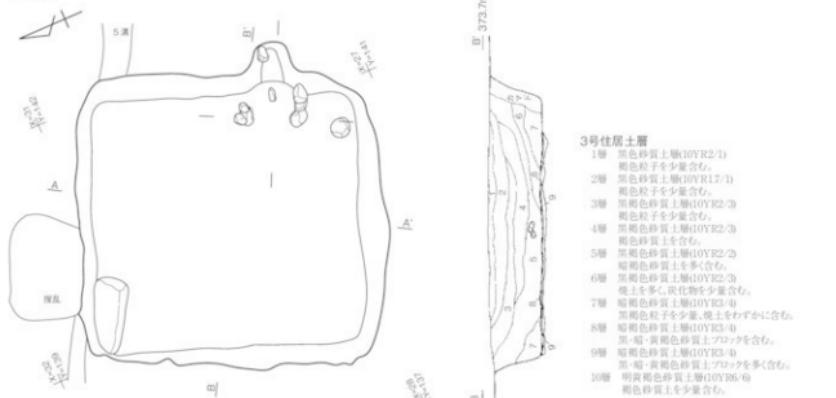
第10図 2号住居(1)

2号住居遺物出土状況



第11図 2号住居(2)

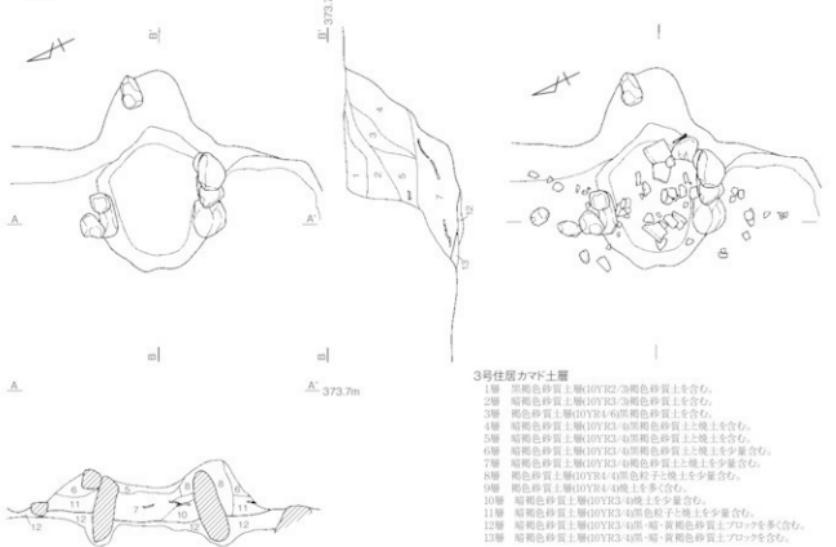
3号住居



3号住居土層

- 1層 黒褐色糞質土層(10YR2/1)
褐色糞子を少量含む。
- 2層 黑褐色糞質土層(10YR17/1)
褐色糞子を少量含む。
- 3層 黑褐色糞質土層(10YR2/3)
褐色糞子を少量含む。
- 4層 黑褐色糞質土層(10YR2/9)
褐色糞質土層含む。
- 5層 黑褐色糞質土層(10YR2/2)
褐色糞質土層含む。
- 6層 黑褐色糞質土層(10YR2/2)
燒土を多め、炭化物を少量含む。
- 7層 黑褐色糞質土層(10YR3/4)
褐色糞子を少量、焼土をわずかに含む。
- 8層 黑褐色糞質土層(10YR3/4)
黑-暗褐色糞質土層ブロックを含む。
- 9層 黑褐色糞質土層(10YR3/4)
黑-暗褐色糞質土層ブロックを多く含む。
- 10層 明褐色糞質土層(10YR6/6)
褐色糞質土層を少量含む。

3号住居カマド



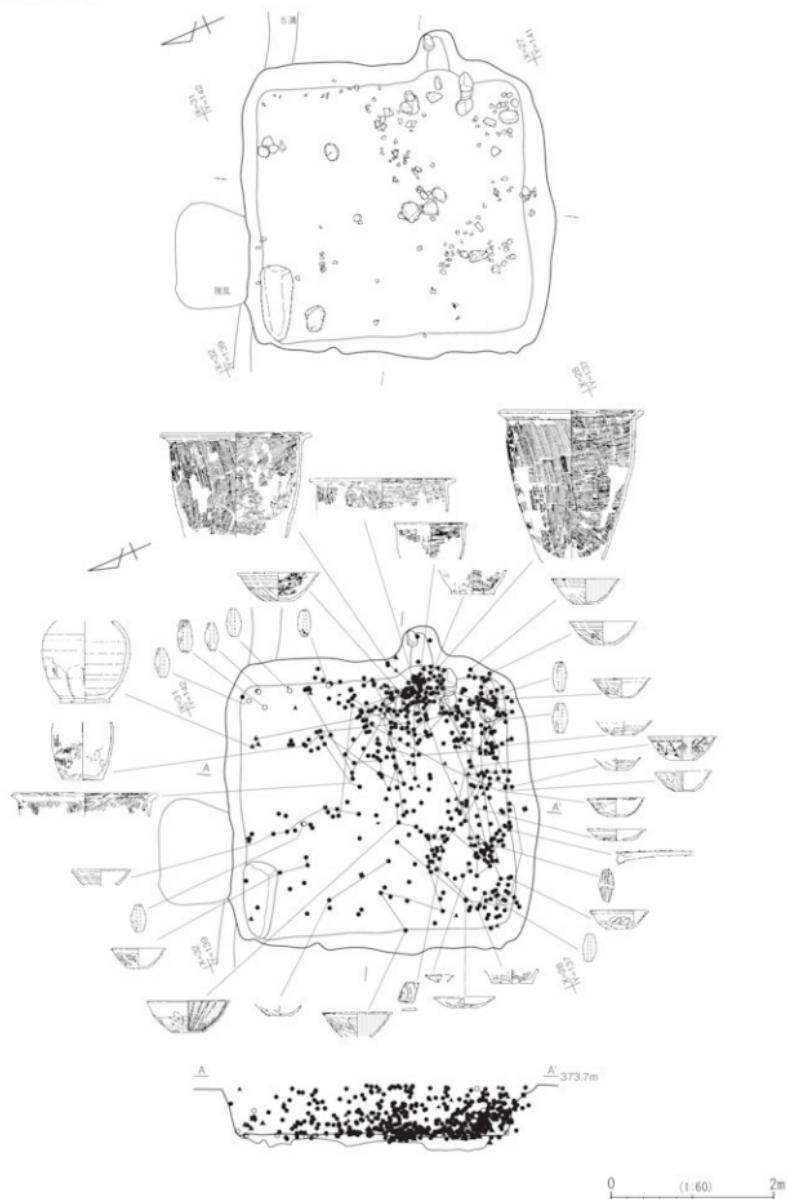
3号住居カマド土層

- 1層 黑褐色糞質土層(10YR2/3)・褐褐色糞質土層を含む。
- 2層 褐褐色糞質土層(10YR3/3)・褐褐色糞質土層を含む。
- 3層 略褐色糞質土層(10YR4/6)・褐褐色糞質土層を含む。
- 4層 褐褐色糞質土層(10YR4/6)・褐褐色糞質土層を含む。
- 5層 褐褐色糞質土層(10YR2/3)・褐褐色糞質土層を含む。
- 6層 褐褐色糞質土層(10YR2/3)・褐褐色糞質土層を含む。
- 7層 褐褐色糞質土層(10YR2/3)・褐褐色糞質土層を含む。
- 8層 略褐色糞質土層(10YR4/4)・褐色糞子・燒土を少量含む。
- 9層 略褐色糞質土層(10YR4/4)・褐色糞子・燒土を多め含む。
- 10層 褐褐色糞質土層(10YR3/4)・褐色糞子を少量含む。
- 11層 褐褐色糞質土層(10YR3/4)・褐色糞子を少量含む。
- 12層 褐褐色糞質土層(10YR3/4)・褐色糞質土層ブロックを多く含む。
- 13層 褐褐色糞質土層(10YR3/4)・褐色糞質土層ブロックを含む。



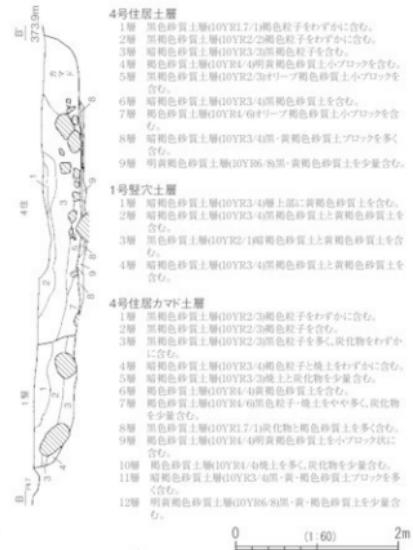
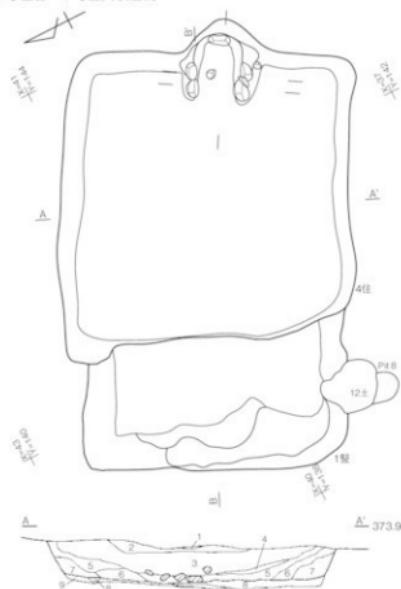
第12図 3号住居(1)

3号住居遺物出土状況

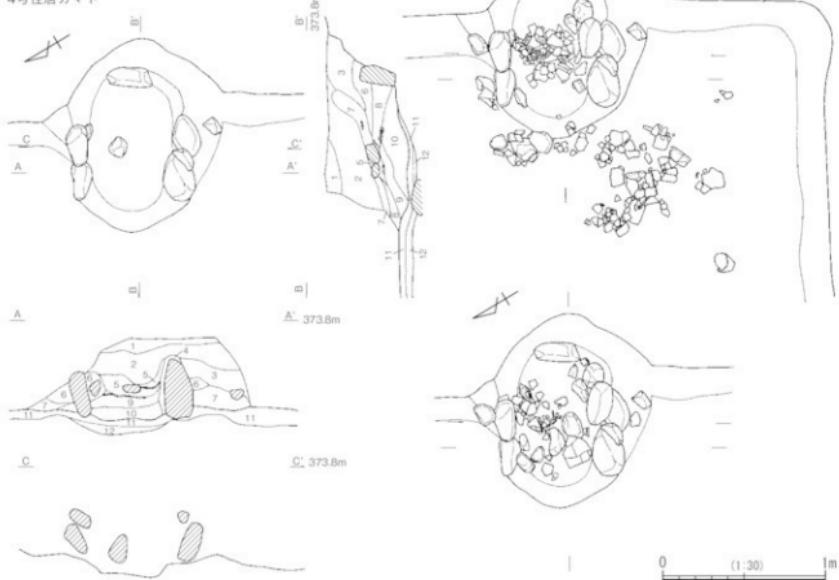


第13図 3号住居(2)

4号住居・1号竪穴状遺構



4号住居カマド



第14図 4号住居・1号竪穴状遺構(1)

4号住居・1号竪穴状遺構 遺物出土状況

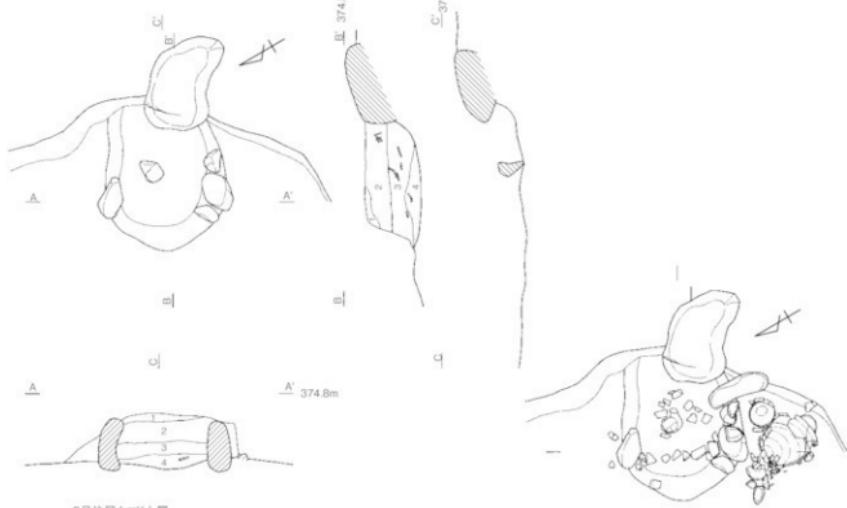


第15図 4号住居・1号竪穴状遺構(2)

5号住居



5号住居カマド

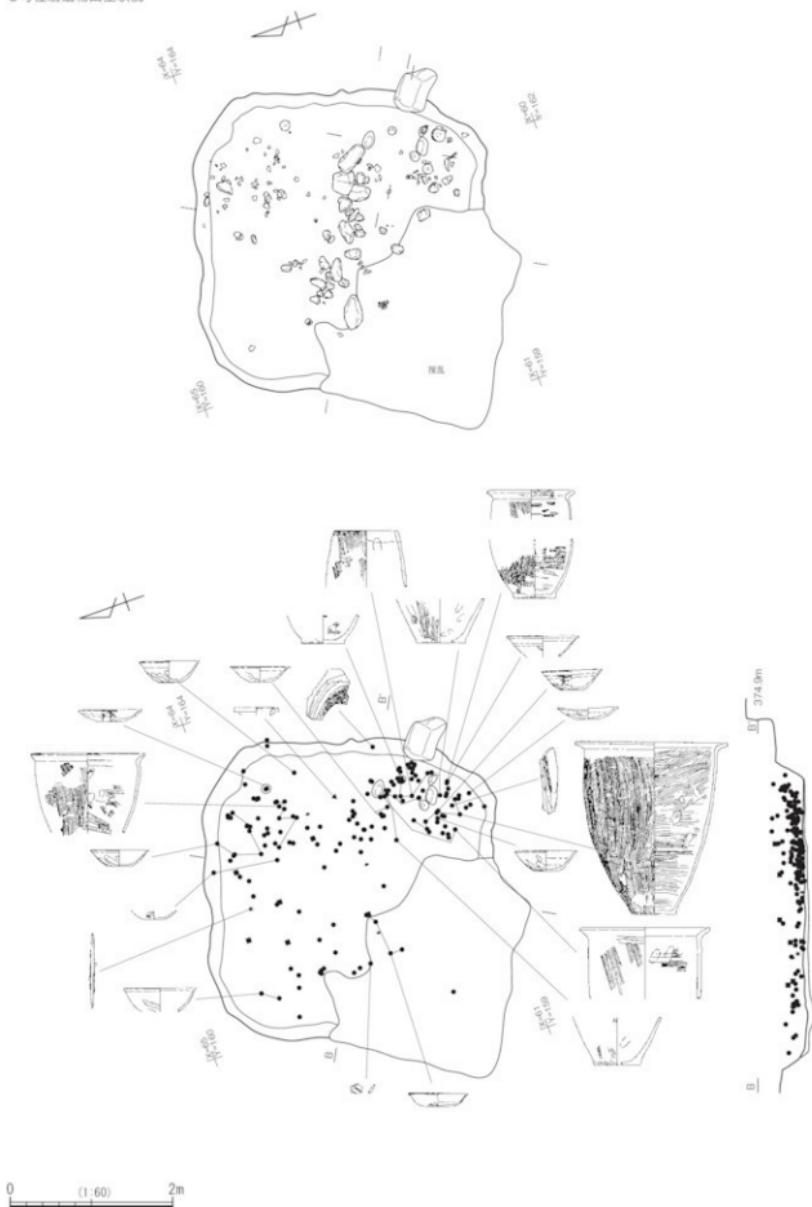


5号住居カマド土層

- 1層 黒褐色砂質土層(HYR2/2)黒色粒子を含む。
- 2層 黄褐色砂質土層(HYR3/2)褐色粒子と焼土をわずかに含む。
- 3層 にぶい黄褐色砂質土層(HYR4/2)分褐色粒子と焼土を少量含む。
- 4層 黄褐色砂質土層(HYR3/4)焼土を多く含む。

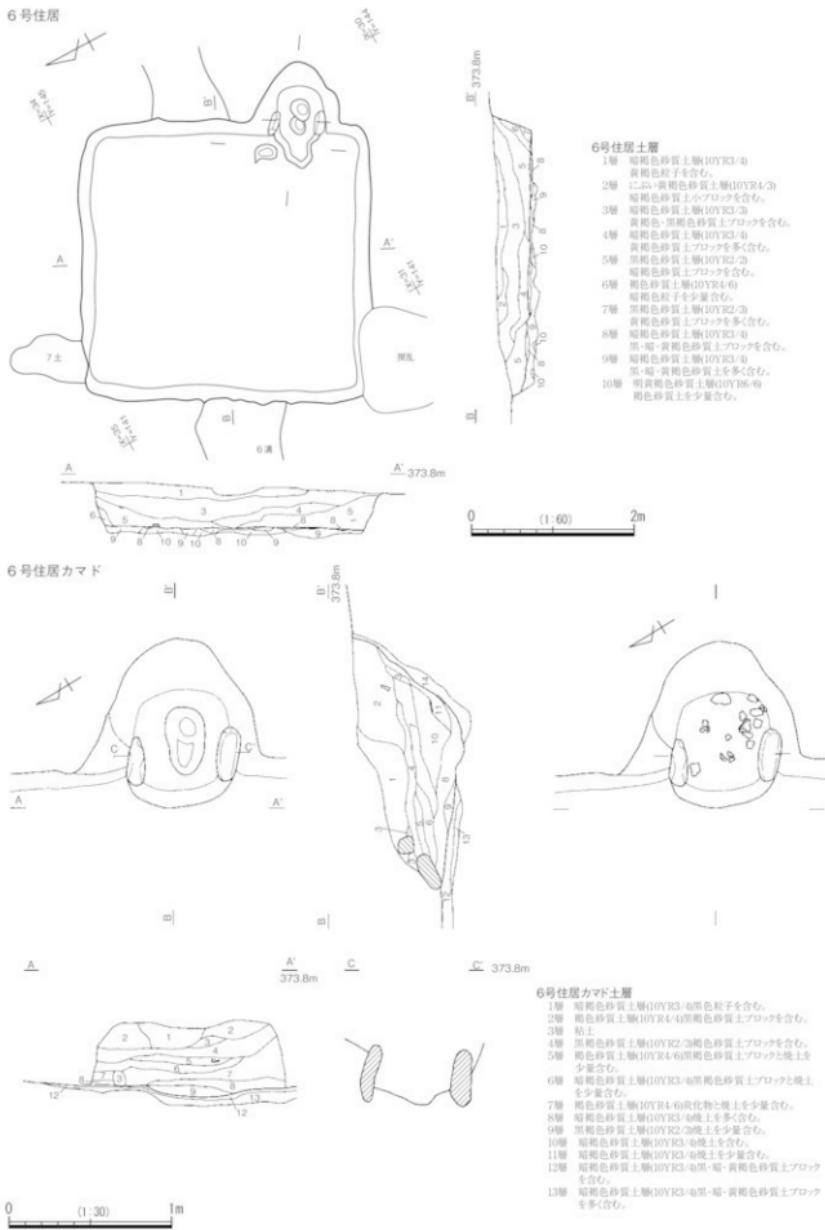
第16図 5号住居(1)

5号住居遺物出土状況



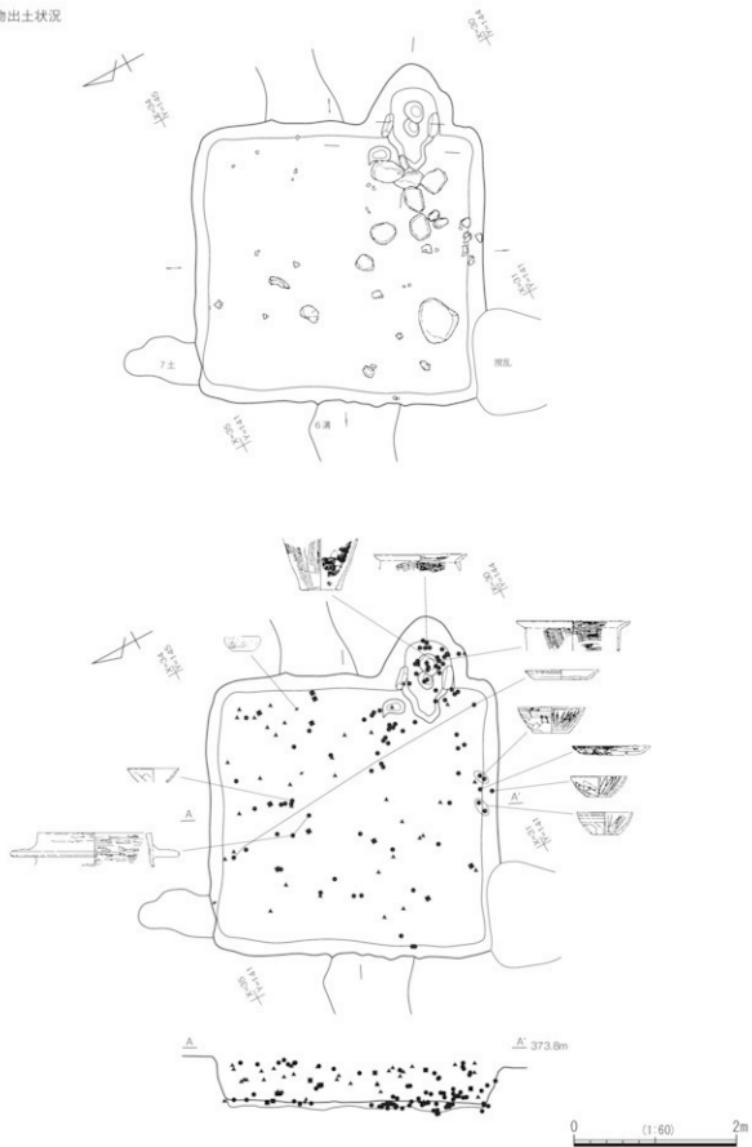
第17図 5号住居(2)

6号住居



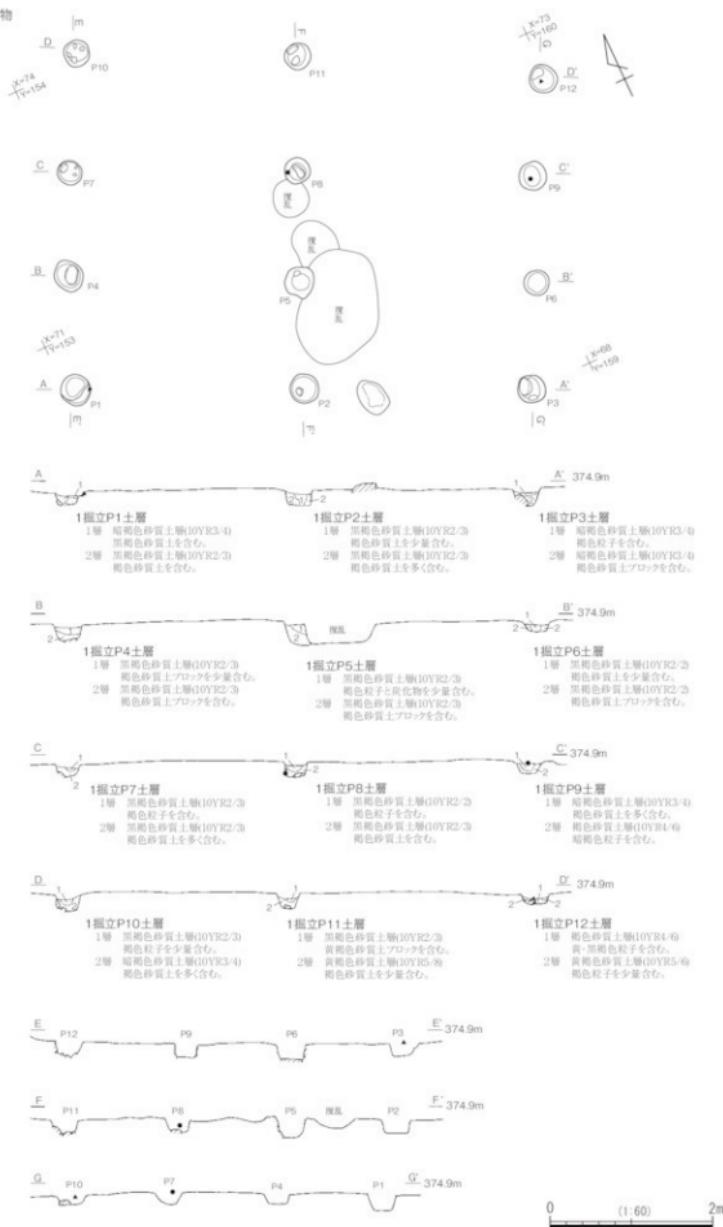
第18図 6号住居(1)

6号住居遺物出土状況



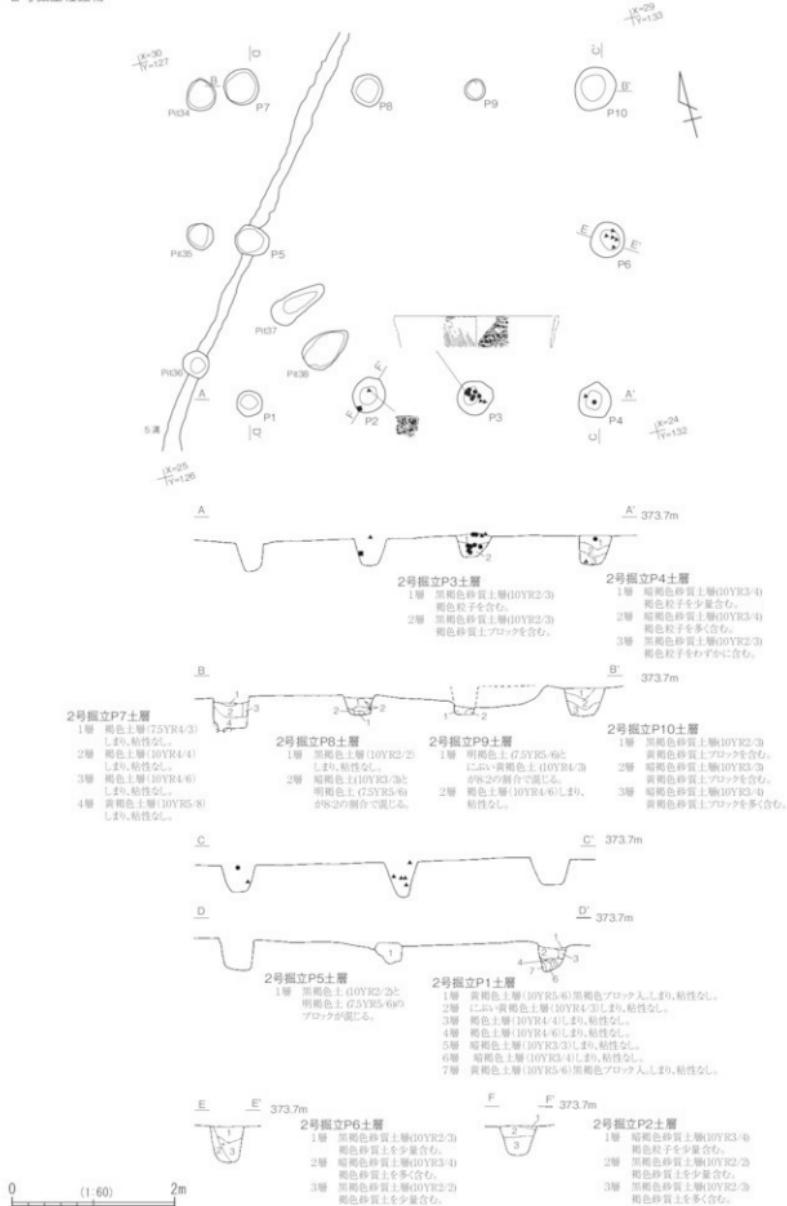
第19図 6号住居(2)

1号掘立柱建物



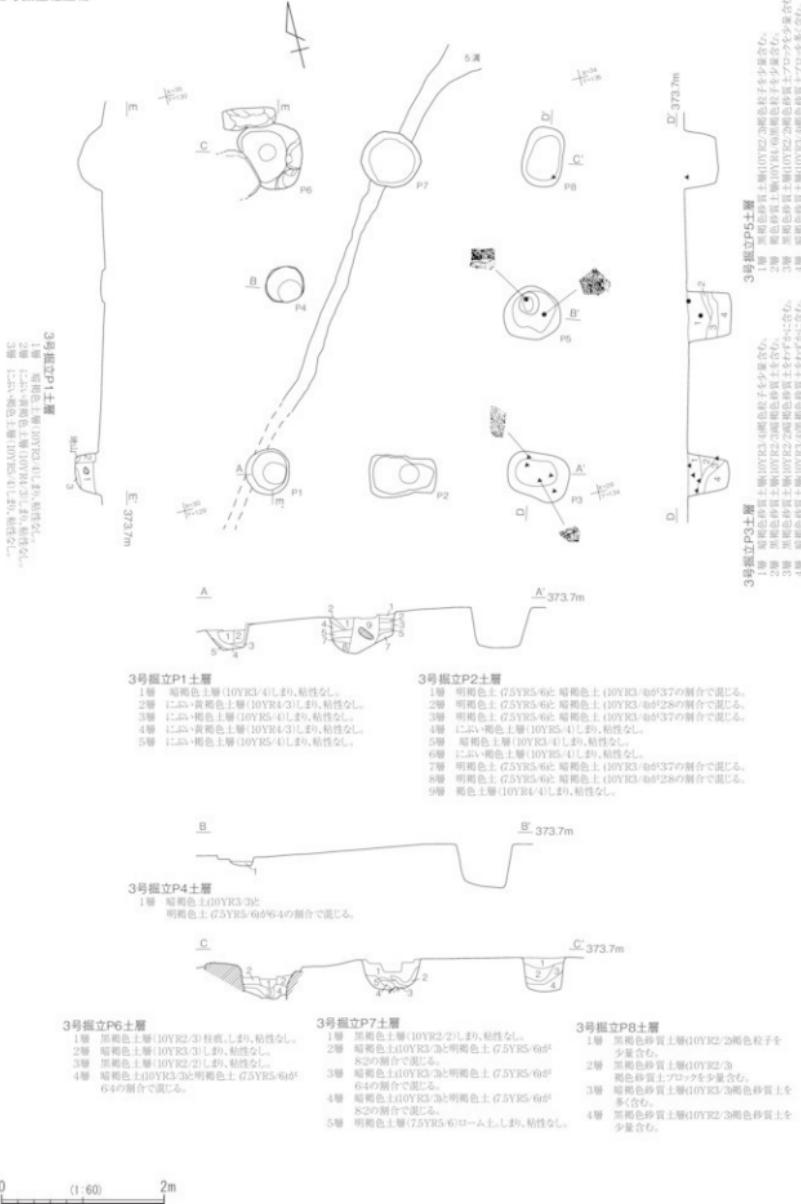
第20図 1号掘立柱建物

2号掘立柱建物

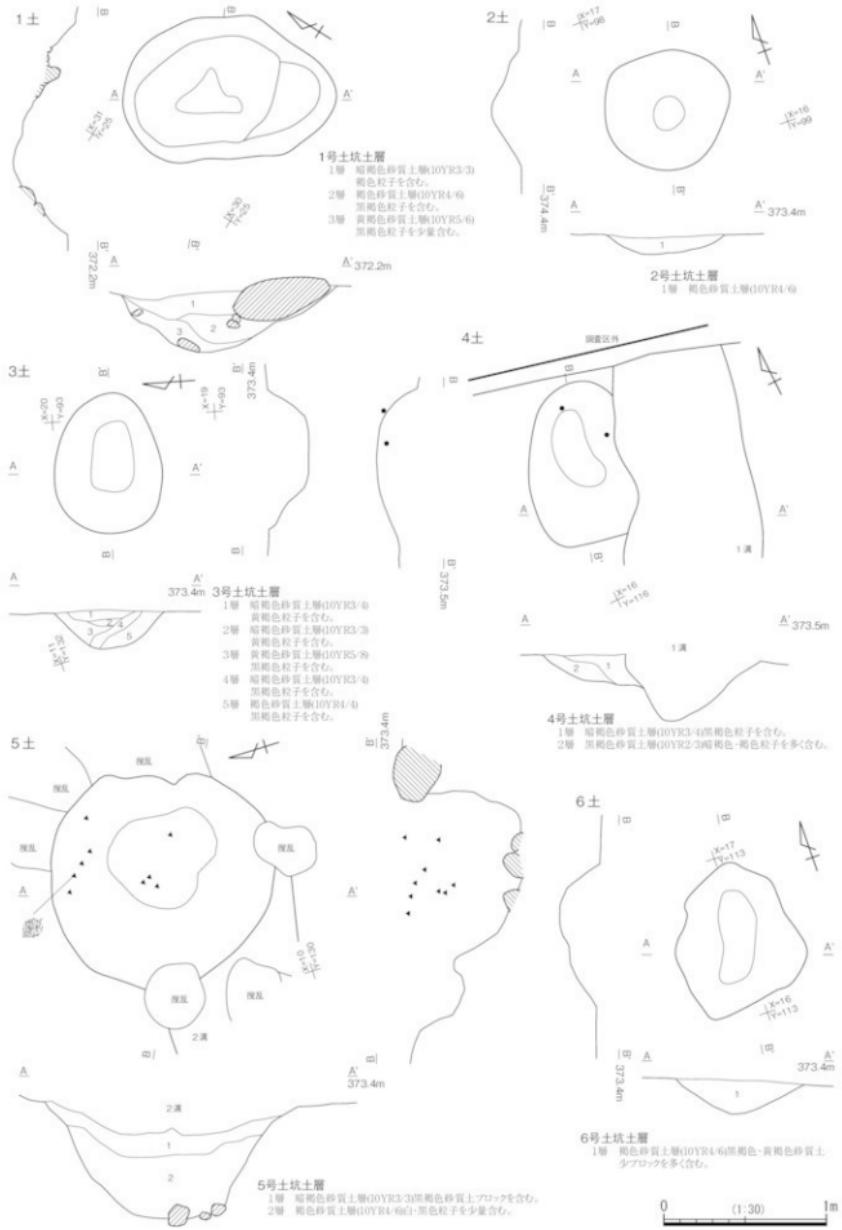


第21図 2号掘立柱建物

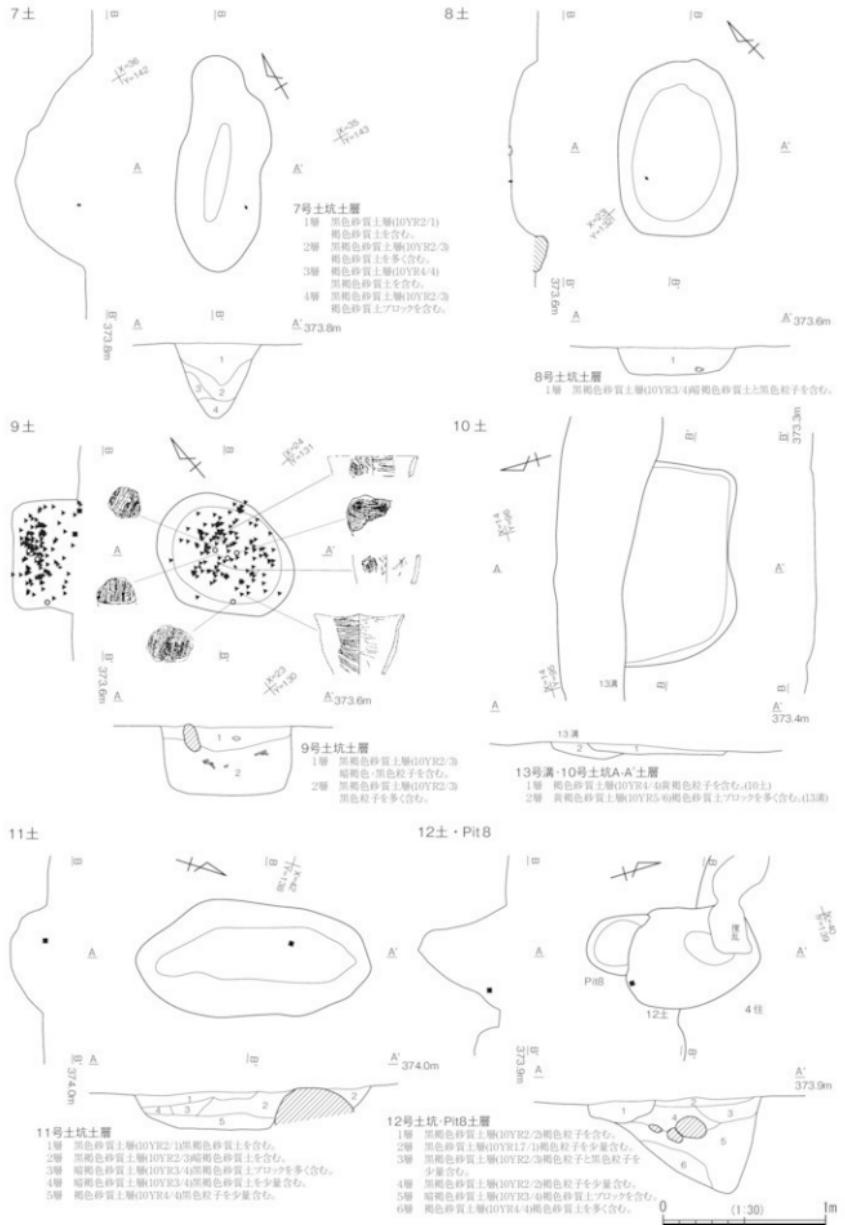
3号掘立柱建物



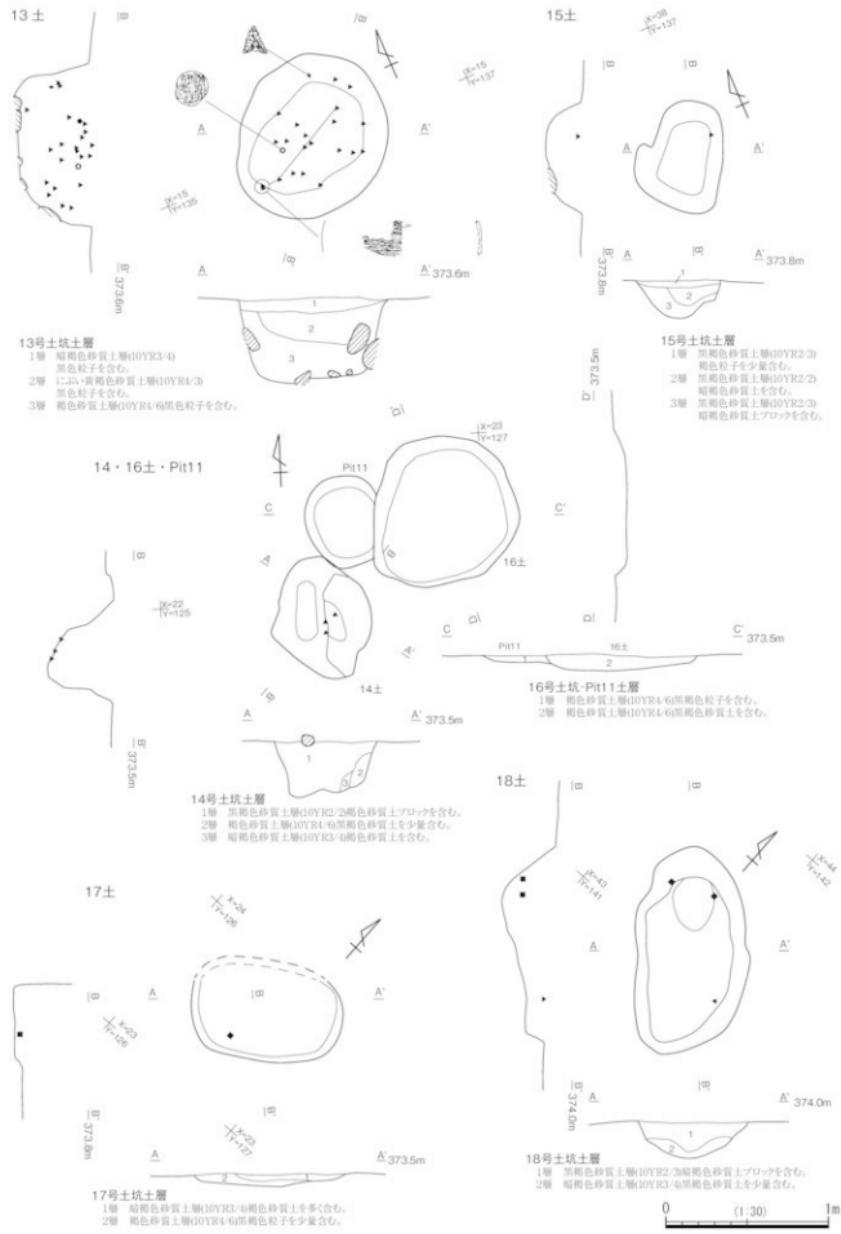
第22図 3号掘立柱建物



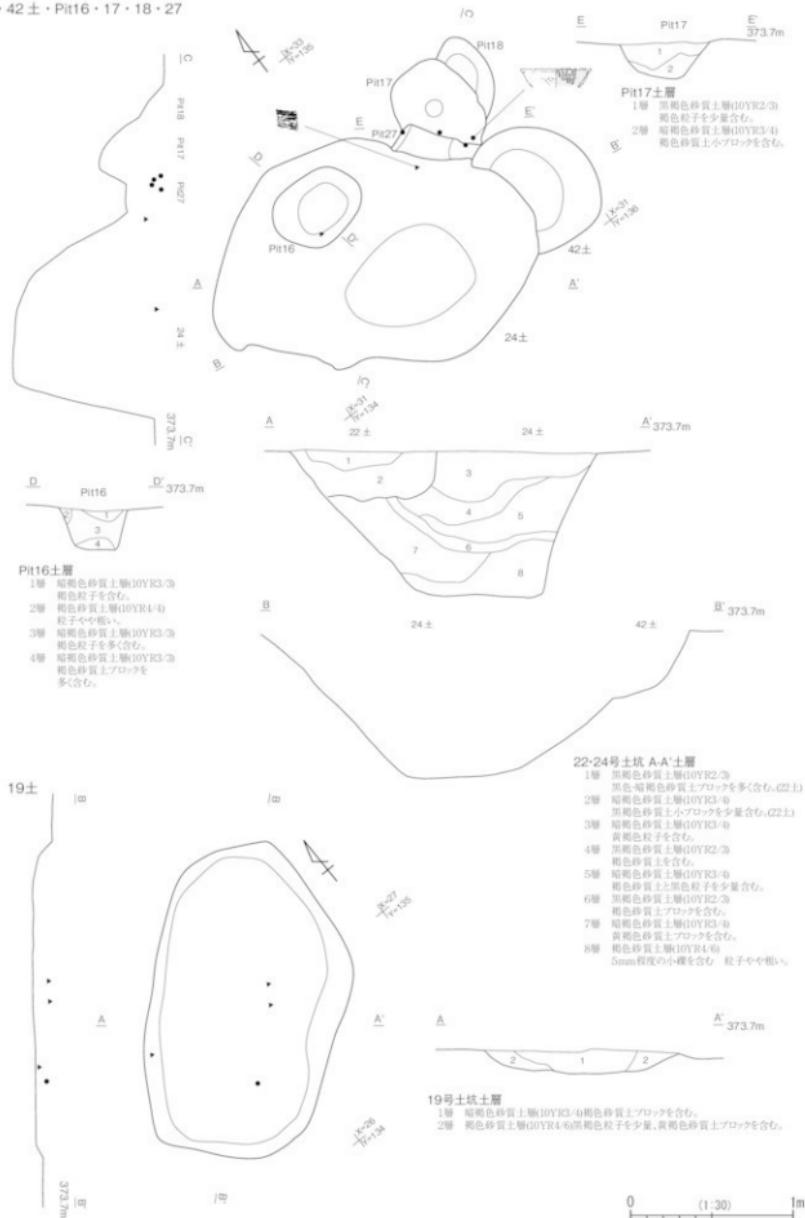
第23図 土坑・ビット(1)



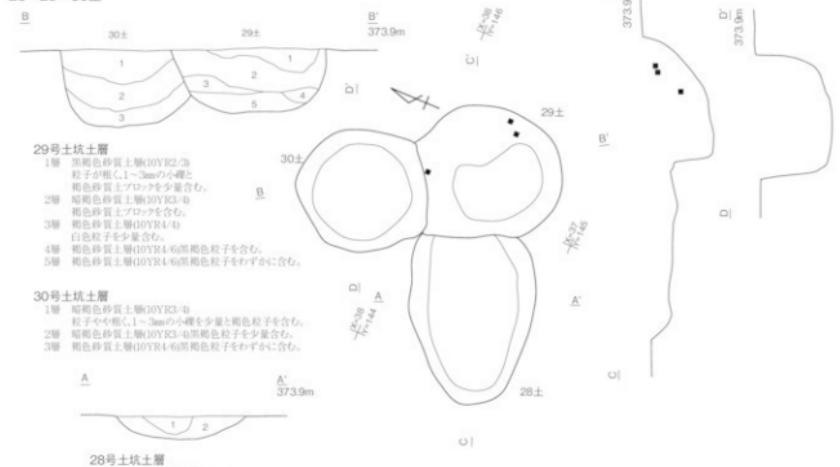
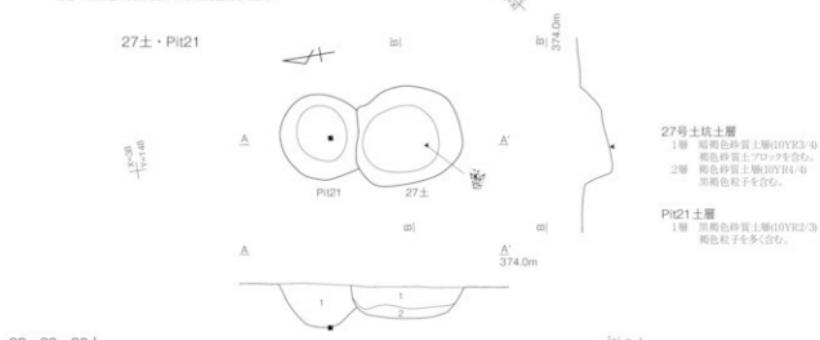
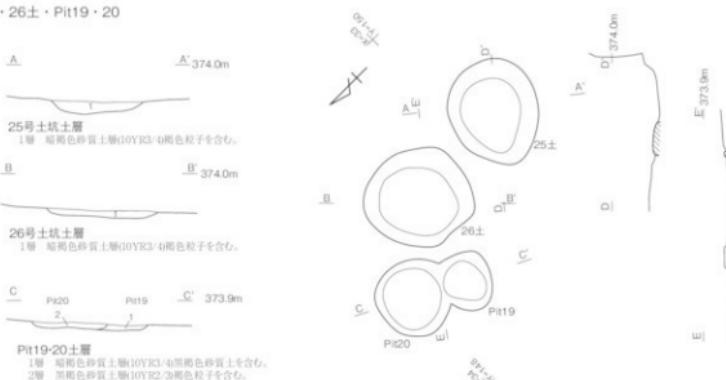
第24図 土坑・ピット(2)



第25図 土坑・ピット(3)

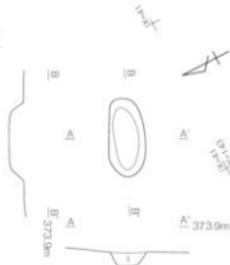


第26図 土坑・ピット(4)



第27図 土坑・ピット(5)

31土



32土



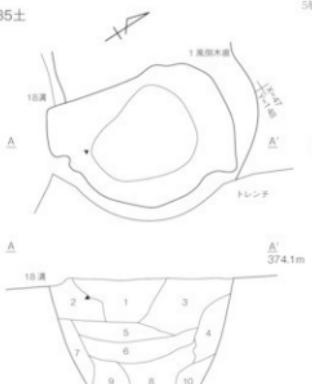
33土



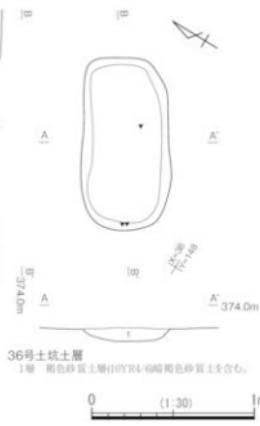
34土



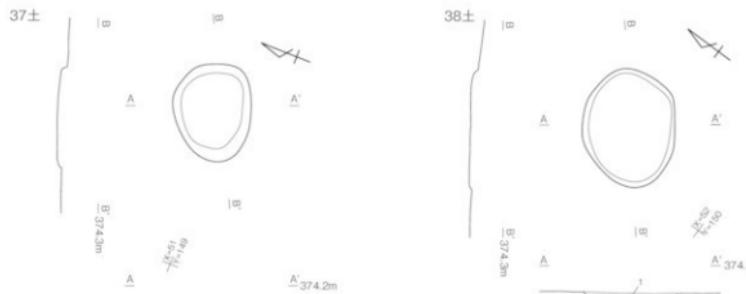
35土



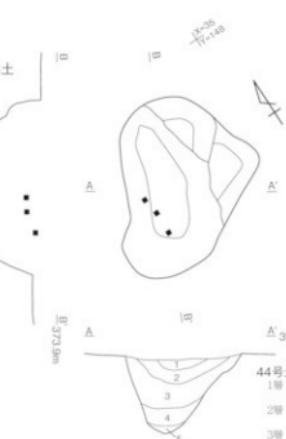
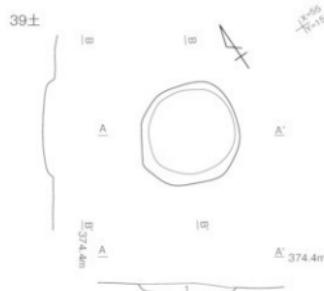
36土



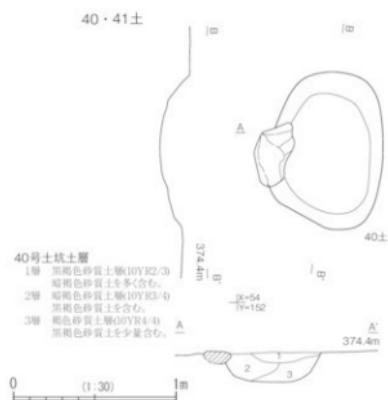
第28図 土坑・ピット(6)



38号土坑土層
1層 單褐色砂質土層(10YR3/6)褐色砂質土を含む。



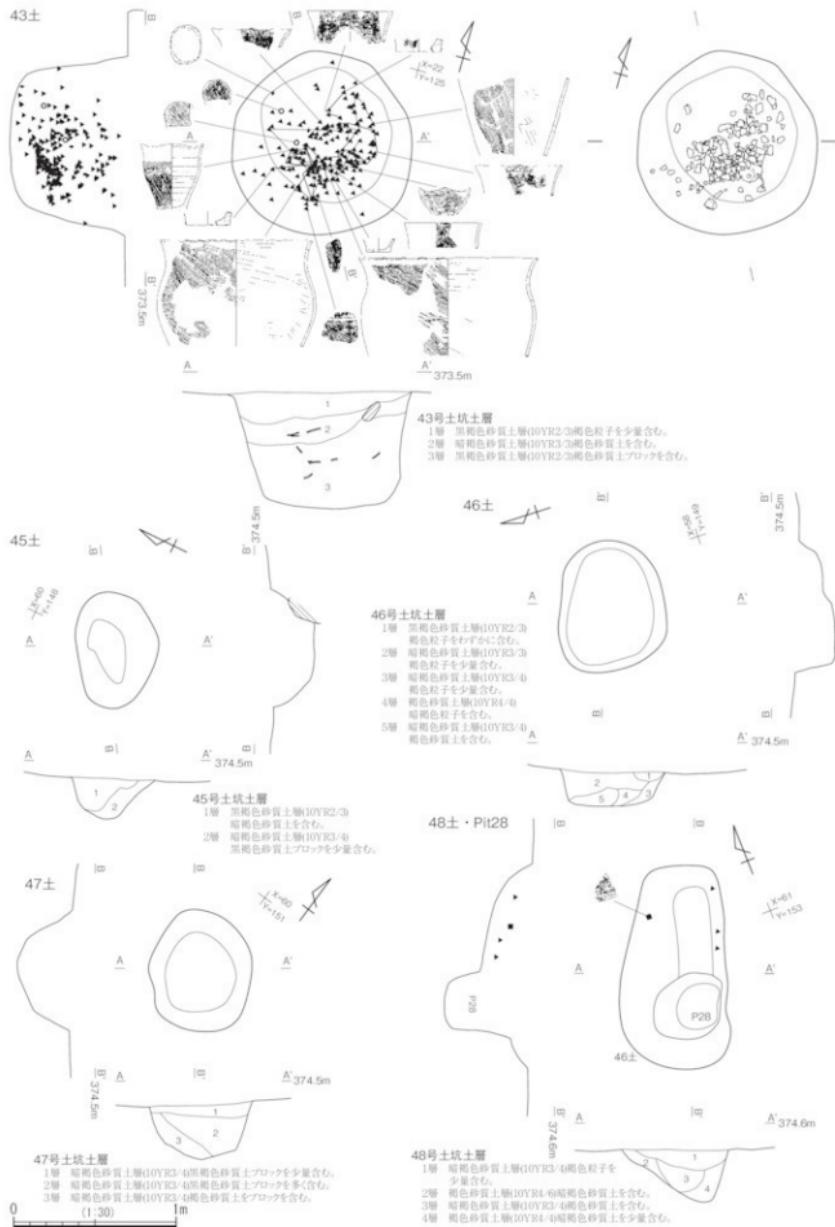
44号土坑土層
1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)
褐色粒子を含む。
2層 黑褐色砂質土層(10YR2/2)
褐色粒子を多量含む。
3層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)
褐色粒子を多量含む。
4層 單褐色砂質土層(10YR4-4)
褐色砂質土ブロックを含む。
5層 黑褐色砂質土層(10YR2/2)
褐色砂質土を少量含む。



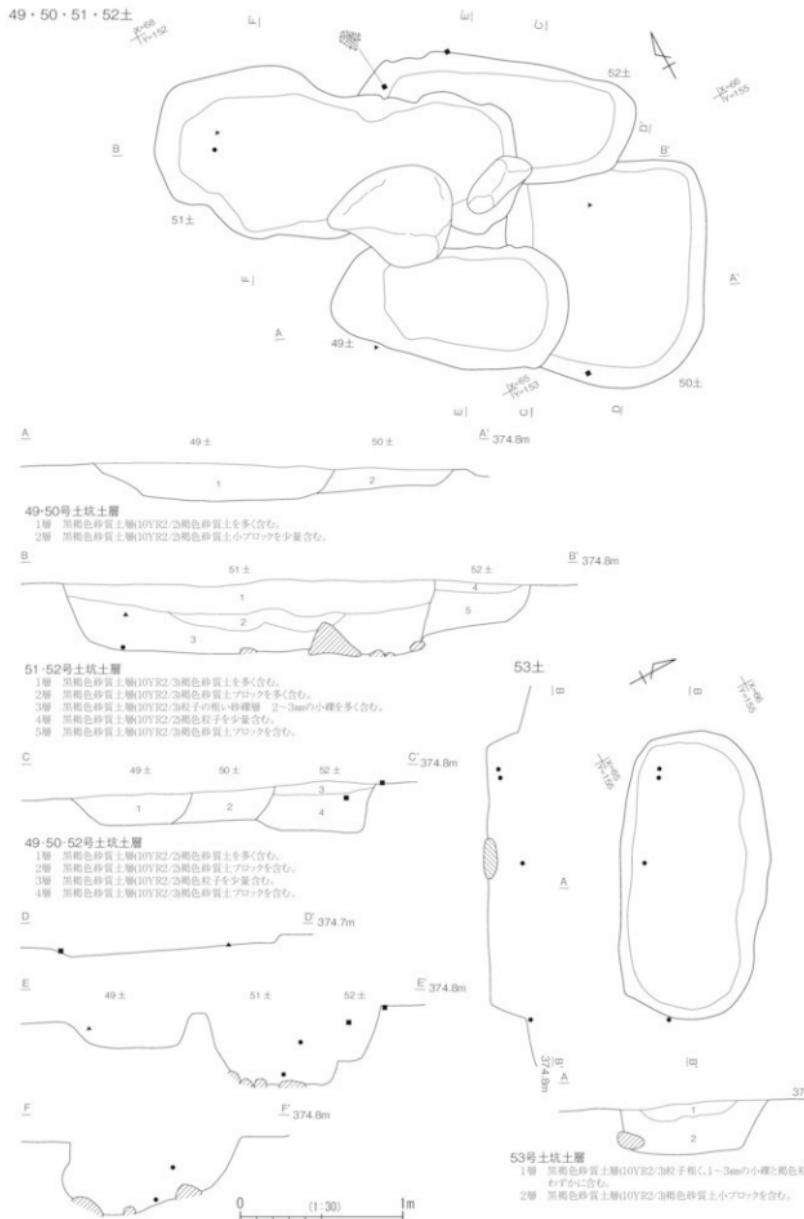
41号土坑土層
1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)
褐色粒子を少量含む。
2層 單褐色砂質土層(10YR3/4)
褐色粒子を少く含む。
3層 單褐色砂質土層(10YR3/4)
褐色粒子を少量含む。
4層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)
褐色砂質土ブロックを含む。

0 (1:30) 1m

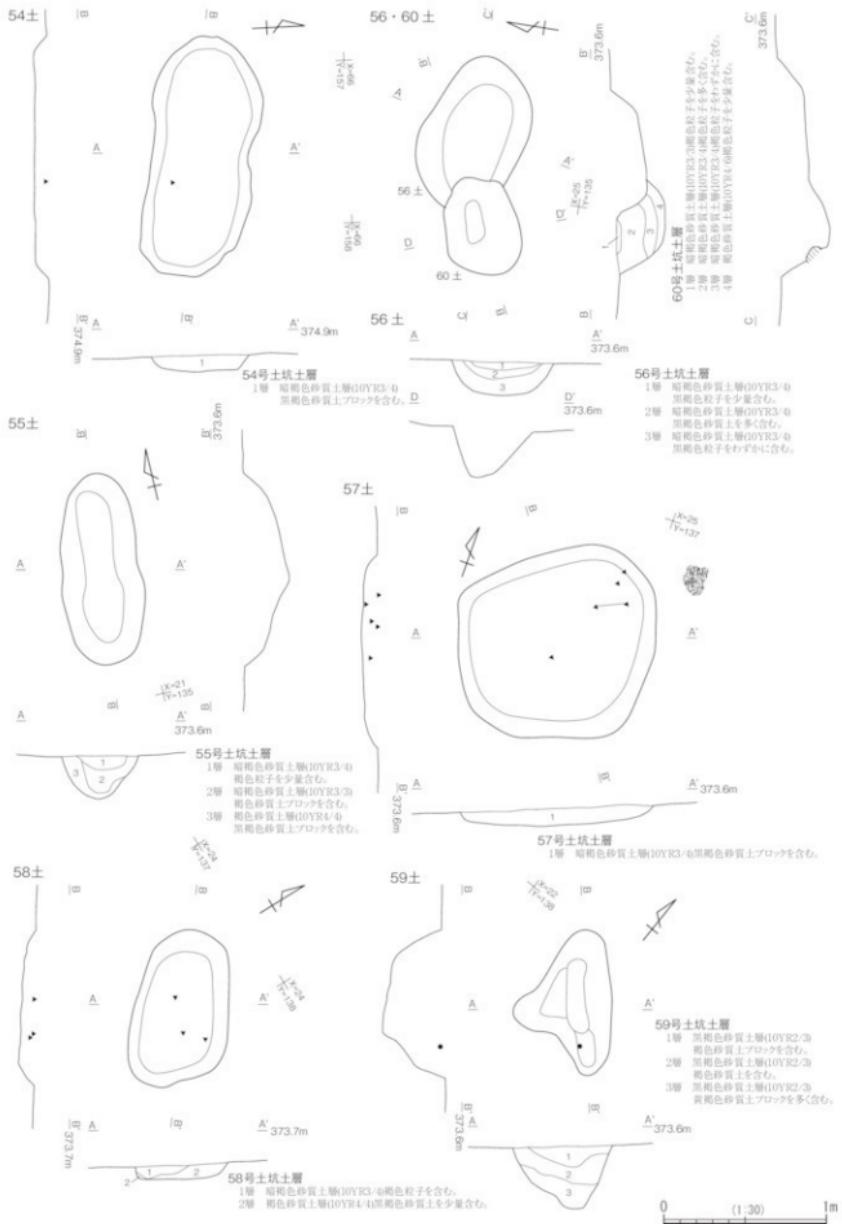
第29図 土坑・ピット(7)



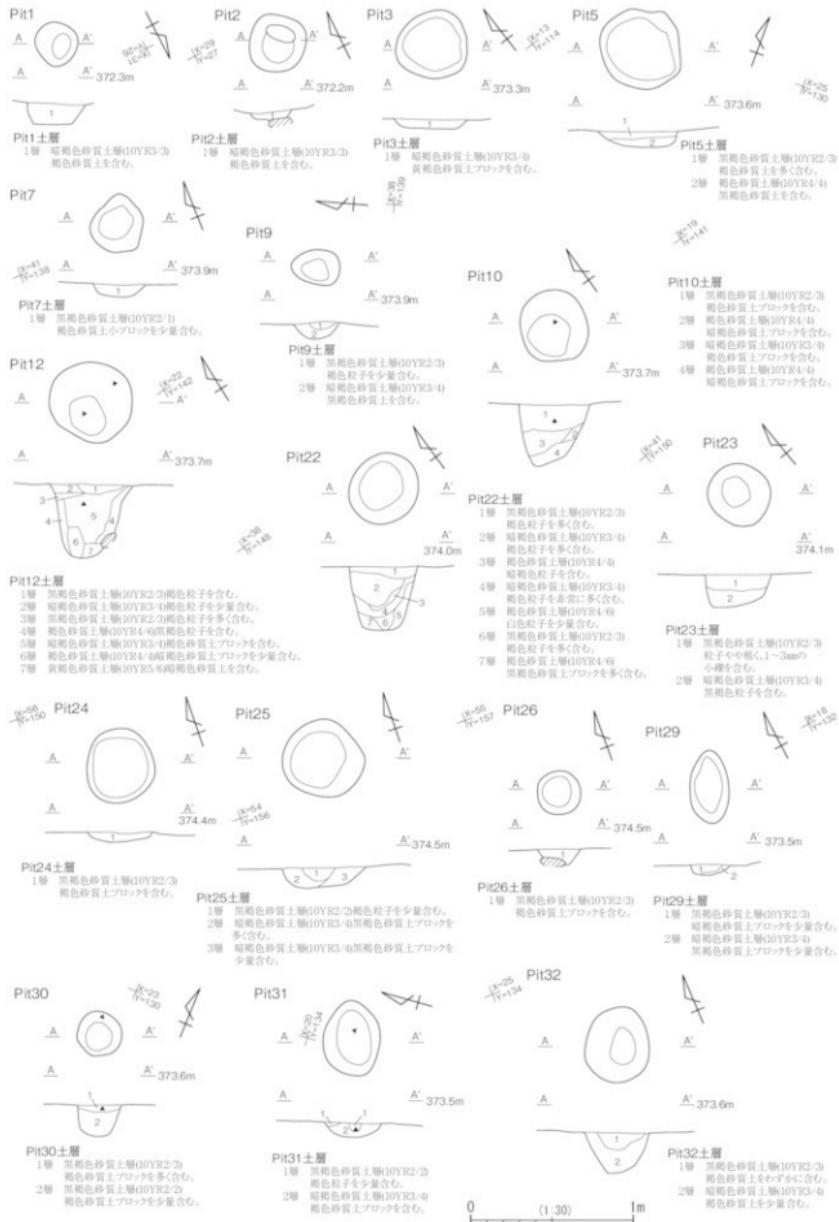
第30図 土坑・ピット(8)



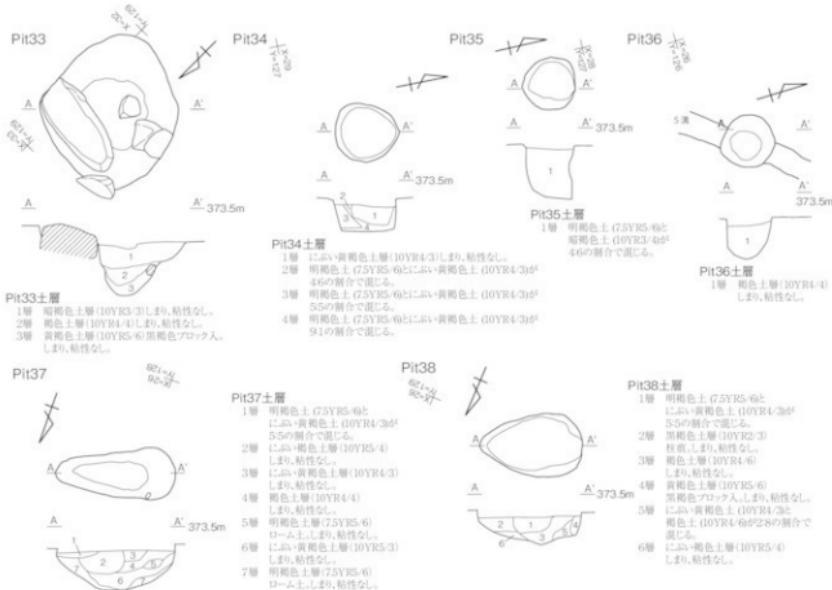
第31図 土坑・ピット(9)



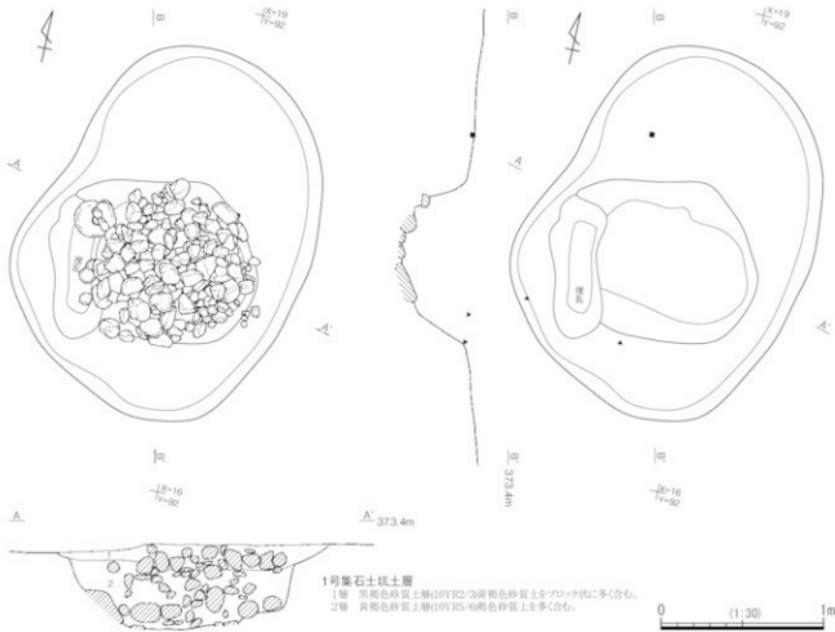
第32図 土坑・ビット(10)



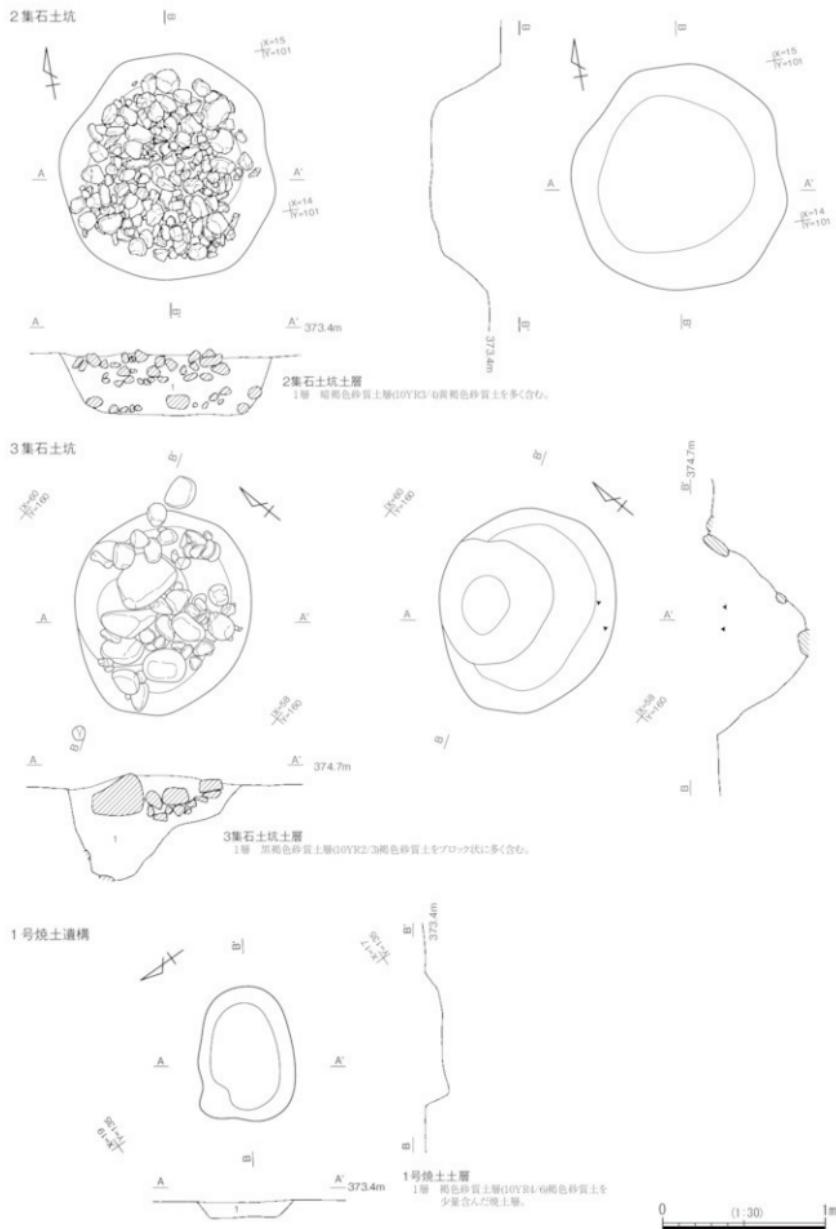
第33図 土坑・ピット(11)



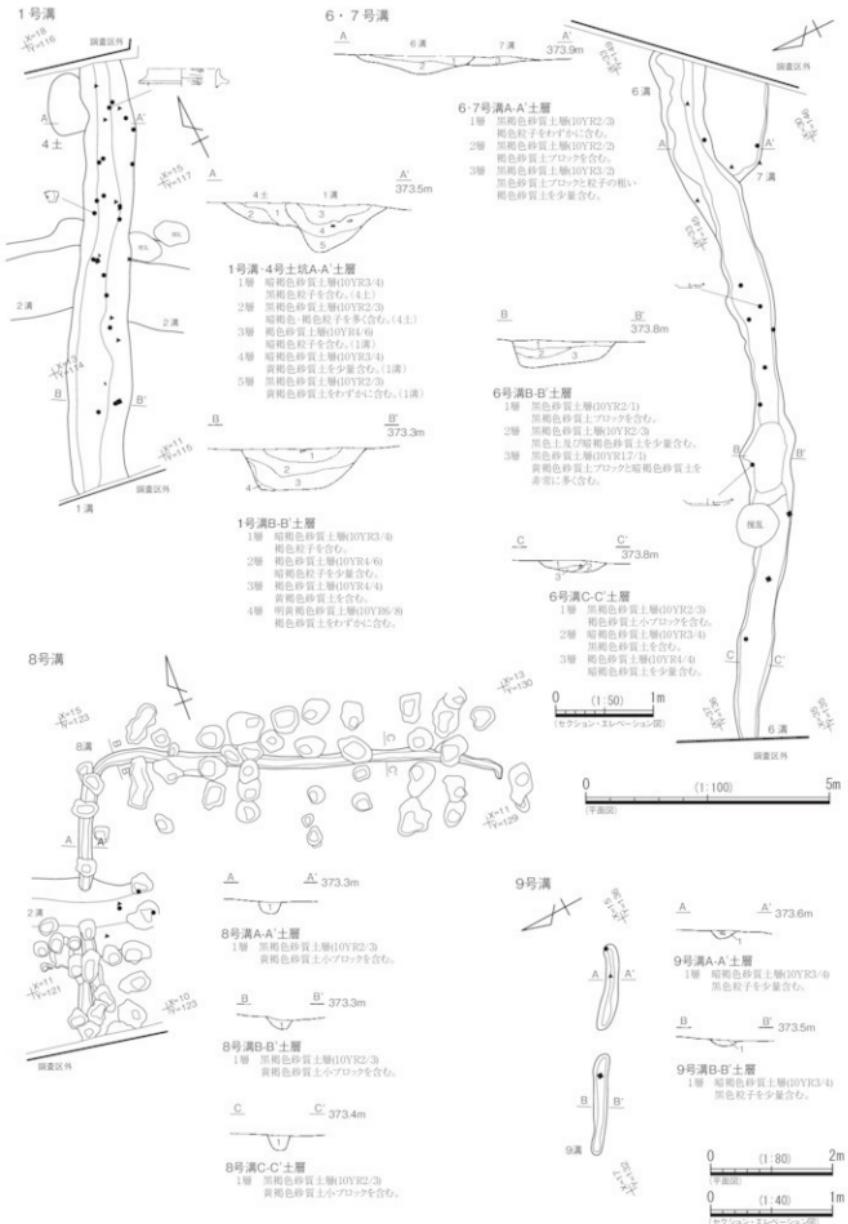
1号集石土坑



第34図 土坑・ピット(12)、1号集石土坑

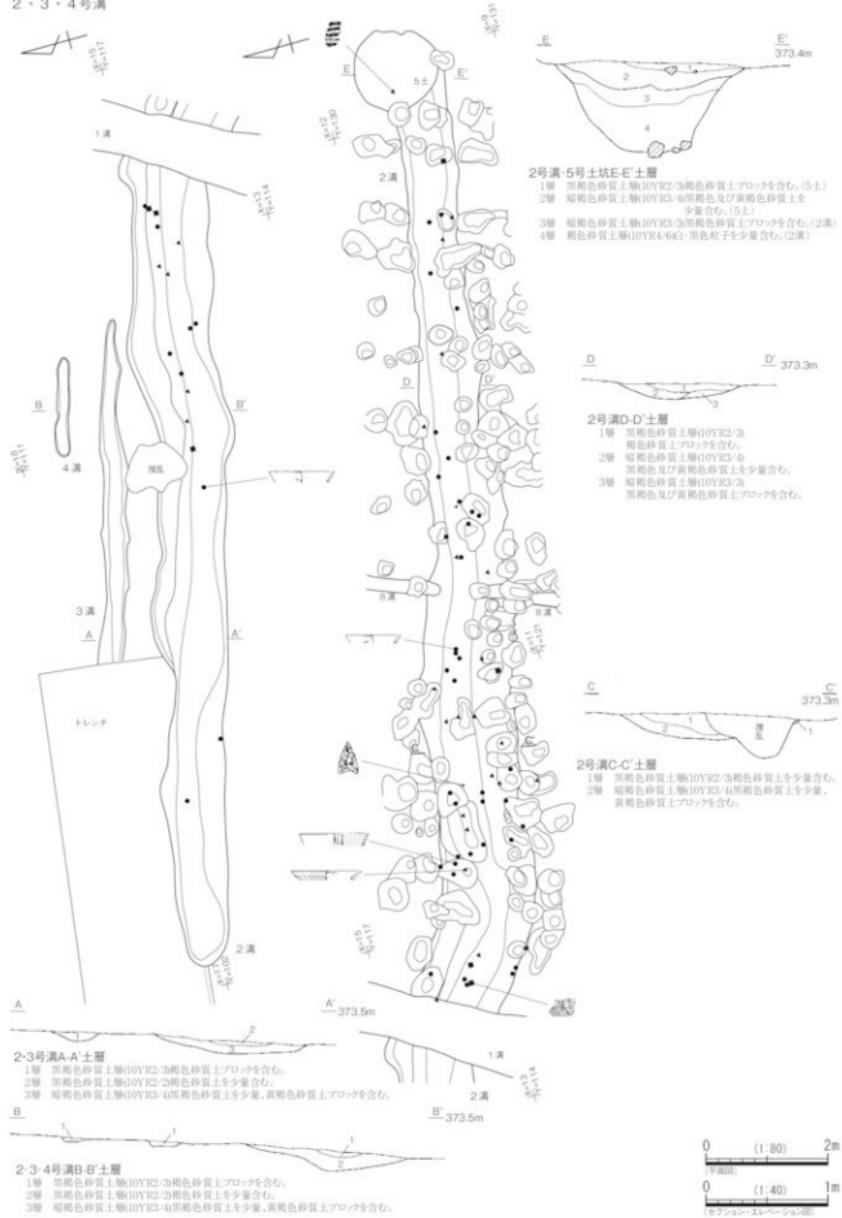


第35図 2・3号集石土坑、1号焼土遺構



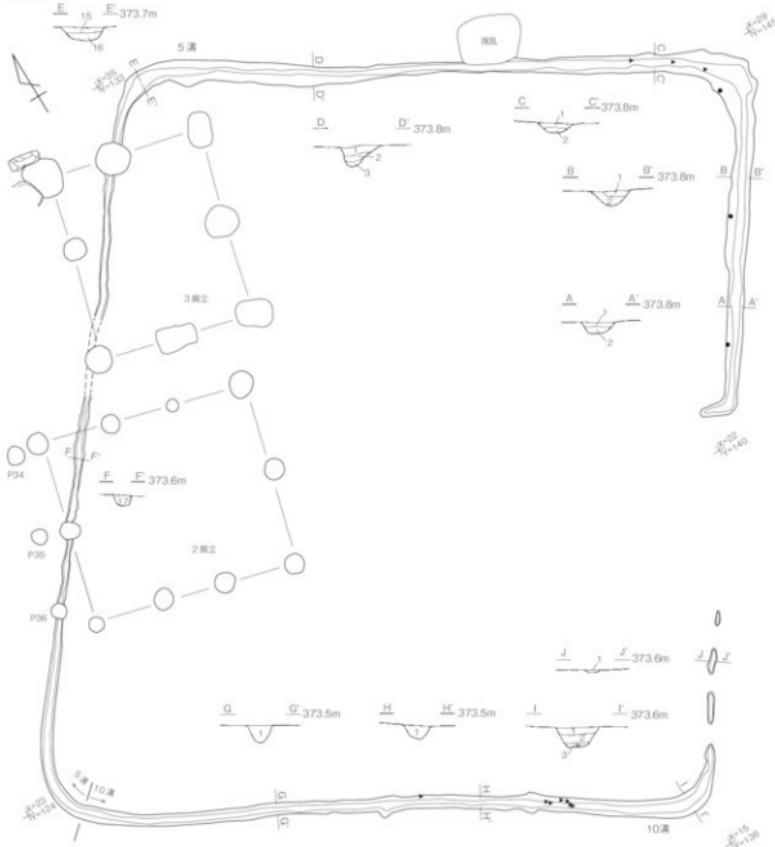
第36図 溝(1)

2・3・4号溝



第37図 溝(2)

5・10号溝



5号溝A-E'土層

- 1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)黃褐色粒子を含む。
- 2層 細褐色砂質土層(10YR3/6)黃褐色粒子を含む。

5号溝B-B'土層

- 1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)黃褐色粒子を含む。
- 2層 細褐色砂質土層(10YR3/6)黃褐色粒子を含む。

5号溝C-C'土層

- 1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)黃褐色粒子を含む。
- 2層 細褐色砂質土層(10YR3/6)黃褐色粒子を含む。

5号溝D-D'土層

- 1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)黃褐色粒子を含む。
- 2層 細褐色砂質土層(10YR3/6)黃褐色粒子を含む。
- 3層 黑褐色砂質土層(10YR4/4)黑色粒子を含む。

5号溝E-E'土層

- 1層 灰褐色砂質土層(10YR4/2)L塑性。
- 2層 灰褐色土(10YR4/1)L塑性。

5号溝F-F'土層

- 1層 灰褐色土(75YR4/2)L塑性。

10号溝G-G'土層

- 1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)褐色砂質土ブロックを少量含む。

10号溝H-H'土層

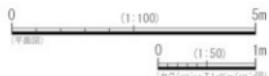
- 1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)褐色砂質土ブロックを少量含む。

10号溝I-I'土層

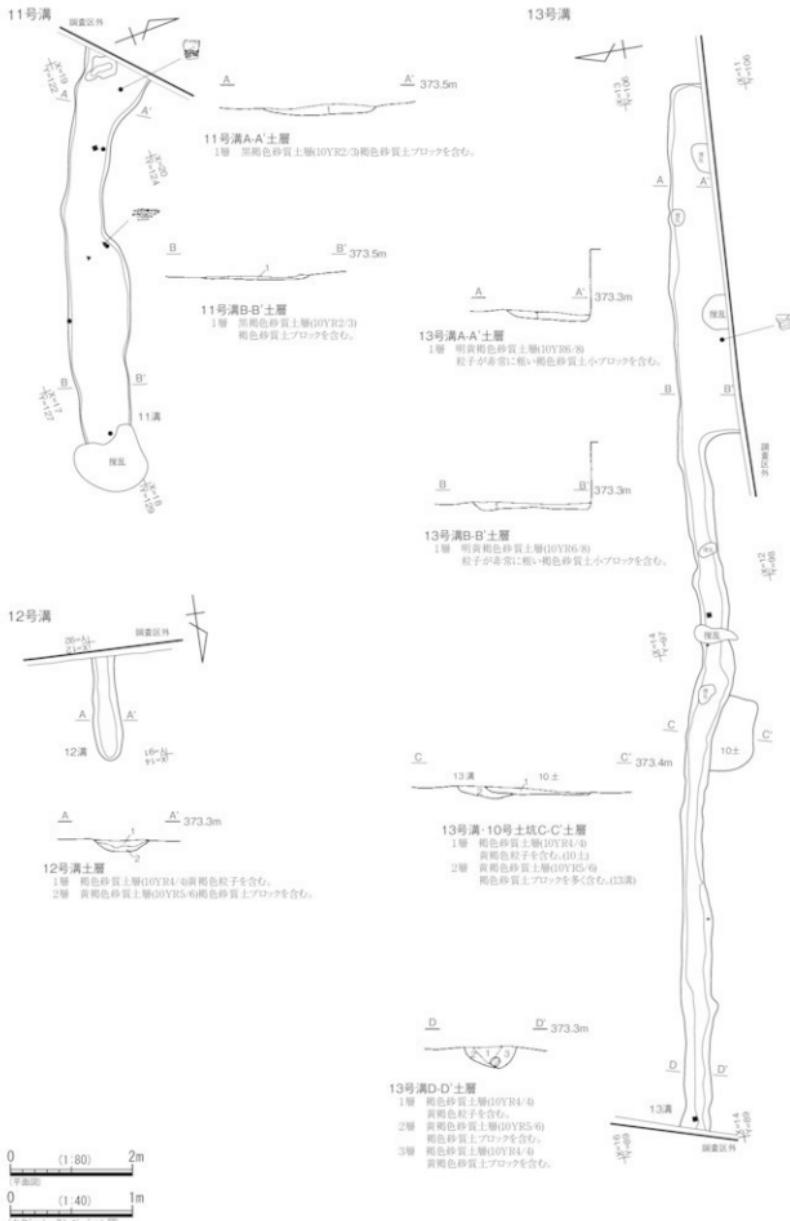
- 1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)褐色粒子を少量含む。
- 2層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)褐色砂質土ブロックを少量含む。
- 3層 黑褐色砂質土層(10YR3/6)褐色砂質土ブロックを少量含む。

10号溝J-J'土層

- 1層 黑褐色砂質土層(10YR2/3)褐色砂質土ブロックを少量含む。

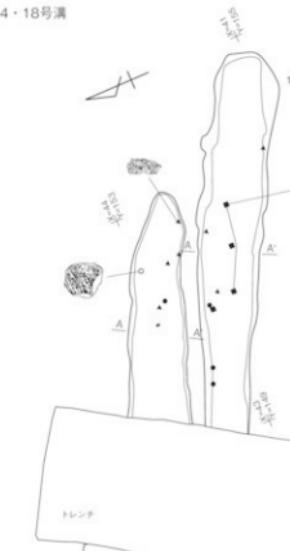


第38図 溝(3)

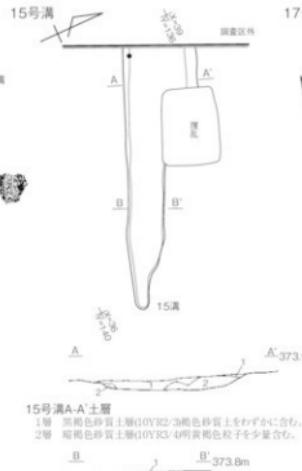


第39図 溝(4)

14・18号溝



15号溝



17号溝



17号溝A-A'土層
1層 布褐色砂質土層
(10YR3-3)
褐色砂質土含む。

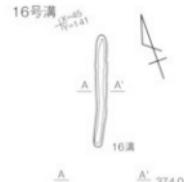
17号溝B-B'土層
1層 布褐色砂質土層
(10YR3-3)
褐色砂質土含む。

17号溝C-C'土層
1層 布褐色砂質土層
(10YR3-3)
褐色砂質土含む。



15号溝A-A'土層
1層 黒褐色砂質土層(10YR2-4)褐色砂質土をわずかに含む。
2層 布褐色砂質土層(10YR3-4)明黄色褐色粒子を少量含む。

15号溝B-B'土層
1層 黒褐色砂質土層(10YR2-4)褐色砂質土をわずかに含む。
2層 布褐色砂質土層(10YR3-4)明黄色褐色粒子を少量含む。



16号溝土層
1層 布褐色砂質土層(10YR3-4)褐色粒子を含む。

19号溝

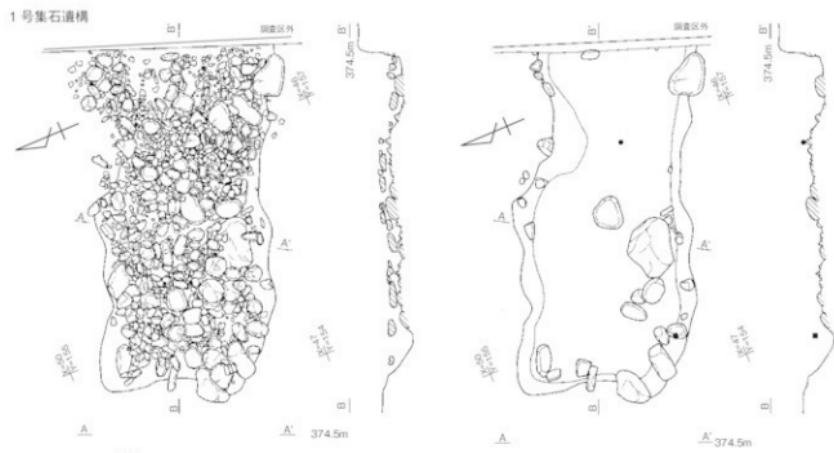


19号溝A-A'土層
1層 布褐色砂質土層(10YR3-4)
褐色砂質土を多く含む。

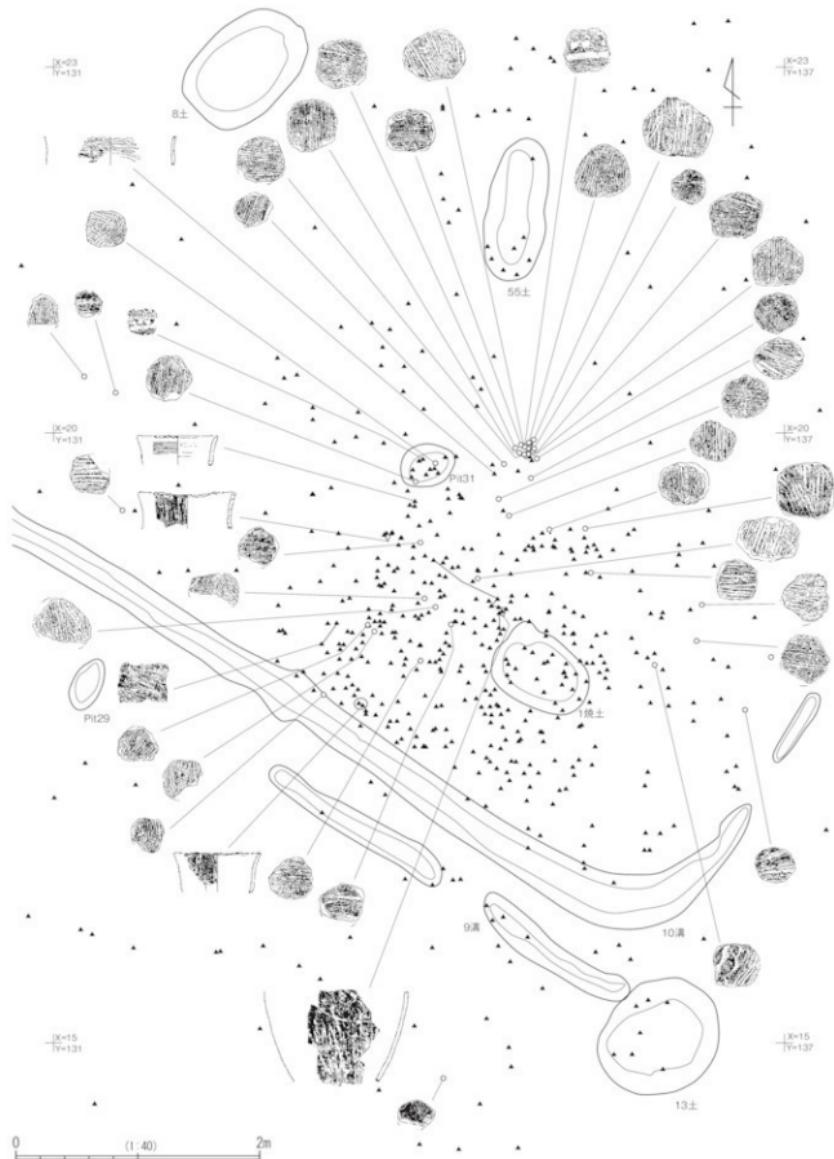
19号溝B-B'土層
1層 布褐色砂質土層(10YR3-4)
褐色砂質土を含む。

0 (1:80) 2m
0 (1:40) 1m
1/2尺/10cm/1cm/5mm/2mm

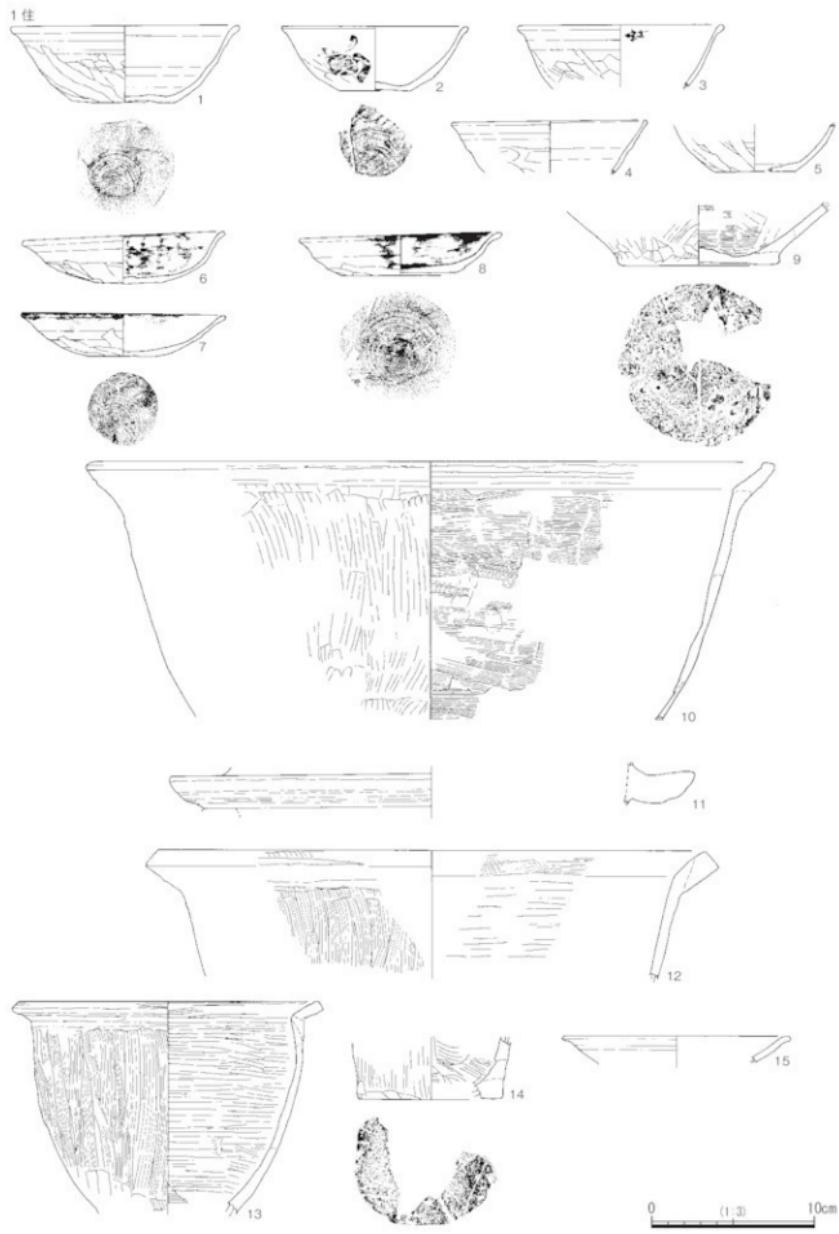
第40図 溝(5)



第41図 1号集石遺構、1号風倒木痕



第42図 弥生土器集中区

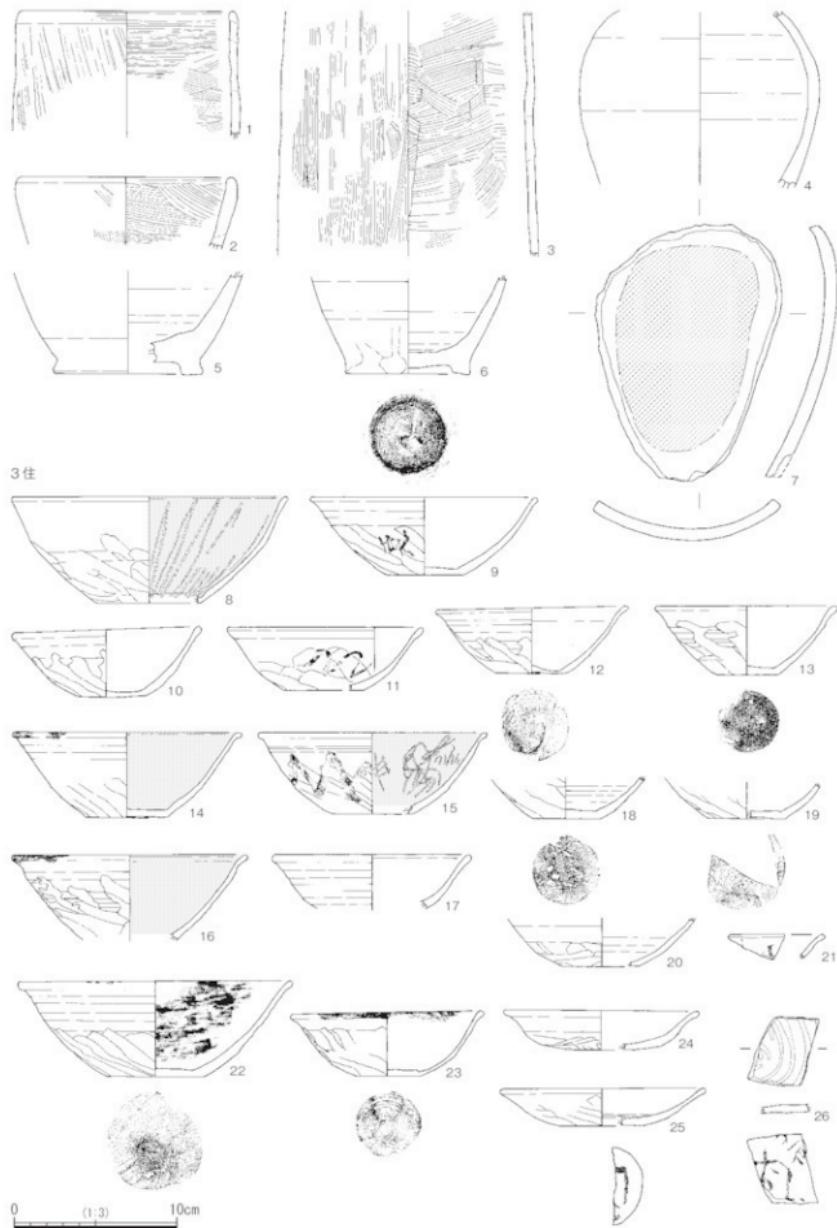


第43図 出土遺物(1)

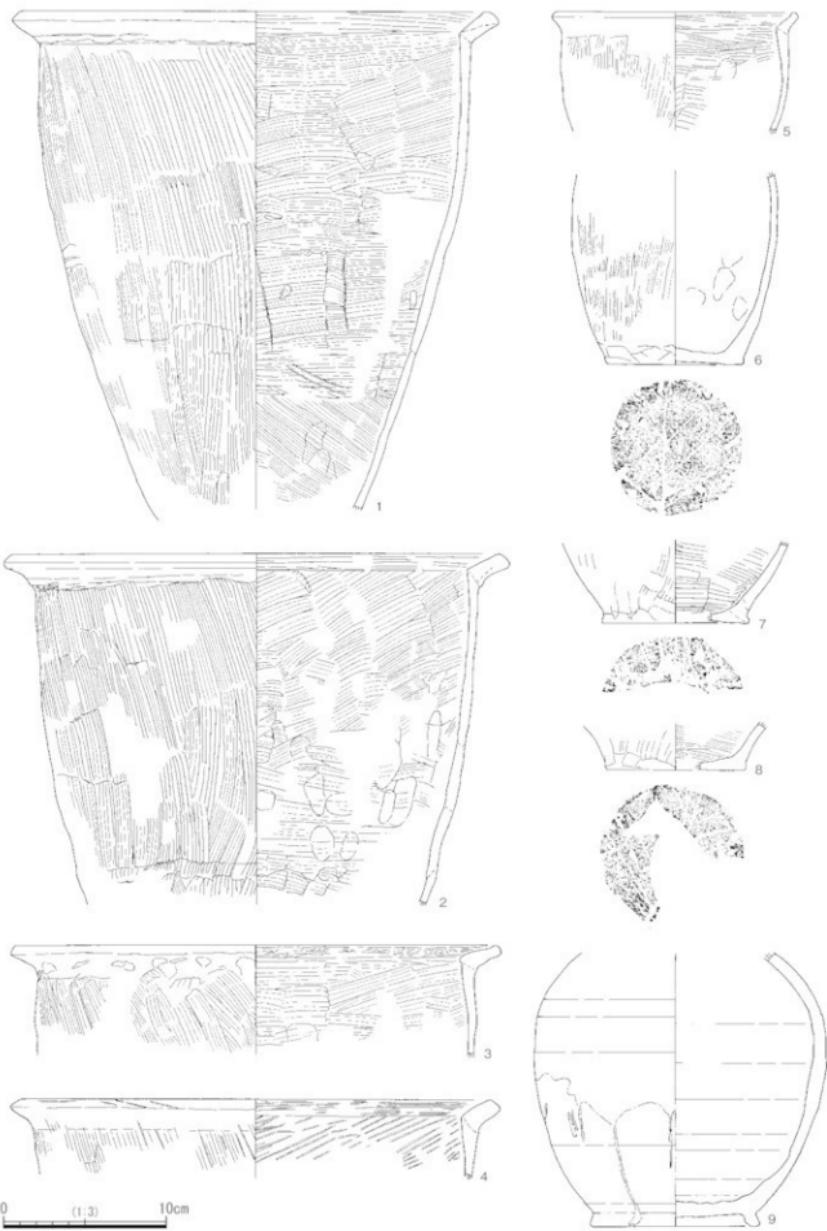
2住



第44図 出土遺物(2)

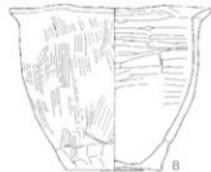
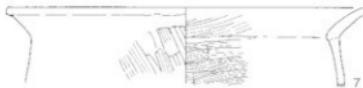
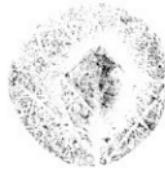
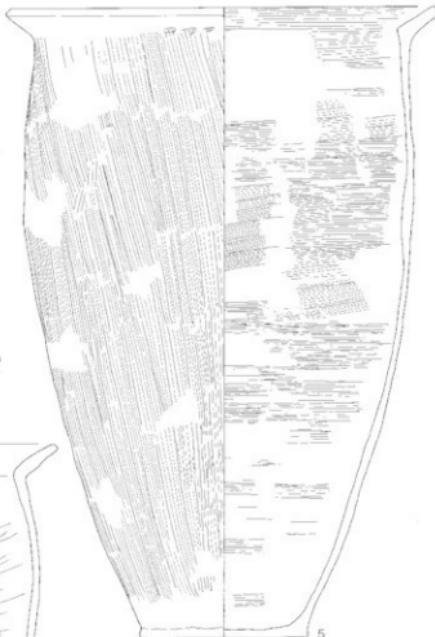
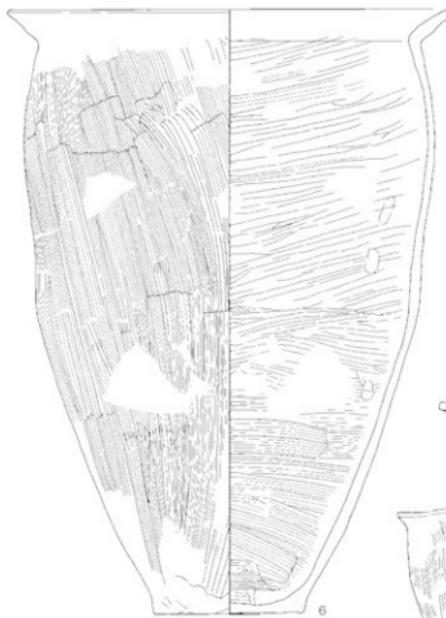
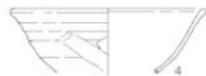
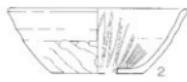


第45図 出土遺物(3)

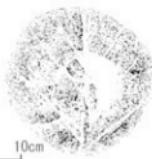


第46図 出土遺物(4)

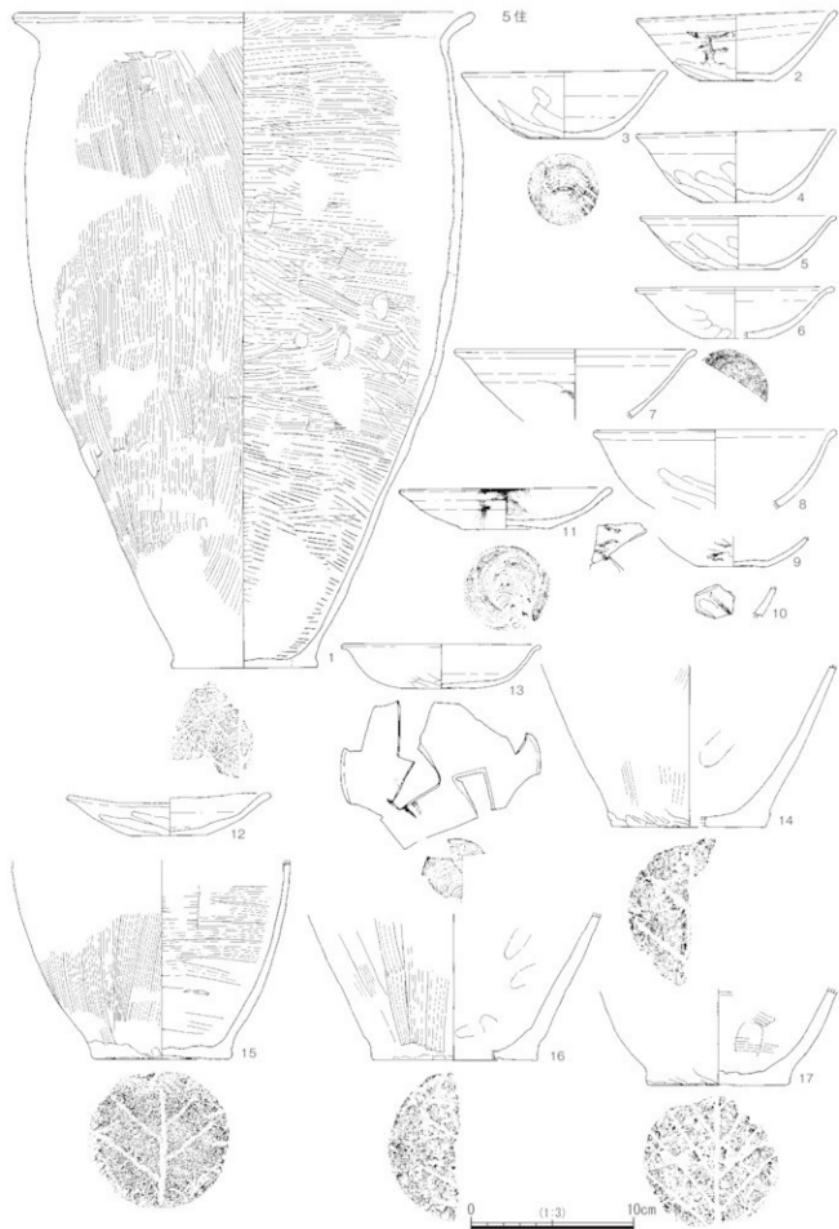
4 住



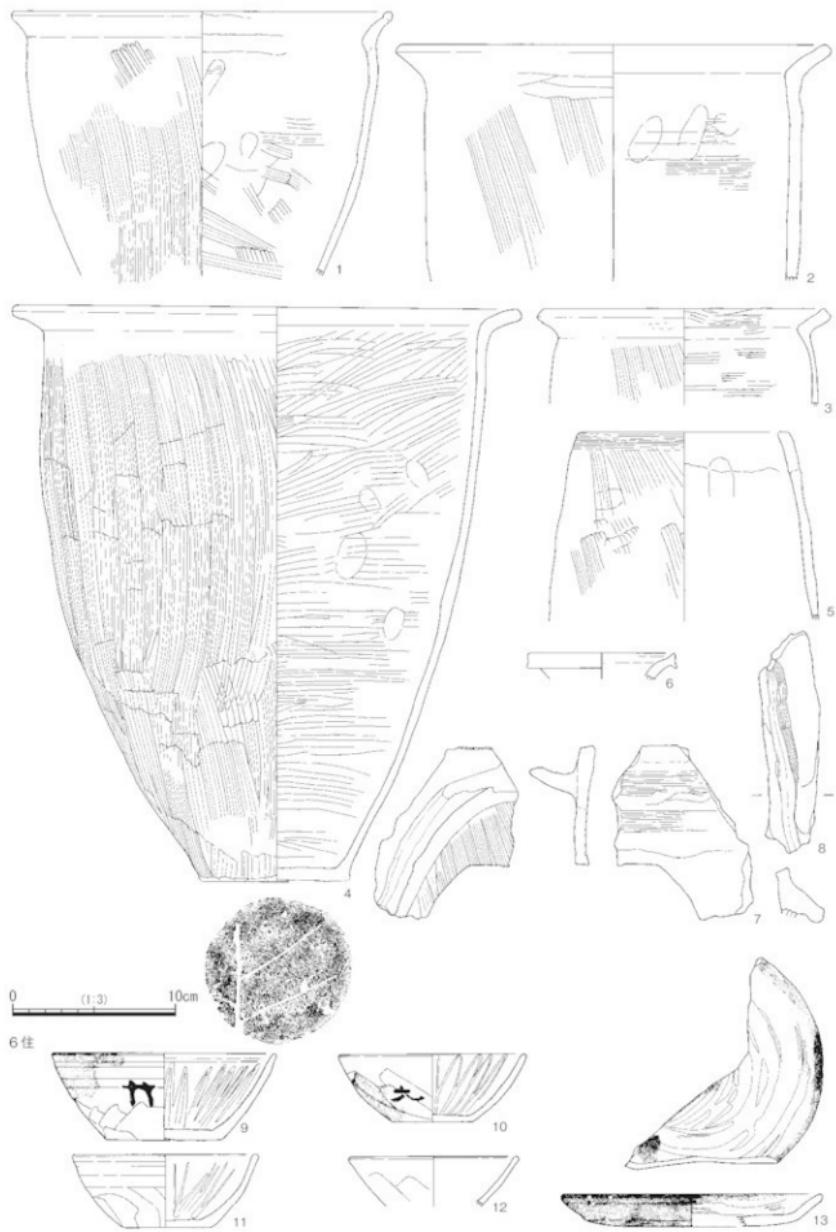
0 (1:3) 10cm



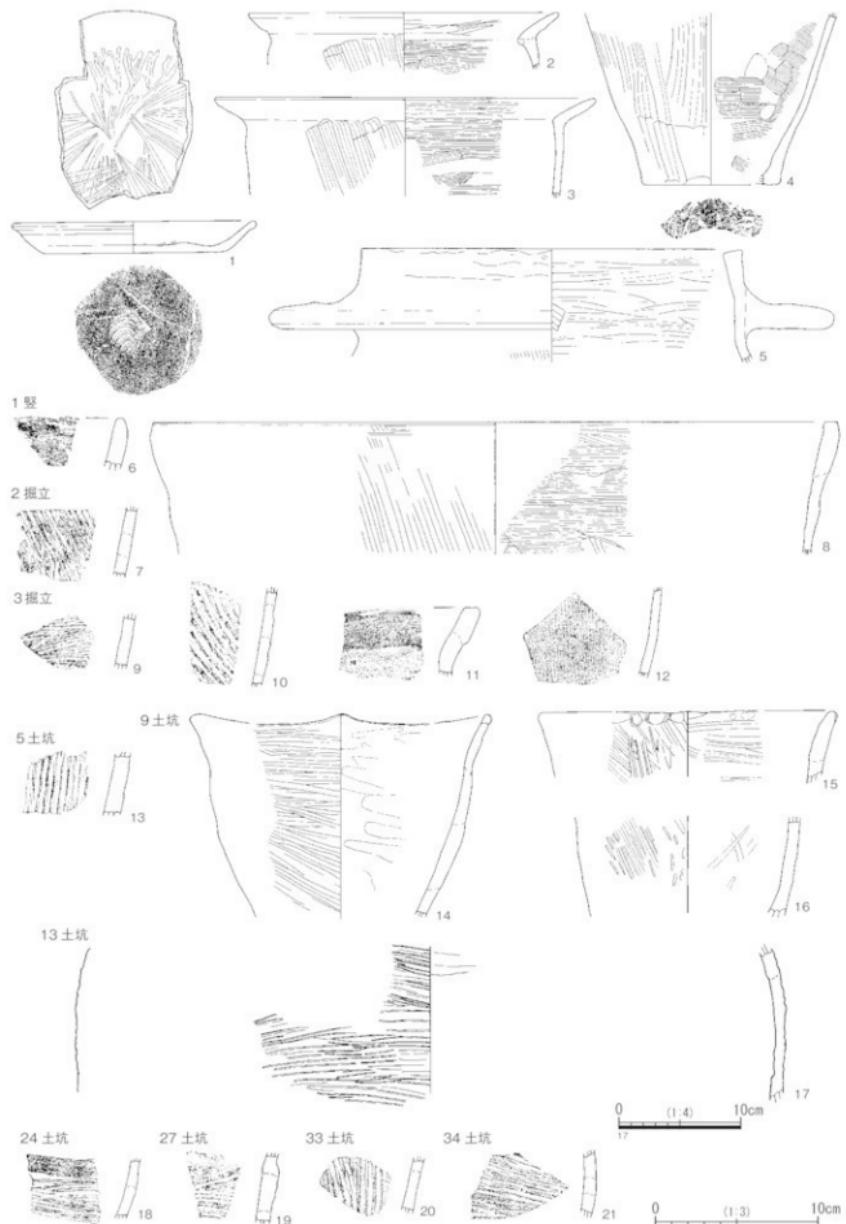
第47図 出土遺物(5)



第48図 出土遺物(6)

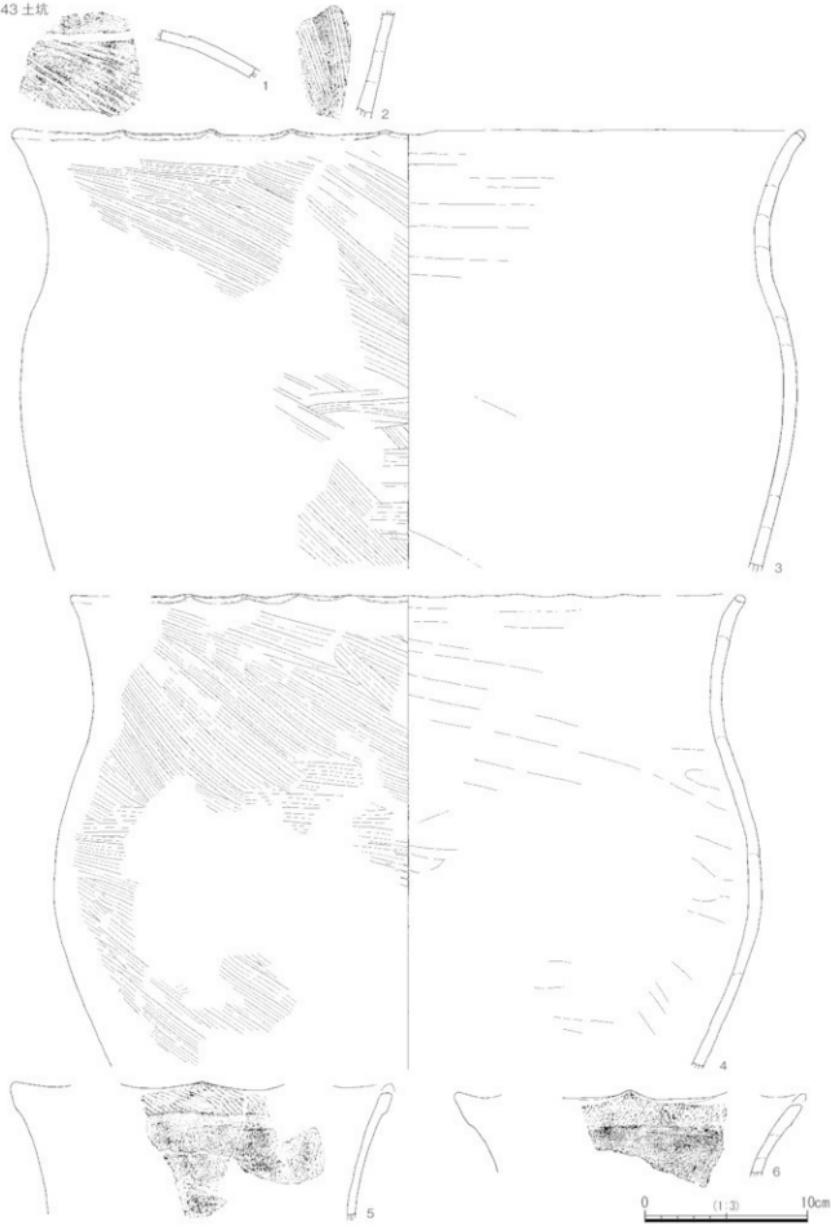


第49図 出土遺物(7)

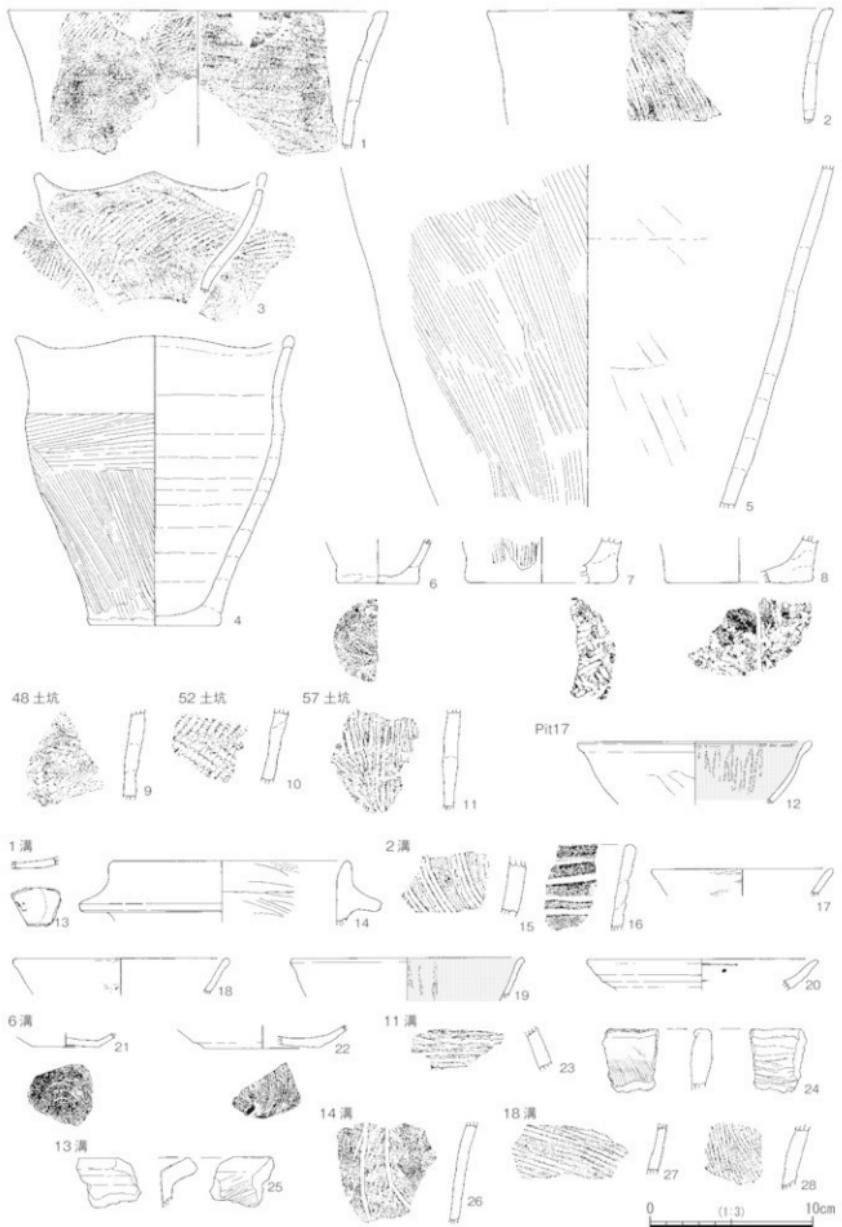


第50図 出土遺物(8)

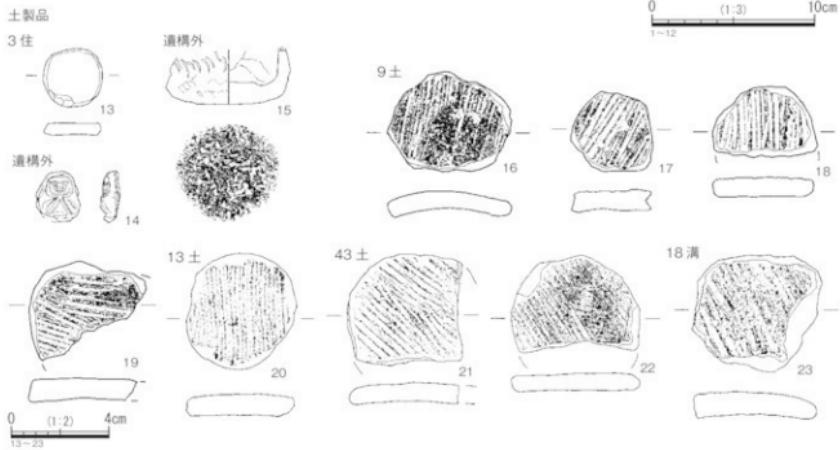
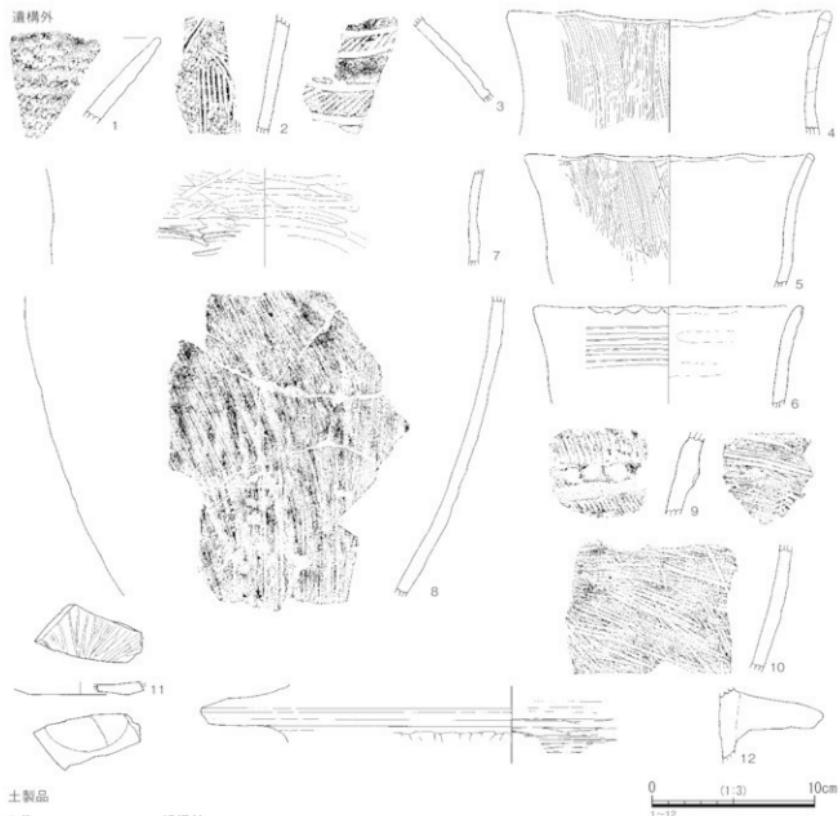
43 土坑



第51図 出土遺物(9)



第52図 出土遺物(10)

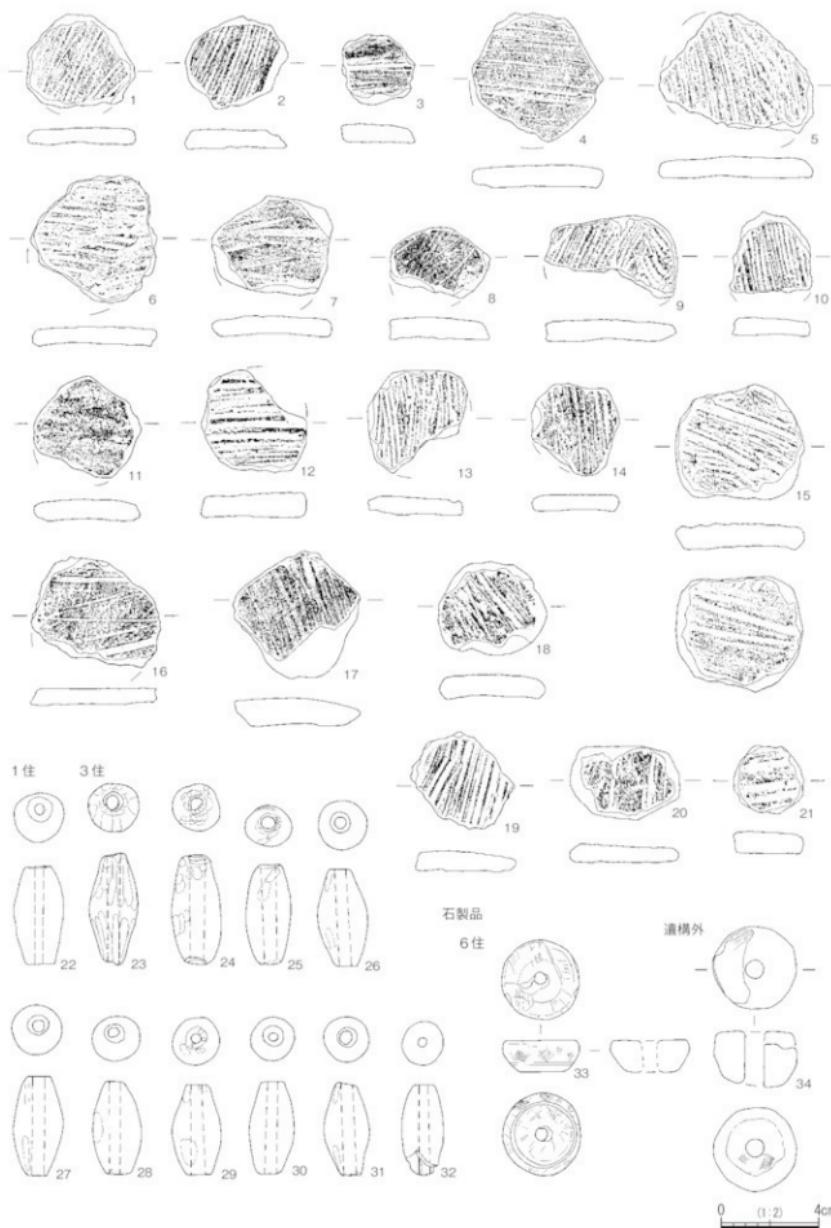


第53図 出土遺物(11)

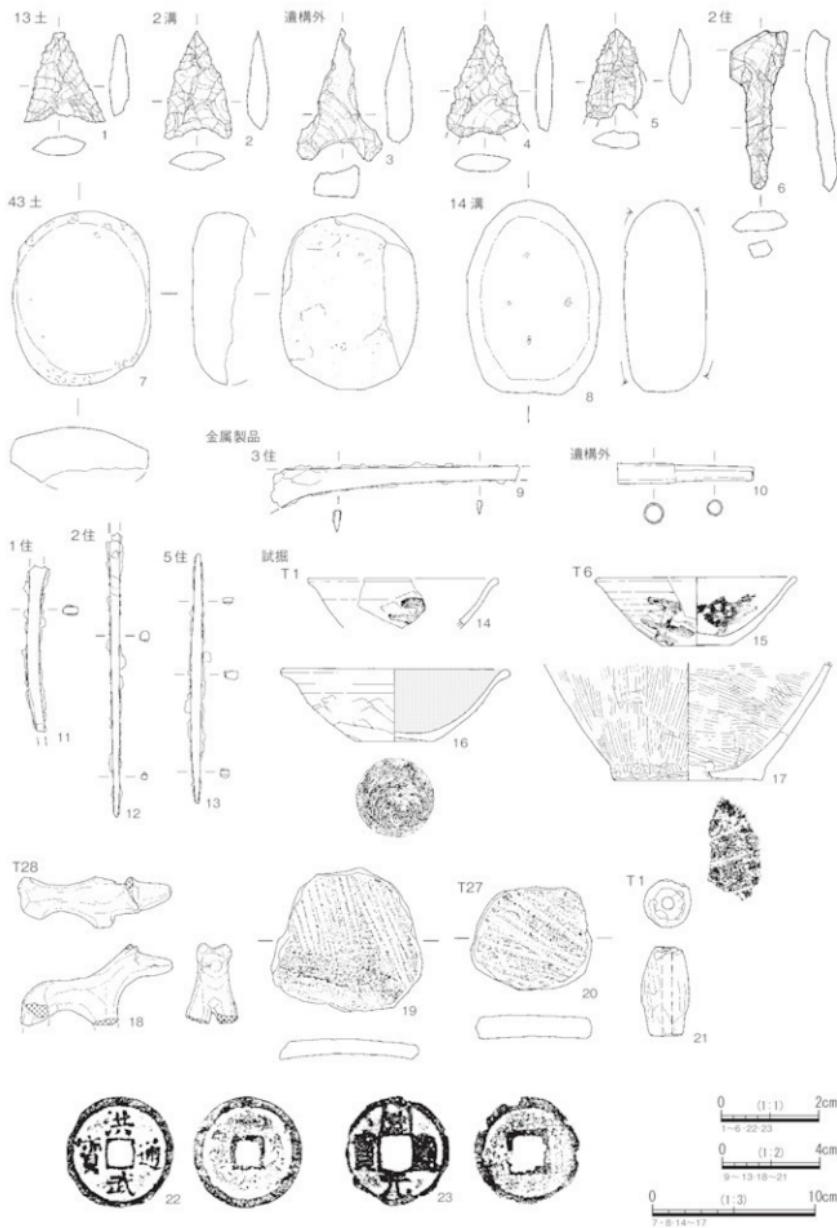
遺構外



第54図 出土遺物(12)



第55図 出土遺物(13)



第56図 出土遺物(14)



1. 日下部遺跡航空写真（1）



2. 日下部遺跡航空写真（2）

図版2



1. 調査前



2. 西区掘削作業



3. 東区掘削作業



4. 造構確認作業



5. 西区調査完了状況



6. 1号住居完掘



7. 1号住居遺物出土状況（1）



8. 1号住居遺物出土状況（2）



1. 1号住居遺物出土状況（3）



2. 1号住居カマド完掘



3. 1号住居カマド遺物出土状況



4. 2号住居完掘



5. 2号住居遺物出土状況（1）



6. 2号住居遺物出土状況（2）



7. 2号住居遺物出土状況（3）



8. 2号住居遺物出土状況（4）

図版4



1. 2号住居カマド完掘



2. 2号住居カマド遺物出土状況



3. 3号住居完掘



4. 3号住居遺物出土状況（1）



5. 3号住居遺物出土状況（2）



6. 3号住居遺物出土状況（3）



7. 3号住居遺物出土状況（4）



8. 3号住居カマド完掘



1. 3号住居カマド遺物出土状況



2. 4号住居・1号竪穴状遺構完掘



3. 4号住居遺物出土状況（1）



4. 4号住居遺物出土状況（2）



5. 4号住居遺物出土状況（3）



6. 4号住居・1号竪穴状遺構遺物出土状況



7. 4号住居カマド完掘



8. 4号住居カマド遺物出土状況

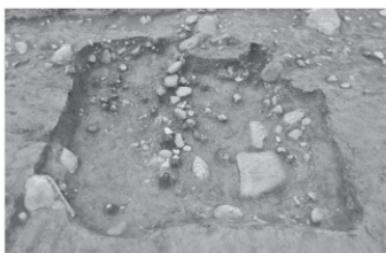
図版 6



1. 5号住居窓掘



2. 5号住居遺物出土状況（1）



3. 5号住居遺物出土状況（2）



4. 5号住居遺物出土状況（3）



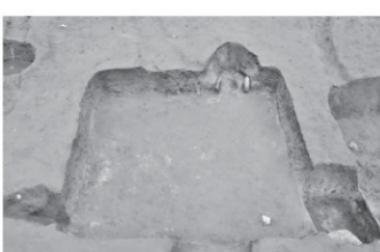
5. 5号住居遺物出土状況（4）



6. 5号住居カマド窓掘



7. 5号住居カマド遺物出土状況



8. 6号住居窓掘



1. 6号居住遺物出土状況（1）



2. 6号居住遺物出土状況（2）



3. 6号居住遺物出土状況（3）



4. 6号住居カマド完掘



5. 6号住居カマド遺物出土状況



6. 1号握立柱建物完掘



7. 2号握立柱建物出土状況



8. 1号土坑完掘

图版 8



1. 3号土坑完掘



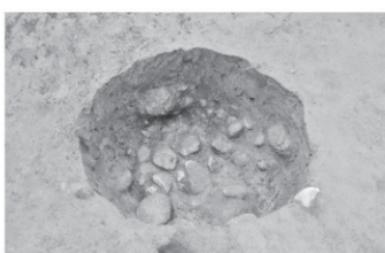
2. 8号土坑完掘



3. 9号土坑完掘



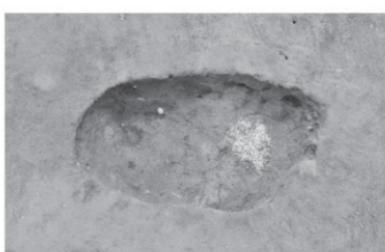
4. 9号土坑遗物出土状况



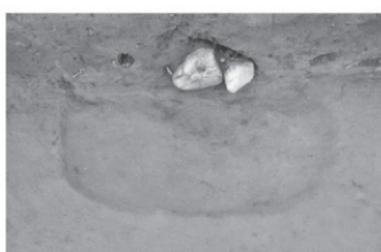
5. 13号土坑完掘



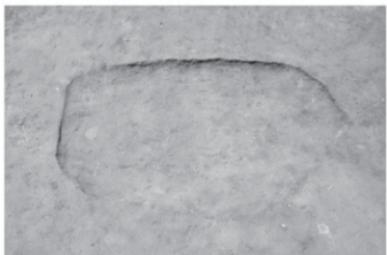
6. 14·16号土坑、Pit11完掘



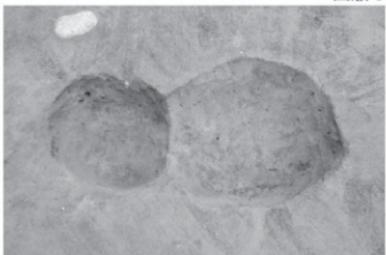
7. 15号土坑完掘



8. 17号土坑完掘



1. 19号土坑完掘



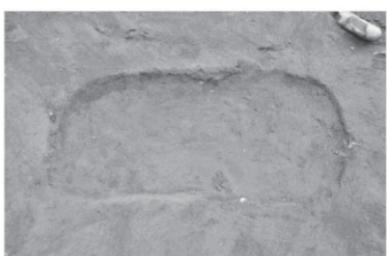
2. 27号土坑・Pit21完掘



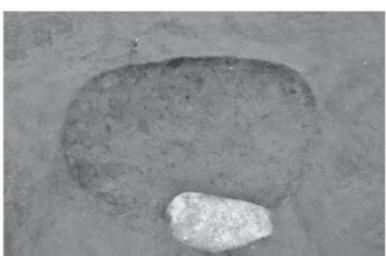
3. 28・29・30号土坑完掘



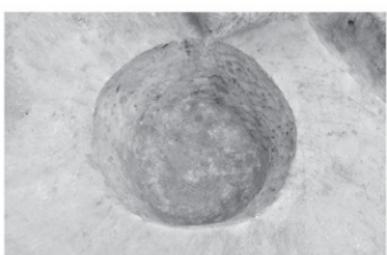
4. 33号土坑完掘



5. 36号土坑完掘



6. 40号土坑完掘

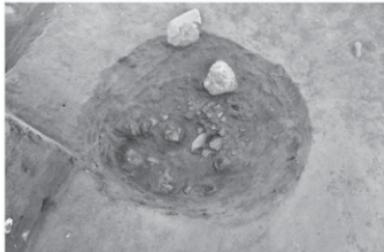


7. 43号土坑完掘



8. 43号土坑遺物出土状況（1）

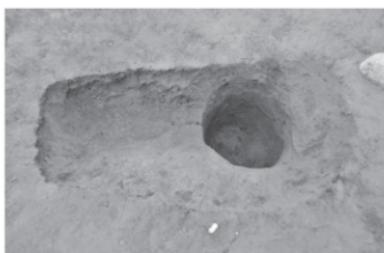
图版 10



1. 43号土坑遗物出土状况（2）



2. 44号土坑完掘



3. 48号土坑·Pit28完掘



4. 53号土坑完掘



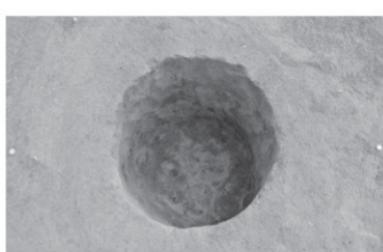
5. 59号土坑完掘



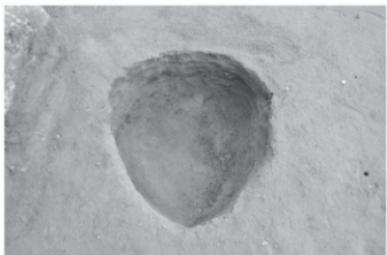
6. Pit 4·5·6完掘



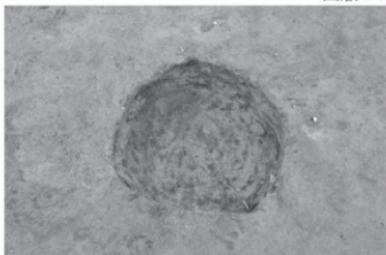
7. Pit13完掘



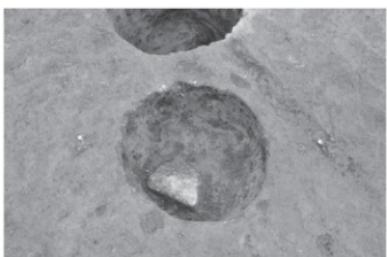
8. Pit14完掘



1. Pit15 完掘



2. Pit38 完掘



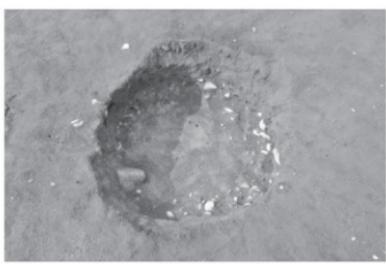
3. Pit39 完掘



4. 1号集石土坑完掘



5. 1号集石土坑砾出土状況



6. 2号集石土坑完掘



7. 2号集石土坑砾出土状況



8. 3号集石土坑砾出土状況

图版 12



1. 1号烧土遗构完掘



2. 1号满完掘



3. 5号满完掘



4. 6·7号满完掘



5. 8号满完掘



6. 9·10号满完掘



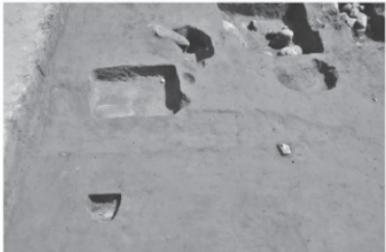
7. 11号满完掘



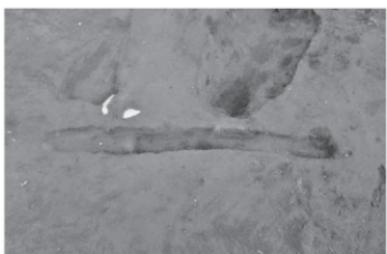
8. 12·13号满完掘



1. 14号溝完掘



2. 15号溝完掘



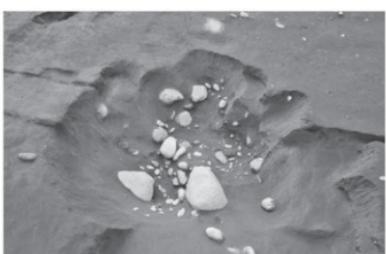
3. 16号溝完掘



4. 17号溝完掘



5. 1号集石遺構完掘



6. 1号風倒木痕完掘



7. 日下部遺跡石柱



8. 日下部遺跡石碑

図版 14



1. 調査風景（1）



2. 調査風景（2）



3. 調査風景（3）



4. 調査風景（4）



5. 見学会風景（1）



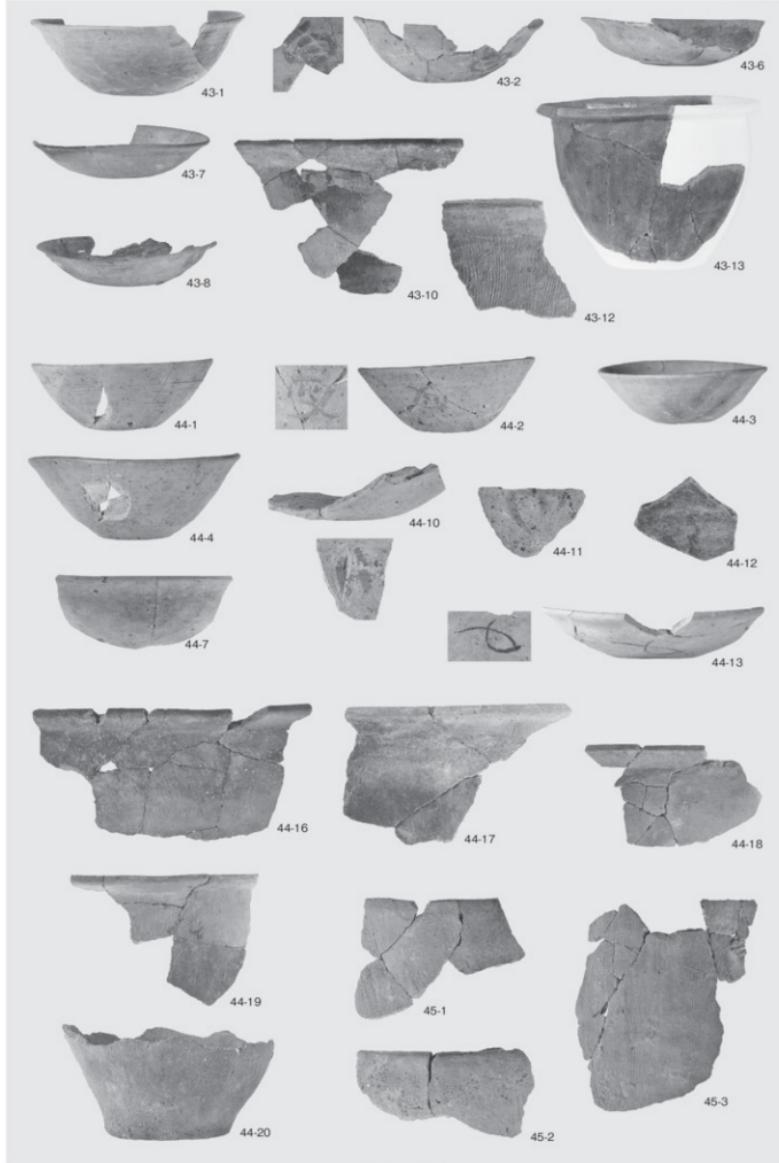
6. 見学会風景（2）



7. 見学会風景（3）

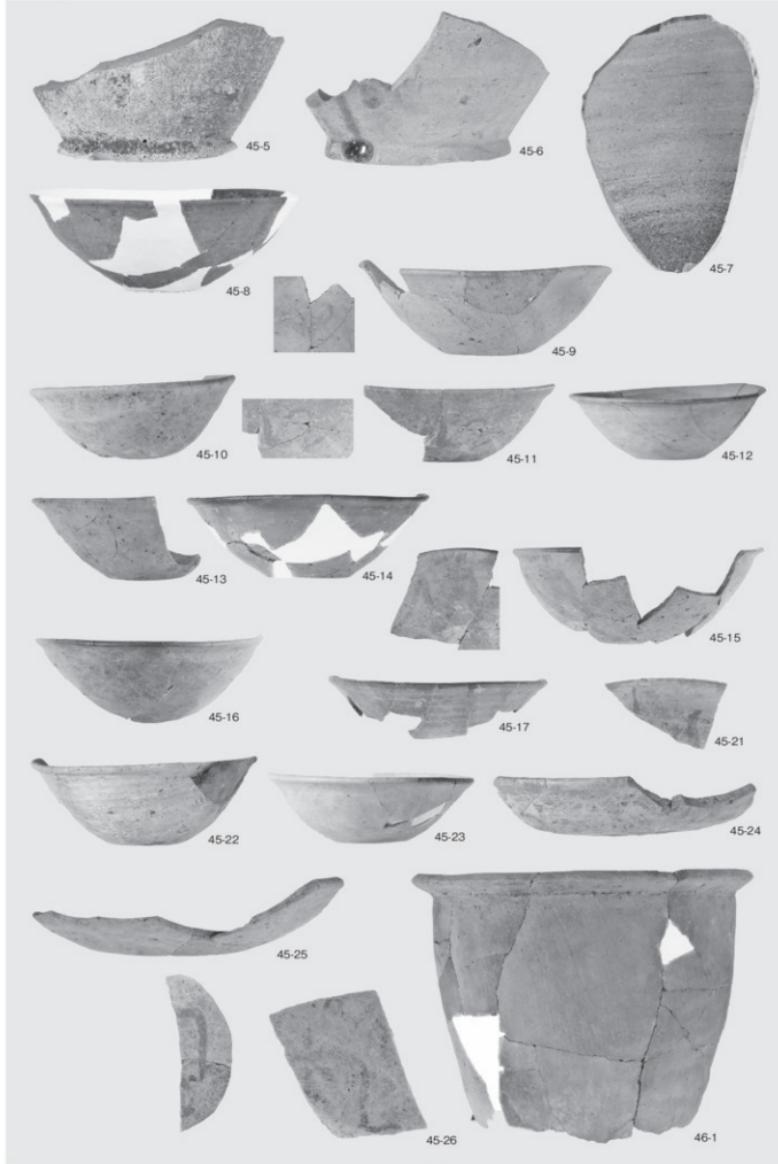


8. 見学会風景（4）

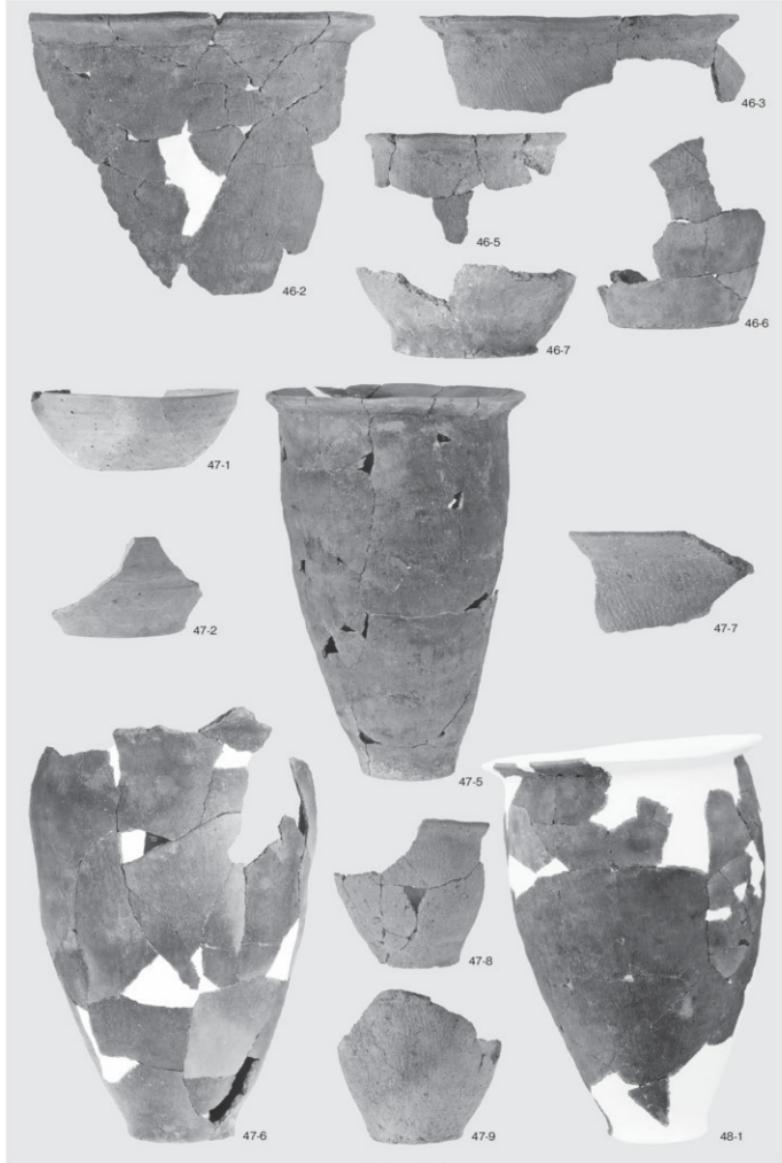


出土遺物 (1)

図版 16

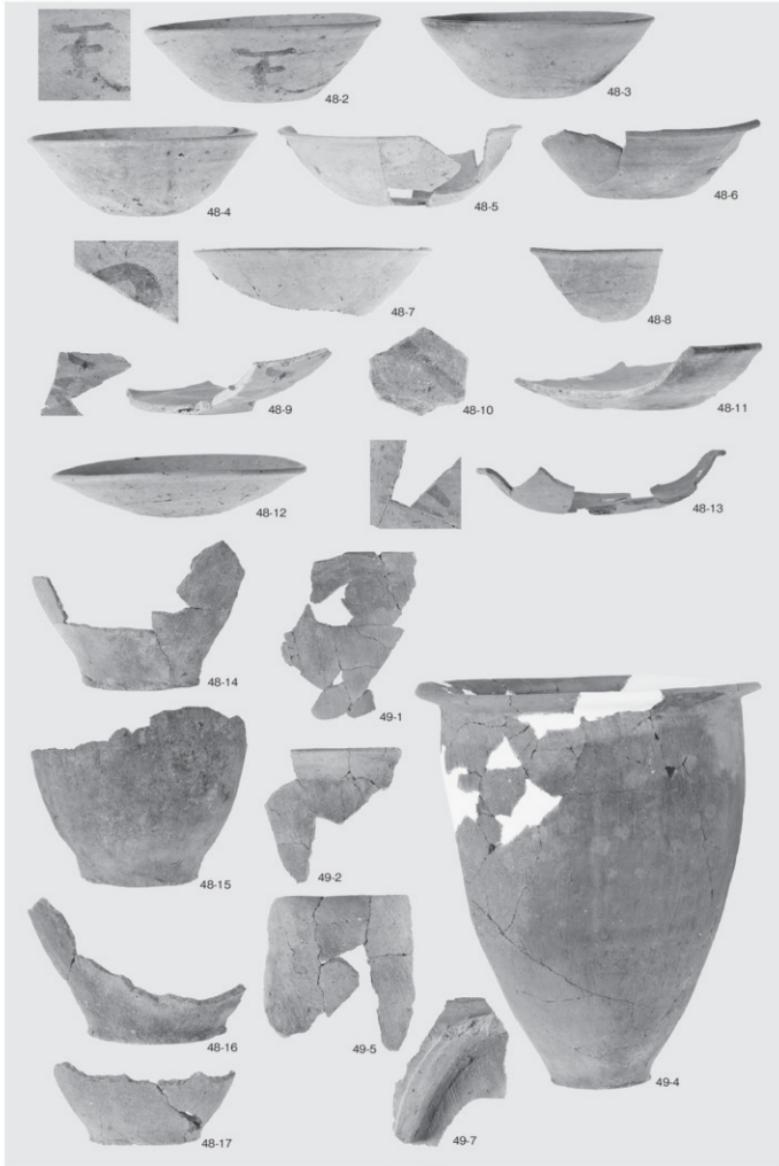


出土遺物（2）



出土遺物（3）

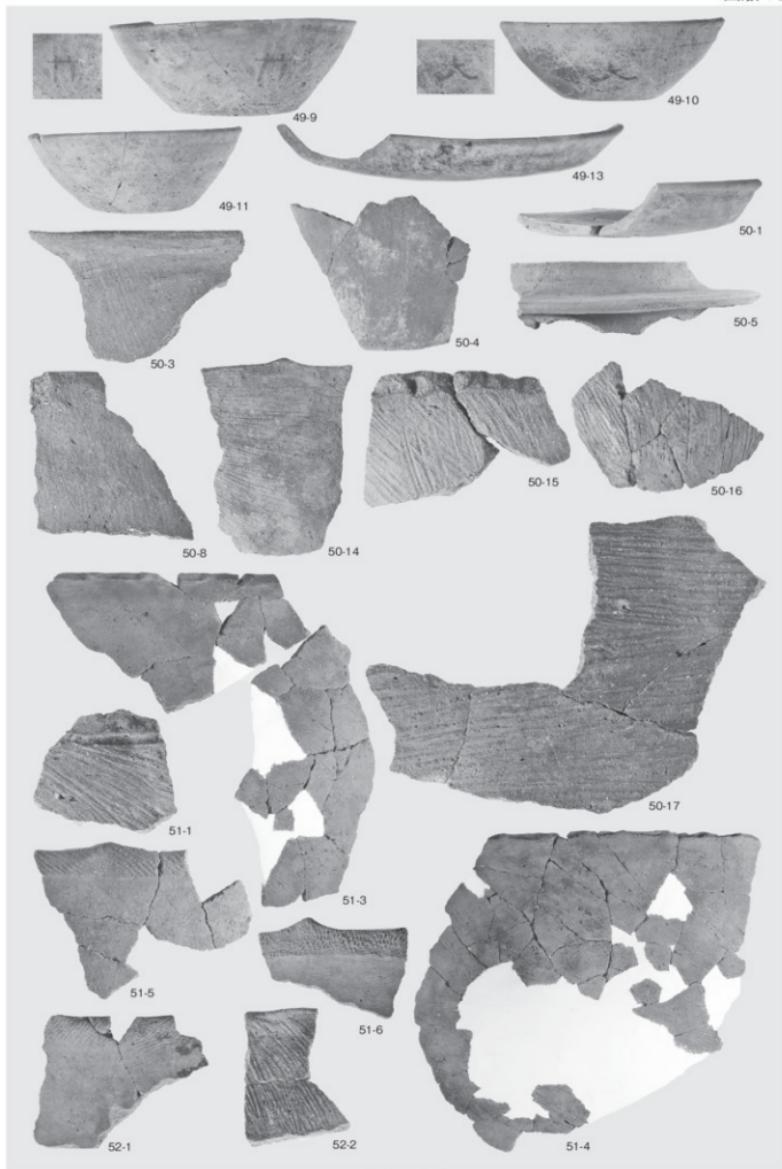
図版 18



出土遺物（4）

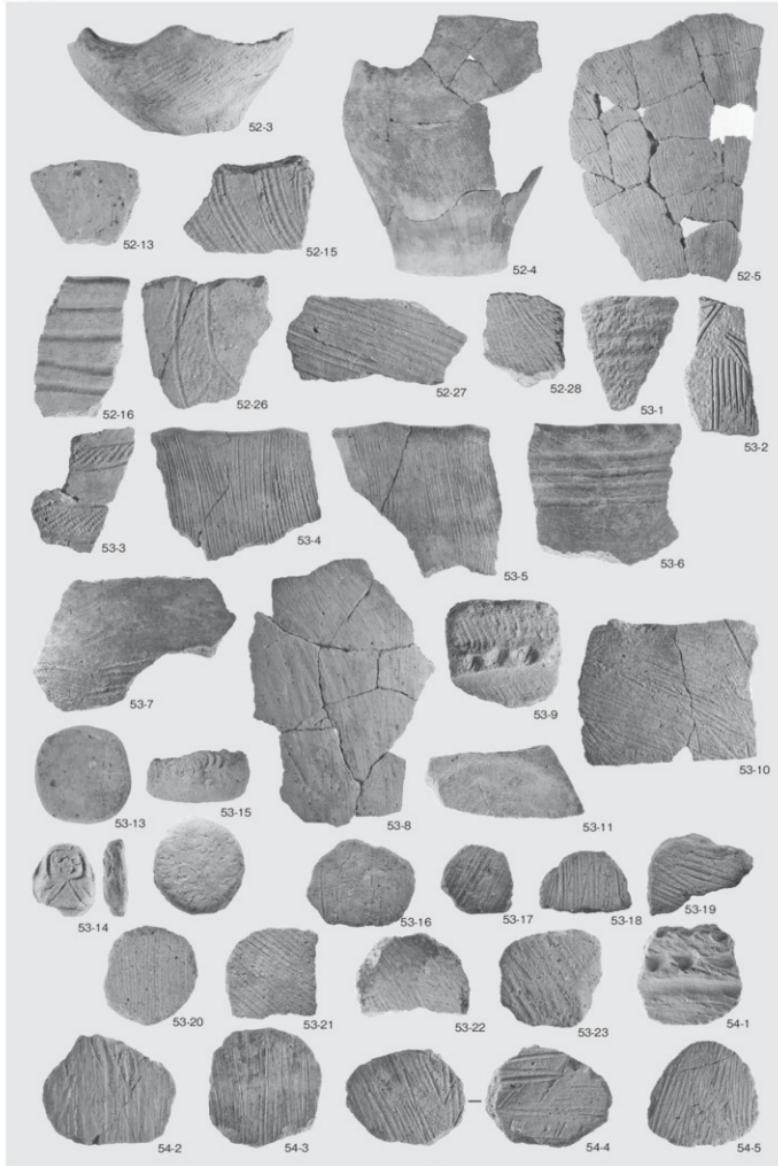


図版 19



出土遺物（5）

図版 20

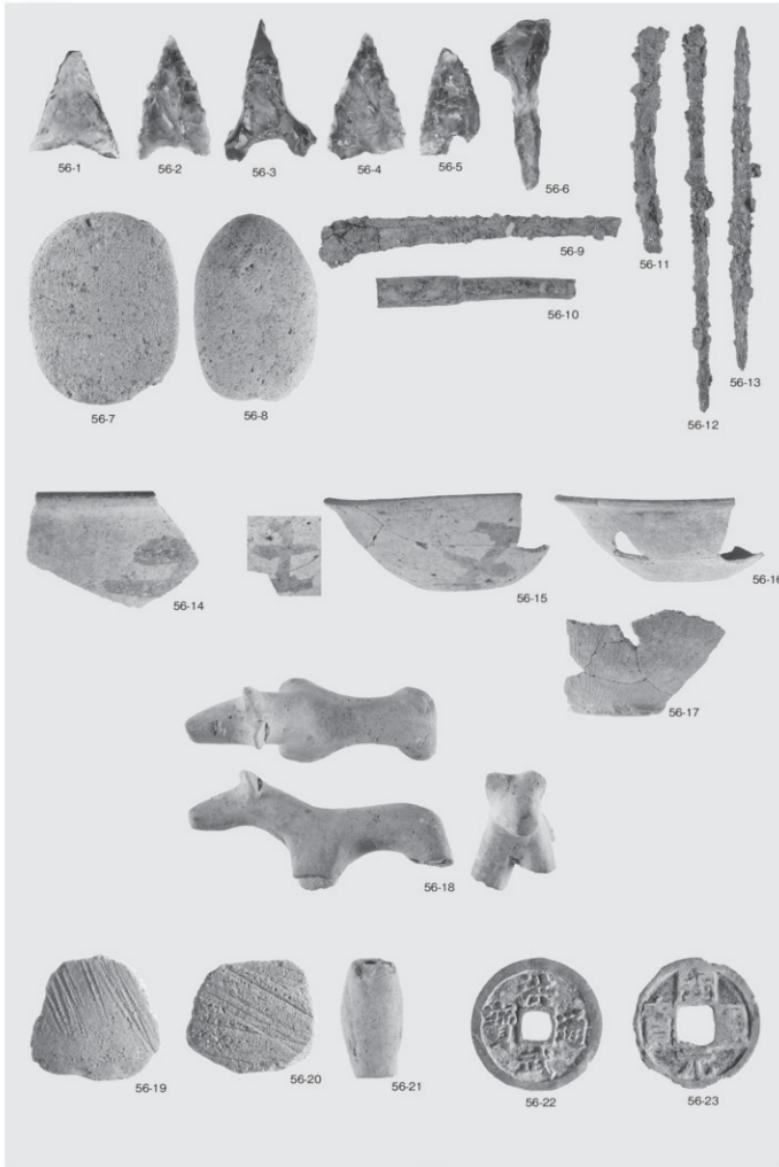


出土遺物（6）



出土遺物 (7)

図版 22



出土遺物（8）

日下部遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	くさかべいせき だいらじちょうさ
書名	日下部遺跡（第6次調査）
副書名	店舗建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨市文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
著者名	宮澤公雄
発行者	株式会社さえきホールディングス 山梨市教育委員会 公益財團法人山梨文化財研究所
編集機関	公益財團法人山梨文化財研究所
住所・電話	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566-2 TEL055-263-6441
印刷日	2016年3月24日
発行日	2016年3月28日
所在地	山梨県山梨市七日市場 676-1
地図名	25,000分の1地形図 塩山
位置	北緯35度42分02秒、東経138度41分46秒
標高	395m
市町村コード	19205
調査原因	店舗建設
調査期間	2012年4月25日～6月25日
調査面積	1,500 m ²
遺跡概要	主な時代 弥生時代、平安時代 主な遺構 堅穴住居、掘立柱建物跡 主な遺物 土器（土師器、須恵器）、石器（石器、磨石）、鉄製品（刀子、煙管、古銭）、石製品（軒轅車）、土製品（土鍤、土製円盤）



日下部遺跡
— 店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2016年3月24日 印刷

2016年3月28日 発行

編 集 公益財團法人山梨文化財研究所
山梨県笛吹市石和町四日市場1566-2 Tel. 055-263-6441

発 行 株式会社さえきホールディングス
山梨市教育委員会
公益財團法人山梨文化財研究所

